
空に歌えば

カツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に歌えば

【Nコード】

N2186A

【作者名】

カツオ

【あらすじ】

そこには、いつもの青い空。何も知らない青い空。不良という名称をつけられた俺に変な詐欺師がバンドを勧める。そこから俺の人生の歯車は狂い始めた。そこには不良が体験する事のない青春が待っている。

特別編：全キャラ紹介（前書き）

とりあえずここでは全キャラを紹介します。小説を楽しむために紹介文は短めにしているのでご了承して下さい。

特別編：全キャラ紹介

いながきまこと
稲垣誠

不良卒業希望の高校生。父が社長。副中とギターで音楽界に大地震を起こす。

くろさきつよし
黒崎剛

稲垣達の不良グループのリーダー格。

イケメンで人気者でちよつと調子に乗るが、守るものは守るリーダー。引越する。

おおさわりゅう
大沢竜

幼稚園から稲垣の腐れ縁。

時にはリーダーみたいに人をまとめる。人をよく見るいいやつ。

やらしん
屋良慎

黒崎と負けず、元ジャニーズ。

ジャニーズは先輩を殴ってクビになった。だが、テストは高得点連発。憎たらしい。

おおつかすむ
大塚進

ひたすらなバカ。追試で悪行も出来ない。だが、バカなりにいいことを言う。

ふくなかけんこ
副中健吾

23歳の詐欺師。

結婚適齢期は73歳だと思っている。

はなまじゅんいちろう
実は超人氣バンドのギタリスト。稲垣にギターをやらせた。

碓純一郎

49歳。システムエンジニアの会社をクビになってからは、ハローワークの常連となっている。給料は金融会社に借りている金で渡している。妻子持ち。

なががわようすけ
中川陽介

39歳。TVアナウンサーだったがレギュラー番組が終わりかけて

いて自殺を図ろうとした。

池永凜いけながりん

19歳。売れないバンドのボーカル。解散を相談しているが、本人は解散は反対している。

すすきありさ

鈴木喱里沙

15歳。親に反発して、夜遊び中に誘われた覚せい剤にハマっている。キャバクラ勤務希望。

いながきこうつ

稲垣吾郎

誠の父。裕をクビにした会社の社長。

いながきゆき

稲垣有希

誠の母

いながきもえ

稲垣萌

誠の妹。屋良に惚れていた。

くろさきこうじ

黒崎幸司

黒崎の父。弁護士で元ギタリスト。ある人を弟子にしていた。

くろさきなみ

黒崎奈美

黒崎の母。なぜか稲垣と副中を応援している。

おおさわりょう

大沢亮

大沢の父。お台場に何回も行く。妻を亡くしたが再婚はしないと決

めている。

おおさわしん

大沢慎

大沢の兄。東大を目指しているが…。

やしろこういち

屋良孝一郎

屋良の父。お好み焼き屋だからいつもお好み焼きを食べさせてくれる。

やしろち

屋良早紀

屋良の母。孝一郎と共にお好み焼き屋をやっている。

おおつかしん

大塚進

大塚の父。塾の講師。大塚の頭脳の差にイライラしている。

おおつかようこ

大塚洋子

大塚の母。国語の教師。こちら也大塚の頭脳にイライラしている。

ちなみに二人共東大出。

大塚希美

大塚の姉。こちら也大出。

大塚結城

大塚の弟。ちなみに弟は中高一貫校に一発合格している。

大塚昭子

大塚の妻。もちろんクビを知らない。

大塚麻里

大塚の娘。実はクビを知っている。

中川恋

中川の妹、中川に憧れてアナウンサーになった。

ちなみに両親は共に病気で死亡している。

副中正樹

副中の父、副中を探している。

副中恵子

副中の母。副中を探している。

池永陽一

池永の父。何かと池永と反発している。

池永晶子

池永の母。とてつもなくバンド好き。

鈴木修

鈴木すずきの父。ある事でとてつもなく反省している。

鈴木美由紀

鈴木すずきの母。ある事が原因で拒食症になった。

佐藤良一

大塚の元同僚。大塚がクビになったおかげで課長になった。

池永秀雄

池永の父の父。池永の父にあることで怒っている。

ドラムさん

黒崎が組んでるバンドのドラム。本名は誰も言わない。
ギターさん。

黒崎が組んでるバンドのギター。

誰も本名で呼ばない。ちなみに黒崎はボーカルさんって呼ばれてる。
司会のおっちゃん

ある大会の司会

若手の美容師

副中の髪型をいつもセットしてくれる

太田の先公

稲垣と大沢と黒崎のクラスの担任

ゴジラ

大塚と屋良のクラスの担任。ゴジラはあだ名。本名は本田健一。

校長

稲垣達の学校の校長先生。

なかまひでき
仲間秀樹

中川の先輩のアナウンサー。中川を助けた。

長橋さん（ながはしさん）

長橋楽器店の店長。いつも弦張りをしてくれる。

六田

アイス屋のおっちゃん。無理やり差し入れをさせてる。

ピリオドな妖精

稲垣が緊張すると現れる。副中に作詞と作曲のアドバイスをしてくれる。

作者と友人の微妙な会話

作

「どうだこの小説。最高傑作だろ？」

友

「キャラ多すぎだろ」

作

「…」

友

「やっぱりさー、小説は…（あれから2時間）」

作

「…」

特別編・全キャラ紹介（後書き）

それでは、小説を楽しんでください。

第一話：黒崎の微妙な嘘

それはいつものように晴れた空。ゆっくりゆっくりと流れる雲を眺める男。

「空…か…」

男は空を見ながら呟いていた。

そこはいつも深夜に活動するまるでハムスターのような人間が集まる青春通り。

そこに、いつものように違法改造バイクに乗っている五人組がいた。

だが、今日はパトカーと鬼ごっこしてるみたいだ。

「そのバイク三台、停まりなさい」

違法改造している上に、50ccなのに二人乗りのバイクを見つけて何もしない警察官は見つからないと思う。

「うるせー！！捕まるために停まる不良がどこにいる」

バイクの後ろに乗っている屋良が叫んだ。

「ばか、危ねえよ！！」

屋良が後ろを向いた時の重心でバイクが傾いてしまい、大沢は焦って、右のバイクの方へ走った。

「稲垣、黒崎危ねえ！！」

その声に気付き振り向くと、もう大沢達が乗ったバイクが目の前に来ていた。

「ふざけんなあ！！」

前方の稲垣は、アクセルを上げて、思いっきり左に曲がった。

「ふう、助かったあ」

稲垣はアクセルを戻しながら言った。

「先輩、何してるんですか？あいつら？」

パトカーの助手席にいる警察官が運転席にいる警察官に話しかけ

た。

「ああ、それは俺も激しく思っている」
そういつて警察官はアクセルを思いっきり踏んだ。

「たくよー、お前らはドライバーテクニクがデンジャラスなんだよデンジャラス」

唯一、一人乗りの大塚のバイクには誰も乗らない。
何故ならあと少しで爆発しそうな改造だからだ。

「うるせえ、大塚、英語の小テスト2点だったくせに」

黒崎が指を指しながら言った。

「そんな黒崎くんも15点だけどな」

屋良がタバコを吸いながら言った。

「うるせえ、タバコくれ」

屋良がタバコの箱とライターを投げて、黒崎がそれを受け取った。

「第一、あのテスト20点満点だろ？」

黒崎がタバコに火を点けながら言った。

「いや、50点満点だ」

大沢がクギを刺したように言った。

「えっ？」

「ああ、そうだよな。俺39点だし」

「稲垣くん…」

「俺は45点だけどな」

「すっげーな！！大沢」

「大沢くん…」

「いいからてめえら停まりやがれ！！」

パトカーが我慢出来なくなって叫んだ。

「うわあ、すげえ近い」

「みんな逃げろー！！」

「んで結局逃げ切ったわけよ」

「すごい」

人気者の黒崎が女子に昨日の出来事をはなしていた。

「なーにが逃げ切っただよ。嘘なんか付いちやってよ」

大沢と稲垣がベランダで黒崎たちを見ながら話していた。

「そうだよな。結局嚴重注意を受けたのによ」

実は昨日の夜は確かにパトカーに逃げきった。

だが、黒崎がコンビニに寄ろうとした。

パトカーから追われてたのが普通コンビニに行くか？と稲垣は思った。

黒崎が行ったコンビニにはパトカーとしか表現出来ない車があった。

だが、黒崎は『行こうぜ！』と言って中に入った。

えー！？普通これ見てパトカーに気づかない？と四人は思った。

その頃、黒崎は中に入った途端、レジで精算している警察官と目が合った。

「あー！ー！！」

警察官は呆れながら叫んだ。

警察官ながら普通パトカーが停まってるのに入るかと思ったからだ。

「あつ、おはようございます」

警察官は呆れながら立っていて、4人は涙を流しながらコンビニの入り口の前で崩れていた。

警察署で5人の保護者と担任が来て、嚴重注意の上、家に帰った。

黒崎はいつもそうだ。

いつも俺たちが悪いことをすると、いつも警察に追われる。

万引きして逃げたらいつも交番の前を通るし…。

あれはワザとなのか？稲垣は捕まるといつもそう思う。

「でもよー、よくこんなに捕まるのにいつも自宅謹慎か何も無いよな」

「全部ゴジラのおかげだよ。ゴジラの父ちゃん、教育委員会の会長

だもんな」

ゴジラとは大塚と屋良のクラスの担任で、いつも稲垣達を助けている。

でも先生が何故こんなにもあの五人を助けるのか。実はそれにはある理由があった。

それは、五人が学校を帰ってる途中、リンチを発見した。しかもリンチしてるのは犬猿の中の高校だった。

「黒崎、どうする？アイフル」

「もちフアイト」

その後、五人はうおおと叫びながら走っていった。

30分後。

「はぁ、はぁ。ふうー、久しぶりに本気で喧嘩したな」

稲垣が傷がついた拳を見ながら言った。

「とりあえず、こいつ、助けようぜ」

大沢が倒れている被害者を指指しながら言った。

屋良が被害者の所に行った。

「おーい、平気か……ゴジラやんけ……」

「はぁ、ほんま！？関西弁だよ」

「とりあえず病院だ！！」

もうちよつと遅くに発見されたら死んでいたそうだ。

それを知ったゴジラは命の恩人と慕って、五人の処分を甘くしていたのだ。

「ところでさ、なんでマツポに捕まってるのに処分軽いの？」

一人の女子が黒崎に聞いた。

「俺のじいちゃん、町長なんだ」

ちげえよ。二人は思った。

第一話：黒崎の微妙な嘘（後書き）

嘘を付いている黒崎に不信を抱いてる4人。そんな中、稲垣が不良を卒業したくなった…。

第二話：不良卒業計画（前書き）

すいません。第一話を第二話にしちゃいました。すいません。

第二話：不良卒業計画

「なあ黒崎、最近女子に嘘ばっか付いてるじゃん」

稲垣が隣のクラスに行つて、屋良と大塚に話をした。

「そんなん女子にモテてえからだろ」

屋良がほぼ確定的な答えを出した。

その答えに大塚と稲垣も頷いた。

「でもなあ、女子にモテてえからつて嘘付くのはどうかと思つぜ」

大塚がまともな答えを出したから屋良はちよつと啞然としていた。

「まあなあ、後々嫌われるしなあ」

「なあ」

大塚が話していると、教室のドアが開いて、先生がピラピラ紙をなびかせた。

「大塚あ、追試だぞー」

「しまった！！」

「また大塚追試かよう」

黒崎が3人が今まで見たことがないバイクを乗りながら言った。

「黒崎…なんだい、このバイクは」

「買つてもらつたんだようい」

黒崎がブオブオとバイクをふかした。

「ホストでもやってるのか？」

屋良が稲垣に耳打ちをした。

「当たり前だよなあ」

稲垣がぼそつと言つた。

何か黒崎の顔が怒りに満ち溢れた顔をしていて屋良は内心びびつた。

「ホストじゃねえよお」

「聞こえたのかよ…」

稲垣が黒崎をじいつと見た。

「これを日本語で地獄耳って言うんだよ」

黒崎は微笑みながら言ってバイクをふかした。

「なあ」

「なんだいなんだい黒崎くん、どんどん言いたまえよ。グチ、不満とかよお、ははは、これじゃあ遅く起きた朝はになっちゃうよな。ははは、あ、貴理子結婚したの知ってる？知るわけ無いよな。だって俺しか知らないもん」

こいつ、酔ってるな…。3人はそう思った。

「今は言わない方がいい」

大沢が優しく肩を叩きながら言った。

「はあ…」

稲垣は歩きながら考えていた。

本当に、不良を卒業出来るのかと。

稲垣がそんな風に思ったのは警察に厳重注意を受けた後、こんな事があった。

もちろん警察には親が来ていた。稲垣の場合、父親が来ていた。車に乗った後、父親は『情けない…』と呟いていた事に稲垣はちょびつと（！？）反省していた。

家に着くと、稲垣の母親が涙ぐみながら稲垣の所に来たのにもちよつと（！？）反省した。

居間に来て、稲垣は俯いていた。

そんな稲垣を見た父親は正座をしたと思ったら土下座をしてきた。

「ど、どうしたんだよ。親父が急に…」

稲垣は驚きながら言った。

「あんな奴らとツルんでもいい。バイクを乗り回してもいい。だが、人に迷惑かける事はやめてくれ。頼む」

そんな父親を見て、稲垣は落胆した。

ついに俺も…親父を土下座させちゃったなあ…。

現不良高校生が言うのも何だが、両親のみじめな顔を見るのなら、不良を卒業の方がマシだ。稲垣は決心した。不良を辞める事を。

でもそれにはどうすればいいのか…。稲垣は考えた末、二つのパターンを考えた。

不良卒業計画。その1。

黒崎だけを呼ぶ。

黒崎

「なんだよ、話って…」

稲垣

「実は俺…不良を卒業したいんだ…」

黒崎

「どうして？（怪しい笑顔）」

稲垣

「実は…かくかくじかじか…なんだ」

黒崎

「ほーう…」

稲垣

「いいのか？」

黒崎

「んなわけねーだろこのバカチンがあ（殴る）」

稲垣

「ぐふああ」

と、あっさい素直に殴られる。

不良卒業計画。その2。

集会の時間を確認する。

もちろん、バックレる。

黒崎

「よし集まったか…。稲垣はどこだ？」

誰か

「さあ…」

突然のメール。

誰か

「稲垣からだ…」

誰か

「はあ！？旅に出るだど！？」

黒崎

「マジかよ…返信しようぜ！！」

四人、メールをする。

もちろん返さない（にっこり）。

誰か

「帰ってこない…」

黒崎

「稲垣い！！」

みんな

「稲垣い！！」

感動するので稲垣は不良卒業計画。

その2に決めた。

ちなみに集合は明日の午後9時。その日を楽しみに稲垣は寝る事にした。

第二話：不良卒業計画（後書き）

不良卒業計画。その2を実行を予定した稲垣。
だが、黒崎はただの不良じゃなかった…。

第三話：ピリオドな妖精

ついに朝になった。

稲垣はいつもより早く起きた。てか寝なかった。緊張しすぎて寝れなかった。

だが、稲垣は夜中に変な事件が起きた。

それは、稲垣がメールの内容を考えている時に、シャラシャラとまるで複数の鈴を鳴らしている音がしている。

その音で稲垣が癒されている時に赤とピンクと水色の光の玉がたくさん出てきてグルグルと円を囲んだ。

稲垣はメールの内容を考えている時に寝ちゃったのかあと思っていた。

すると、光の玉が囲んだ円の中から羽が生えていて、黄緑色のヒラヒラした服を着た少女が現れた。

稲垣は啞然としながらこの状況をゆっくり把握していた。

「こんにちは」

その少女はフワフワ飛びながら間違った挨拶をした。

妖精なのか？稲垣はこの状況を認めていいのか分からないまま頭を下げた。

「私はピリオドな妖精」

「ピリオドな…妖精…」

稲垣はこの妖精のネーミングに疑問を持ち始めた。

「私は、選ばれた人にしか見えない。そう、あなたは選ばれたの！」

「選ばれたの？俺が？」

妖精は笑顔で何回も頷いた。

稲垣はバカらしくなってきた。

「はあ？んなもん選ばれなくていいよ。んなら懸賞みたいなのに選ばれてほしーよ」

「んざけんな、うりゃー」

妖精はリアットした。何故かそれがクリーンヒットした。

「妖精ってプロレスラーなんだ…」

稲垣は倒れた。

その頃、妹の萌が今までの様子をドアの隙間から見ていた。

「ねえ、お母さん。兄貴寝ぼけてるよ…」

「ええ、どうしたの？」

稲垣の母親も来た。

「なんかピリオドの妖精とか言っで、一人で倒れてる。キモいよ、兄貴オタクになったの？」

「お父さんがあんな奴らとか言っただからかな」

萌は有り得ない顔をした。

「ひでえ、ひでえ。もし屋良様とツルむなって言われたらうちもそうする」

「……様って」

その後、稲垣が起き上がると朝になっていて、妖精もいなかった。俺…夢でも見てたのかな。

稲垣がそう思いながら起きると、布団の上に羽が落ちていた。

拾ってみると、普通の鳥よりは小さすぎる。まるで妖精のような感じだ。

稲垣ははっとした。

「これは、夢じゃない」

稲垣は学校の準備をした。

「いつてくる」

「誠、朝ご飯は」

「いらない」

そう言っで家を出ようとした時。

「兄貴」

稲垣は萌に呼ばれた。

「なんだよ萌。早くしてくれい」

「実はさ、兄貴昨日妖精とか言いながら一人で倒れてるのをドアの

隙間から見てたんだ。超キモかったよ」

「やっぱり、夢じゃないんだ」

稲垣が呟くと、『えっ?』と萌の返事が返ってきた。

「いやなんでもない。いつてくる」

稲垣はドアを開けて颯爽に出ていった。

あの妖精、何なんだ?急に現れやがって…。

「俺は妖精が来て欲しいなんてオタクじゃねえよ」

稲垣は一人で叫び声を挙げていた。

「何一人で叫んでんだよ俺、バカみてえ」

稲垣が我に戻って独り言を呟いた。

「ほんと、バカみてえ」

は?と思つて稲垣が後ろを向くと、大塚が笑いながら歩いてきた。

「なんだ大塚か…つておめーにバカつて言われたくねえよ!!」

「まあまあ、…そっーだ。稲垣、俺今日何とか追試合格したから今日

日は来れるぜい」

「マジでおめでとう」

稲垣はガッツポーズをした。

こいつ、こんなに俺の事を心配していたのか…。

大塚はそんな稲垣を見ながら思つて涙がポロリと出てきた。

「つて何で泣いてんだよ」

「稲垣…おまえ…おまえ」

「キモいよ、ふうー」

「大塚出れるだー!!」

学ランの下にキラキラ光ったシャツを着ている黒崎が笑顔で怒鳴つた。

「黒崎、このシャツは…?」

大沢が指を指しながら言った。

「買ってもらったんだよおい」

「やっぱり、ホストだな」

大沢が稲垣に耳打ちをした。
「……」

午後9時になった。

「集まったかい、不良諸君」

黒崎が買ってもらった黒光りのバイクをふかしながら叫んでいる。
「稲垣がいないけど……」

大沢が言っと、黒崎はサングラスをずらして『ぬあに?』とキレ始めた。

一方、稲垣はメールを打ち終わって一呼吸をしていた。
「うし、そー、送信!!」

稲垣は送信ボタンを押した。

黒崎達にメールが届いた。

「あつ、稲垣からメールだ」

大沢がケータイを開いた。

「あつ、俺もだ」

「オレも」

大塚と屋良もケータイを開いた。

「あいつう、また下痢で来れないのかあ?」

黒崎がははと笑いながらケータイを開いた。

「あいつ下痢で行けなかった事あったっけ?」

屋良が聞くと、黒崎がキレながら『ねえよ!!』と叫んだ。

「……」

「はあ?旅に出るって」

「家出か?ついに家出か?」

「あいつ、家にいるな」

黒崎はケータイをポケットに入れた。

「何故に?」

大塚が聞くと、黒崎は笑顔なのか分からない顔になっていた。

「あいつな、小学生の時に授業が始まる前に机に旅に出るって置き

手紙を置いて帰った事があったからぜってー家だ」

「へえ」

黒崎はバイクのアクセルを回した。ブオオオとバイクが鳴く。

「おめえら行くぞ！！」

「お、おう」

四台のバイクが稲垣の家へと向かった。

一方、稲垣は落ち着いてネットサーフィンをしていた。

不良からボランティアへと移動した青年の物語を見ていた。

「ふへー、いい話だなあ。…みんな稲垣いつて言ってくれたかなあ」

稲垣は一人でシラケた。

「もいいや、寝よう」

稲垣はベッドに潜った。

そして、不安な結果を考えていた。

不安な結果。その1。

黒崎「…んにやるー、俺の許可無しで旅なんか出やがって…（何故あんたの許可必要？）」

大沢「どうする？黒崎」

黒崎「もちろん、リンチタイム」

誰か「でも4人じゃなあ」

黒崎「ふふふ、俺の部下は8000人って知ってた？」

誰か「マジでー、俺らのほかにこんなにいやがって」

黒崎「違う、おまえらも（につこり）」

誰か「ひい」

黒崎「行こうぜ」

鳴り止まないバイクのふかし音。

その2は無し。残念。

稲垣は急に緊張してきた。

すると、また光の玉が円を囲んだ。

「またかよ…」

稲垣はちよっとへこんだ。

「そう、また私」

昨日の夜中、見事にラリアットをクリーンヒットしたピリオドな妖精だ。

「なんだよ、またラリアットしてきたんかよ」

「違うの、緊張する度に現れちゃうの私」

「ふーん、はっ！？」

稲垣が怒鳴った。その反動でピリオドな妖精がちよっと飛んだ。
「なあもしやテスト直前に出ないよなあ？」

「緊張、しなきゃあねえ」

「ふざけんなよ」

稲垣は崩れた。テスト直前に現れたらクラス全員に変人のオタクだと思われるからだ。

すると、何台ものバイクのふかし音が聞こえた。

「なんだ、この音：バイク？」

部屋を見渡すと妖精がいない。

「くそ、いい所でいなくなりやがって…」

稲垣は普通のバイク小僧かと思ったが、音からしてこっちに近づいてくる事が分かった。

「やべえよ、不安な結果。その1か？」

だんだんバイクのふかし音が出てくる。

稲垣、最大のピンチ！！

第三話・ピリオドな妖精（後書き）

バイクのふかし音…。これは誰のものなんだ？
稲垣は震えている。

さらば、俺の人生よ…。

第四話：黒崎、悲しみの笑顔

だんだんとバイクのふかし音が近づいてくる。
ついに俺の人生も終わりを告げたな。

せめて、もっと充実した人生を送りたかったな。

稲垣は落胆して崩れると、『稲垣』って黒崎の声が聞こえた。
ヤラれる。稲垣は必死に窓の下へと隠れた。

「稲垣の字の半分は、ガキガキガキ」

オヨヨ、怒ってないの？ S M A P 歌ってるし怒ってないのかあ。
稲垣は顔を出した。

「てめえ

%
=!!」

「キレすぎて何言ってるかわかんねーよ!!」

大沢がとつさにツツコミをした。

「なんで旅に出るって嘘ついたんだよ？」

大沢が訪ねると、稲垣はうつむいたまま何も喋らなくなった。

「てか旅に出るって嘘がどうかと思うぜ」

屋良が笑いながら言った。だが稲垣は何も言わない。

「あでも何でもいいから答えてくれ。頼む」

「あだけじゃ何かわかんねーよ」

大塚の本気の言葉に三人が一気につつこんだ。

「あ」

「つて本当に言ったよ」

稲垣のボケもつつこんだ。

「ふー、俺さあ、不良を辞めようと思うんよ」

「へー、はあっ!？」

4人は忠実にノリツツコミをしてくれた。

「なんでだよ!! 稲垣!!」

黒崎が怒鳴りながらふかして、隣のおじさんに怒鳴られ、へこんでいた。

「俺さ、前捕まった時に仕事一筋だった親父が土下座してさ、その時に俺もついに俺を土下座させちまう程のバカになっちまったなあって思っちゃってさ、その時に親父が言ったんだ。『誰とでもツルんでもいいから人に迷惑かけるな』って…だから高校生ぐらい親の言うことを守ろうと思ったんだよ。だからさ、もう法に触れた遊びは止めようぜ。頼む」

みんなからは見えないけど稲垣は土下座していた。それをドアの隙間から萌が見ていた。

「やっぱりオタクだ」

一分ぐらい間を空けて、黒崎は笑顔になった。

「おう、お前が遊んでくれるだけでも俺はすげー嬉しいからよ。いいぜ」

「…マジで！？ヨッシャー！！」

そんな稲垣を見て黒崎はいつも以上の笑顔になっていた。

「んじゃ…いくぞー！！」

稲垣はそういつて二階の窓から飛び降りた。

「危ねえよ」

稲垣達は笑いながら色々話していた。

だが、大沢は気になっていた。黒崎の何となく悲しそうな笑顔が…。

稲垣は笑顔で笑っていた。

翌日、大沢は黒崎に電話をかけていた。

「黒崎、俺はもう分かってているんだよ。なんなんだ？あの悲しそうな笑顔はよ？」

黒崎は何も言わず、大沢には吐く息の音しか聞こえなかった。その息でさえも悲しそうに聞こえてしまう。

「何で黙ってるんだよ」

大沢は昔やっていたのかわからないがサッカーボールを投げる。

黒崎から何かボールの体当たりを受ける音が聞こえる。

『これから…』

大沢は急に話したのに驚いたが、ケータイを強く握った。

『これから言う事は誰にも言うなよ』

「おう」

『実は俺…』

「…」

大沢のケータイが落ちて、その時に電源ボタンを押したのか、黒崎からは『ツーツー』と音が鳴った。

第四話：黒崎、悲しみの笑顔（後書き）

大沢が言う。

黒崎の悲しい笑顔の真相。

大沢が言う。

稲垣は自分を責める。

大沢が言う。

黒崎が引つ越す事を…。

第五話：大沢の発表

稲垣が真剣に自分の思いを話した翌日、黒崎は休んだ。

同時に大沢の元気も無くなっていた。

はあとため息をついては机に俯く。

隣にいる稲垣はそんな大沢を見て何があっただん？と思っている。

放課後、何もしないで帰ってきた大沢は部屋に入ってベッドに寝ころんだ。

「まさか、黒崎がな…」

溜め息に交じりながら大沢は呟く。すると大沢のケータイの着信音が鳴った。

「誰だ…稲垣…か…」

大沢は通話ボタンを押した。

「もしもし…」

「おう、大沢か。なあお前、最近どうしたんだよ」

「何が？」

「何が？じゃねえよ！最近元気ねえじゃん！！いつも溜め息ついてよ」

「ああ、これか」

「そうだよ」

「…」

「おい！」

「稲垣…」

「どうしたんだよ」

「今、暇か？」

「お前がファミレス誘うなんて久し振りだな」

大沢は稲垣をファミレスに誘っていた。

稲垣は地鶏グリルを食べながら大沢に話しかけていた。

「ああ…」

「…、やっぱり元気ねえよ。大沢」

「別に元気だよ」

「コーヒーだけ飲んで平気かよ。金ないのか？」

「いや…」

「そうか…！」

大沢はそれから黙って地鶏グリルを食べている稲垣を眺めている。

「なんだよ…気持ち悪いな」

稲垣はドン引き。すると、大沢は俯いていた。

「なあ、稲垣、俺が元気を無くした理由、教えようか」

稲垣が地鶏グリルを切るために必死に活動していたフォークとナイフを休ませる。

「お、おう」

「実は…」

「ゴクン（息を飲み込む音）」

「黒崎、引越すらしいんだ」

その時、稲垣の頭にホワイトホールみたいに忘れられていた記憶がパアツと吐き出されていく。

黒崎が女子と話している時に大沢と話した陰口。

バックレた集会。

黒崎の楽しみを全て裏切るような出張。そして、黒崎の悲しみのこもった笑顔。

「俺が黒崎に陰口したから、俺が黒崎にあんな事言うから、黒崎は俺らとの思い出を作るのを止めたんだな…」

「違うよ」

大沢は否定してコーヒーをすすった。

「じゃあ何だよ…！」

稲垣は立ち上がって叫び、大沢の胸ぐらを掴んだ。
地鶏グリルとナイフが床に落ちる。

「何で黒崎は学校に来ないんだよ…！」

周りからけんかか？とか外でやれよなとかそれぞれの意見が飛び交う。

「何で俺だけに言うんだよ！ーおい、答えるよ！ーおい！ー！」

稲垣は大沢の胸ぐらを掴みながら大沢を揺らしていた。

「黒崎が、電話で誰にも言うなって言ったんだ…！」

「えっ…？」

稲垣は大沢の胸ぐらを離れた。

大沢はストンと力が抜けたように椅子に座り、稲垣も座った。

「じゃあ、何で俺だけに言うんだよ？」

「お前なら分かると思って…黒崎の気持ち」

「…そうか。…出ようぜ」

稲垣と大沢はファミレスを出た。

会計後に店員に『次からは他でやってください』と怒られてしまった。

稲垣と大沢は歩いて帰った。

夕焼けが山に隠れながら二人を眺めるように半分だけ顔を出している。

「悪いな、胸ぐら掴んじゃって…」

「別に…」

「…大塚と屋良にはいつ言うんだよ？」

「学校で分かるだろ」

「…そうか」

二人は家路へと向かった。

夕焼けは完全に隠れ、夜を迎えるのを待っていた。

第五話：大沢の発表（後書き）

分からない。全然分からない。

稲垣は黒崎の気持ちが出来なかった。

その時、稲垣は黒崎を見つける。

第六話：最高のプラネタリウム

翌日、学校で黒崎の転校が発表された。

悲しむ女子、涙目の女子。

その中で今日メルアドを教えようとした女子が自分のメルアドを書いた紙を立ち上がって破ろうとする女子もいた。

稲垣はそんな女子を見て、自分も女で黒崎に恋をしていたらこうなるのかなあと思っていた。

チャイムが鳴って、SHRが終わった。

紙を破ろうとした女子は、二人の女子に担がれて保健室へと連れて行かれた。

チャイムが鳴ってすぐ、教室に微かな揺れを感じる。

教室にいた生徒が微かな揺れに気付いて何だこれ？と疑問を持ち始めた。

微かな揺れはほんの少しだけ大きくなっている。

何かが来る

保健室に行った3人を除いたクラスはそう感じずにはいられなかった。

揺れの“原因”が教室の前に来た。

幽霊か？怪獣か？学校始まって以来の鬼教師か？クラスがこの“原因”の正体を知りたかった。

教室のドアが開く。生徒がゴクンと息を飲み込む。

「稲垣！大沢！！」

“原因”の正体は大塚と屋良だった。

でも二人だけであんなに教室が揺れるか？と大沢は考えていた。

「んだよ、お前らかよ」

稲垣が突っ込んだが、二人はそれに応じず息を切らして呼吸している。

なぜ隣のクラスなのに息が？元ジャニーズJr. だろ？大沢はこ

の謎解きに必死になっていた。

「俺らクラス全員＋ゴジラも連れてお前等に話がある」

「クラス全員かよ！！しかもゴジラ付き！？そんなに大事な用事かよ」

なるほど。

クラス全員＋ゴジラだから微かな揺れで休み時間で散らばったクラスメートと職員室にいるゴジラを探したから息を切らしていたのか。大沢は結論づけた。

「みんな、よく聞けよ」

屋良が全員を静寂にさせた。

「黒崎、転校するんだとよ」

大沢と稲垣がマジゴケをした。二人はなぜこけるのか不思議がつている。

「もう知つとるわい！！同じクラスだろ！！」

稲垣が突っ込んだらクラスはなるほどと納得してゾロゾロとクラスへ戻っていった。

何だあれ？稲垣のクラス全員は隣のクラスが起こした事件に疑問を持ち始める。

放課後、黒崎がいないから何もしないで家路へとついた。

家へ帰ると、稲垣の母親、有紀と妹の萌が『早いね』と言葉を送ったが、稲垣は無視をする。

稲垣は部屋に入ってベッドにゴロンと寝ころび、テレビのスイッチを付けた。

テレビはドラマの再放送がやっていた。

学園ドラマで主人公が担任をしているクラスにいじめが発生されている事が分かった。

『人には痛いっていう感情があるんだ！！痛いって感情を知らずに人に痛いって感情を与えるのは、0点をいつも取るやつよりもバカだ！！生きていてもしょうがない奴なんだ』

痛いっていう感情ね。稲垣はテレビを消して天井を見た。

楽しみたい感情：。

それを知らずに人の楽しみたい感情を裏切るのはバカだ。生きていてもしょうがない奴だ。

稲垣はハッとして起き上がった。

「黒崎はこの町で最後まで楽しみたかったんだ！！」

稲垣は家から飛び出した。黒崎の家へと向かうのだ。

「どっか出かけましたよ」

家政婦が稲垣に伝えると、稲垣は『すいません』と軽くお辞儀をして走った。

「どこにもいねーよ」

もう閉店した駄菓子屋の前に座って、稲垣は黒崎探しを休んでいた。

「腹減ったあ。帰るべ」

稲垣は立ち上がって歩きだした。

しばらく歩くと川の土手に着いた。

「確か俺らを追っているパトカーがこの土手でバランスを崩してそのまま川に落ちたなあ。あれは笑えたなあ」

稲垣が一人で思い出話をしていると、微かにタバコの匂いが鼻に立ちこめた。

この匂い！！稲垣はハッと気付いて匂いで何かを探し始めた。

このタバコの匂いは、黒崎達が吸っているタバコの煙の匂いだっ

た。

稲垣は匂いの元を探すため走り続けた。

辿り着いた場所はもちろん川の土手だった。

そこには座りながらタバコを食わえている黒崎の姿があった。

「黒崎！！」

黒崎が振り向くと、息を切らしている稲垣の姿が視線に入った。

「おう、草野球ではいつもサードの稲垣君じゃないかい。大きくな

黒崎は稲垣に近付いて髪を撫でてポンポンと稲垣の頭を叩いた。
「三日前に会っただろ。そんな三日間で急激な成長を遂げる人間じやねえよ。しかも草野球そんなにしてねえしするとしたらいつもシヨートだし」

黒崎は煙草をくわえながらニヤリと笑った。

「やっぱり稲垣君だ」

「そうだよ。俺は稲垣誠だよ」

「まあ座れよ。稲垣誠」

黒崎は土手の左側をポンポンと叩いた。

稲垣は三歩ぐらい黒崎に近付いたら、黒崎は両方の手のひらを突き出して『ストップ』と言って黒崎は左側にハンカチを敷く振りをした。

「どうぞ」

黒崎は稲垣を導いた。

ハンカチを敷いた振りでも俺のズボンは汚れるよ 稲垣はハイテンションで黒崎の左側に座った。

「吸う？」

黒崎はライターと煙草を差し出したが、稲垣は手の甲でいらないう素振りを見せた。

「ははは、煙草はいつも吸わないからな」

黒崎が新しい煙草に火を点けた時、一番星が顔を出した。

夜か。稲垣を時間が気になってきた。

「どうして引越すんだ」

稲垣は遠回しに質問を試みた。

「親父が法律番組のレギュラー弁護士に選ばれて、遅刻しないために近くに引越すんだと」

「そうか、おまえの親父さん弁護士だもんな」

黒崎は小さく頷いた。

「てか明日には俺はもうこの町にいないんだよな」

「そうか…はあ！？」

稲垣は驚いて振り向くと、黒崎は何にも動じずに煙草を吸っていた。

「なあ黒崎？」

稲垣は深刻な顔で黒崎に訪ねた。

どうしたんだ？ 黒崎は煙草を道に擦り消しながら思った。

「どうしたん？」

「前さ、俺が黒崎に俺の今の思いを言ったじゃん。その時の気持ちってどうだった？ やっぱ最後にパアッとやりたかった？」

「パアッとやりたかった。ファイナルアンサー？」

えっ？ ミリオネア？ 稲垣は頭の中でみのもんたに言われた気分で緊張した感じになって『ファイナルアンサー』と言った。

「ダラダラダラダラ…」

黒崎は忠実に再現したる！ と思いながらドラムを叩いてるように両手を振った。

稲垣は息を飲んだ。

「稲垣君、残念」

黒崎は残念そうな笑顔を浮かべた。

稲垣はミリオネアのスタジオに一人残された気分で、オーディエンス使えばよかったと頭の中で嘆いていた。

「スーパー煙草君、没収！！」

世界・不思議発見？ 急な番組変更！ 稲垣は焦ってしまい、しゃべらない所なのに噛んだ。

黒崎はゆっくりと煙草をポケットに閉まった。

「はい、おれ煙草吸わない」

「はっ？」

「お前がバカやってるから没収されたんだろ」

バカやって煙草をやめてんじゃねえかおまえ。

稲垣は笑みを浮かべながら星空を眺めた。

星空は最高のプラネタリウムだった。

第六話：最高のプラネタリウム（後書き）

ペアッと最後にやりたかったんだろ？

稲垣の答えに反対した黒崎。

黒崎の本当の思いを聞けて、稲垣はこいつと友達になってよかったと思った。そして…。

第七話：最高の友達の望み

「じゃあ何だよ！！なんて思ってたんだ？」

「それはな……」

黒崎は話そうとしたとたんにポケットに手を入れ煙草を出した。

「……没収？」

「あ」

黒崎は『へっへっへ』と笑いながらポケットに煙草の箱を入れた。

「答えはなー、嬉しかったんだよ。俺。実はよー、俺はおまえのことが嫌いだったんだよ」

「えー、言う？」

「いつでも何でも俺の後ろをホイホイと付いてくる。まるで金魚のフンだったじゃん、お前。だからよ、あの時必死にためーの思いを話すお前の顔を見てよ、引越しの前にあれを見てよかったんだよ」

黒崎も最高のプラネタリウムを眺めた。

「すげー星空」

「ここそんなに田舎か？」

星が見える「田舎のイメージを持つ黒崎がこの街を去る時に疑問を持ち始めた。

「さあな」

稲垣はそのまま寝転んだ。

「すげー、本当にプラネタリウムだぜ！！」

「本当か」

黒崎は騙されながらも稲垣の横に寝転んだ。

「プ。ラネタリウム！！」

黒崎は突如叫んで稲垣を困らせた。

黒崎は気が抜けた顔で星空を眺めた。

「黒崎ー」

「ん？」

「学校におまえの傷を残そうぜ」

「やったるうじゃん!!」

黒崎は素早く立ち上がった。

「うし!!行くか」

稲垣も立ち上がって、二人は学校に傷跡を残すため走った。

学校には誰もいなく、まるで肝試しのような気分で柵をガシャと鳴らしながら飛び越えた。

教室に入ると、すぐさま黒崎は黒板に行って適当にチョークをもつて『サンキュー!!』と書いた。

稲垣はマジックで黒崎の机に『永遠の黒崎の机参上!!』と書いた。二人は『もう消えねえじゃんか』などとコントを暗闇に公開していた。

「黒崎く、この後どうする？」

「売店に忍び込んでなんかパクろうぜえい」

「おう」

黒崎は教室を出ようとした。

「黒崎!!」

「ん？」

「一生、友達な」

「おう」

その後、二人は売店のシャッターを鉄パイプでこじ開け、好き放題食べ物をパクって逃げた。売店にはカメラが無かったのだ。

これを世に言う万引きなんだよね。

稲垣はパクったチョココロネを食べながら考えている。

ふう、思い出口ケット一号、完成。

黒崎は最後の思い出が出来て、喜びを感じながら思った。

「ここも最高の星空だなあ」

学校の屋上もこの日に限って最高のプラネタリウム。

星がキラキラと輝きながら二人を輝かせる。

二人は屋上でも寝ていた。

「俺が引つ越す街でも、こんな星空見れたらいいな」

黒崎は悲しい顔をしながら星空を眺める。

「見えるよ。友達が望んでいるんだからな」

「…（笑顔）そうだな」

流れ星が二本流れた。

まるで黒崎が引つ越す街に引つ越すために流れているようだった。

「朝までここにしようぜ。黒崎」

「おう」

思い出口ケット二号。完成。

明日は、黒崎がこの街を去る。

第七話：最高の友達の望み（後書き）

バイクで逃走。

女子との会話。

最高の友達の望み。

最高のプラネタリウム

数々の思い出口ケットに打たれながら黒崎はこの街を去る。

第八話：喧嘩しようぜ

へいへい！！朝だつていうのに俺つてば元氣１００倍じゃないかい！！そんな気分で稲垣は登校してきた。

「おはよう諸君」

制服点検をしている生活指導の先生にウキウキ気分で挨拶している。

「ふふふ、君はそんなに内申点を下げたいのかい。下げたいのかい？」

生活指導の先生は所持物の竹刀を両手に持って、バキツと音を立てて割った。

「失礼しましたー」

稲垣は冷や汗を垂らしながら校門をくぐる。

「たくっ……」

生活指導の先生は呆れまわった。

教室に入るとクラスに女子の人ばかりが出来ている。

黒崎もつ来たのか？と期待しながら稲垣は人だかりの中を進んだ。すると、微かに声が聞こえる。

「これは今ドラマに出てる　だよ」

「マジでえ」

ジュニアだ。ジャニーズだ。

元ジャニーズの屋良がその時撮った写真を女子に見せていたのだ。

「んだよ、黒崎じゃねえんかよ」

稲垣はグチをこぼした。

そして、稲垣のこのグチでとてつもない事が起きる。

稲垣の近くにいた女子が女子の人だかりにそれを伝え、それがクラスと屋良の耳に届き、屋良が他のクラスにその事を伝え、あるクラスの女子が後輩と先輩に伝え、いつのまにか全員に知り渡り、黒崎を出迎えようと校庭に出て、先輩や他のクラスは稲垣のクラスに

集まった。

その時にとてつもない人数の人がこの狭い空間にいるため、人口密度が大きくなって熱中症で倒れた人数、合わせて16人。

黒崎って本当に人気があるな…。と稲垣は思った。

「黒崎先輩が来ました！！」

後輩の叫び声を聞いた直後、ほとんどの人が歓声を上げ、校庭に向かって走り出した。

その時にこけて踏まれた人の数、合わせて11人。

黒崎って本当に人気あるなと稲垣は思った。

「ちーす、皆さんこんにちは」

ピースサインを掲げて黒崎は教室に参上した。

その時に太田の先公も参上して、先輩や他のクラスに『さっさと自分の教室に行け！！』と怒鳴り散らした。

黒崎って本当に人気あるな…。と稲垣は思った。

「うーす稲垣ちゃん」

黒崎は笑いながら稲垣の肩を叩き自分の席に着いた。

これから黒崎の別れ会が始まります。

最初は先生のメッセージ。次はクラスのみんなのメッセージだ。

「絶対俺らと遊んでた事、このクラスにいた事を忘れるなよ」

大沢は台本が無い状態でスラスラと話した。

黒崎はハイテンションで拍手をしてるが、実は心の中はすごく泣き出したいと思っていた。

次は稲垣の番だ。

稲垣ははあとゆっくり息を吐いた後、椅子から立って教卓の前へと歩きだした。

稲垣が教卓の前に来ると、みんなが注目をした。黒崎もだ。

どうしたんだよ…。稲垣…。黒崎は心配している。

その頃、稲垣は、ポケットからメモを出そうとしたが、ポケットに戻した。

自分の友達に送る言葉を、メモに移すなんて失礼にも程があると

思ったからだ。

くそ…、なんて言えばいいんだよ。

稲垣は冷や汗を流し、送る言葉を考えていた。

こんなに狭い教室が稲垣にはコンサートホールに見える。

もう、これしか言えねえ。

稲垣は息を吸って吐いた。

「友達でいてくれてありがとう」

稲垣はお辞儀をして自分の席に戻った。

短かつ！！クラスの全員は思っただろう。

だが黒崎は、よく言えたと思いつながらあたたかい拍手をしたのだ。

「おい、拍手してるぜ」

「どうしよう」

教室に慌てた様子の言葉が飛び交うが、結果、暖かい拍手を全員がした。

黒崎は右の親指を立てた。

これは黒崎達5人にとっては『よくやった』などの褒める事を言う合い言葉だ。

稲垣も笑いながら右の親指を立てた。

「この言葉には一つ一つに意味がありますね」

数学担当の太田の先公がまるで国語担当のように褒めた。

次は黒崎のメッセージ。

来るものが来たかと覚悟をした黒崎が立ち上がって教卓の前に立った。

野球で九回裏で相手が打てば負けの状態で投手を任せられた選手みたいに黒崎は固まった。

「どうしたんだ、黒崎…」

「変なもん食ったのか？」

心配の声がクラスに飛び交う。

大沢でさえも言えるのか？と思っている。

大沢の表情を見てそれを察した稲垣は、『しょうがねえな』と呟

き、息を吸った。

「何やってるんだよ！！黒崎！！」

稲垣は叫びながら立ち上がった。

クラスの視線が一気に稲垣に向けられる。

「お前はそれでもリーダーかよ！！俺ら4人をまとめたリーダーかよ！！俺は今までの黒崎が好きだった。言いたい事も言えて、やりたい事もやれてすごいいいなと思った。すごい憧れてた。けど今のお前は何だよ！！何も言えずに黙ったまま。そんな奴俺はすごい嫌いなんだよ。だから頑張れよ！！俺の好きな黒崎に戻ってくれよ！！」

「稲垣……」

黒崎は稲垣の変貌ぶりに感激している。

「そうだよ！！頑張れよ黒崎！！」

大沢も立ち上がった。

「今のお前にリーダーを任せた俺の気持ちを無駄にする気かよ！！頑張れよリーダー！！」

「大沢……」

リーダーを任せていた気持ちを知って、黒崎は感動している。

「何でもいいから言ってくれ！！黙ってるお前なんか見たくねえよ！！」

「いつも言いたい事を言っていたお前が今言いたい事を言えなくてどうする！！」

「私が好きな黒崎君に戻ってよ」

「頑張れ黒崎！！」

クラスみんなが立ち上がった。まるで金八だなど太田の先公は感激している。

「みんな……」

黒崎は涙が一瞬こぼれたが、親指で目を拭った。

「俺はお前らの事が好きだあ！！」

「いえーい！！」

クラスのみんなが騒ぎ始めた。

稲垣と大沢は黒崎と肩を組んで、右の親指を上げた。

黒崎は涙を流しながら右の親指を上げた。

ついに別れの時が来た。

黒崎はクラスのみんなに大きく手を振っている。

クラスのみんなもそれに応えられるように大きく手を振った。

「先公、今までありがとう」

「次の学校の先公には先公って呼ぶなよ」

「分かってるて」

「よし、合格だ」

「それじゃ。じゃあなみんな!!」

黒崎はまた大きく手を振って教室をゆっくりと出ていった。

「授業の邪魔になるのでベランダには出ないように」

小さな声で『えー』と不満な意見が出てきた。

「それじゃ…私がちよつとはな…」

「大沢行くぞ!!」

太田の先公を無視して稲垣が立ち上がった。

「おう!!」

大沢もそれに応じて、二人で教室を出ていく。

「話…は？」

太田の先公は悲しそうな声で呟いた。

その頃、黒崎は、父親の車の中で泣いていた。

父親はバックミラーでそれを確認している。

「お前が泣くななんて、小学校の時の弟子が帰った時以来だな」

「そうなんだ」

黒崎は黒崎の父の話に応じた。

その頃、稲垣と大沢は屋良と太塚のクラスに入り込んだ。

「失礼します。いやいやどうも。人はオムツで始まりオムツで終わりますよね」

ゴジラのクラスは稲垣の話を笑いながら聞いている。

その間に大沢は屋良と大塚を連れて教室を出て、親指と人差し指で の合図を送った。

稲垣は小さく頷いた。

「それでは私の話を終わらせていただきます」

稲垣は深くお辞儀をしている。

ゴジラのクラスは突然乱入してきた事も気にせず大きな拍手を送っている。

「謝謝」

稲垣は教室を出ていった。

何なんだ？と思いつながらゴジラは辺りを見回すと、二人がいない事に気づいた。

「それでありがとうか…、何なんだ？あいつら」

「なに人の内申点を下げようとしてんだよ！？」

二人は大沢達の行動に不満を持ち始めた。

「まあまあ、これから何するか分かってるくせにい」

稲垣は屋良の肩を叩きながら言った。

「じゃあ、行るかー！！」

「うえーい」

屋良と大塚はしようがなく二人の後をついていった。

四人が走ってる先には、黒崎が乗っている黒光りのベンツが走っている。

「おい、黒崎ー！！」

かすかに叫び声が聞こえて、黒崎が振り返ると、四人が大きく手を振っている姿が見えた。

黒崎は手を上げようとしたが、諦めて手をおろした。

するとゴムがこすれる音がして、黒光りのベンツは止まった。

「止まった。黒崎弁護士…」

四人は感謝しながらベンツへ向かって走り出した。

「行け、剛」

「いいんかよ、お袋待たせちゃって…」

黒崎の父は小さく頷いた。

「それに、道路の真ん中に駐車したら、交通の邪魔をしたとみなされて、道路交通法違反になるでしょ」

「君い、俺の親父、黒崎知事はどのくらい税金払ってると思うんだい？」

道路の分かれ目で、交通整備の人が泣きながら近道を案内していた。

「何やらせてるんだよ、知事は俺に…」

整備員は呟いていた。

「知事かよ!! 爺ちゃん!!」

黒崎はじいちゃん、町長という嘘をついてなんか悔しかった。

町長よりおもしろい上じやねえかと思っていたからだ。

黒崎が車から降りると、4人が肩で息をしながら黒崎を見ていた。

「おめえら、学校はどうしたんだよ」

「schoolよりお前の方が大事だよ」

大塚がやつと覚えた単語を使って話す。

「黒崎」

「どうした」

屋良が一步前に出た。

「黒崎、女の子はもう俺のもんだからな」

「屋良…」

黒崎が涙をこらえている。

「へっ、女の子を泣かしたら許さねーからな」

「黒崎」

大塚が一步前に出た。

「お前よりも頭良くなってやるからな」

「schoolは俺だって覚えてるよ。がんばれよ」

「黒崎」

大沢が一步前に出た。

「リーダーの座は頂いたからな」

「お前は一生リーダーだからなって言ってくれよ。せいぜい」

「黒崎…」

稲垣が一步前に出た。

「稲垣…」

「今度会ったら…」

稲垣は拳を掲げた。

「喧嘩でもしようぜ!!」

「へっ、稲垣、それまでに特訓しとけよ」

「…」

5人は黙った。

「そうだ、最後にこれ…」

黒崎は稲垣に紙を渡した。

「俺が去ってから見るよな」

稲垣はポケットに入れた。

「ああ」

黒崎はベントツのドアを開けている。

「じゃあな、みんな」

「おう、元気だな」

四人がそれぞれ言葉を言って手を振った。

黒崎はベントツの中に入って間を空いてから発進した。

「いいのか、あんな約束して」

黒崎の父は聞こえたのか黒崎に心配の声をかけている。

「ああ、俺、あいつらとまた会うと思うから」

「どうかな」

「俺が望んでるんだ。叶うに決まってる」

黒崎の父は笑みを浮かべてアクセルを踏んだ。

「四人になったな…」

夕焼けが照らしている道路を歩きながら、大沢は呟いた。

「ああ、それより、黒崎からもらった手紙見ようぜ稲垣」

屋良が稲垣のズボンのポケットから紙を出した。

屋良は折れている紙を広げている。

広げた紙を見ると、黒崎の字で『（　・　・　）』と書いてあった。

意味がわかんねえよと四人は思った。

第八話：喧嘩しようぜ（後書き）

親友・黒崎が去った。

学校に行く気無くしてサボろうとして、斜面の草むらに寝転がった時、稲垣は会える奴とご対面してしまう。

こんな事、俺望んだっけ？

いよいよ「空に歌えば」本編になります。

第九話：サギ師だろ？

はあ…っ。黒崎がいないなんて何か半分以上ピースを失ったパズルみたい。

稲垣はそう思いながら学校とは反対方向の道を歩いている。

海に浮かんでいる島のように雲がふわりふわりと浮かんでいる。

「こんな日に学校なんか行つてらんねえよ」

稲垣はカバンを高く掲げながらあくびをした。

「寝るべ」

稲垣は雑草が生い茂っている斜面に寝転んだ。

いつもなら邪魔な存在の雑草が布団の中に入っている羽のように眠り心地がいい。

「ああ、空っていいよな。人を悲しませる事が無いからな…」

稲垣は空と今までの自分を比べたが、空の方が勝っているようだ。

「空になりたかったな」

稲垣が悲しそうに呟くと、なんか声が聞こえる。

「そうだよな、空を見ると、自分がめちゃくちやちつぽけに見えるよね」

またピリオドの妖精か？稲垣は辺りを見回すが、妖精が現れる前兆が無かった。

稲垣はよく耳を澄ますと、ギターの音も聞こえる。さらにあの言葉が歌に聞こえる。

「そうだよな」 空を見ると 自分があ ちつぽけにい」

見事にリズムがあっている。音色から見ると、稲垣はフォークギターと察した。

「あああ、空よそあらあよ 自分を強くしてくれないか」

なんてくさい歌なんだ。これじゃいい歌と言われたいだけだ。

稲垣が後ろを見ると、華麗な指使いでギターを弾いている青年がいた。

「よお、高校生。俺の歌に感動したのかい？」

「全然！歌詞がなってるない」

稲垣は起き上がって斜面をゆっくりと登る。

「弾いてみ」

登りきった稲垣は、青年にメロディーの要求をした。

「空を、空を見上げてみるよ 青い空、青い海、青い僕がいた」

青年はギターを弾くのを止めて立ち尽くしている。

「…」

「どうした？」

「…いい」

「はい？」

青年は稲垣の肩を掴んだ。

「いい！！いいよ！！君の歌！！全然くさくなくて、心の奥の奥の中を見ている歌！最高だよ君！」

青年は稲垣の肩をがっしり掴んで、揺らしていて、離さない。

「ちょ、ちよっと、苦しいいうい」

「あっ」

青年はさつと肩を離した。稲垣はぜいぜいと音を立てながら息をしている。

「すいません、すいません！！」

「い、いいよ。別に…」

「そ、そう」

稲垣は何だあいつは？って顔をしてカバンを持って歩き出した。

「とことん変な奴だな」

稲垣が呟きながら歩くと、車の音と『待つて』と声がした。

振り返ると、軽自動車に乗っている青年の姿。

「なっ…。お前車持つてるんかよ」

稲垣は必死に走るがやつぱり車。追いついてしまった。

「ふう、やっと追いついた」

「お前、俺を追う理由なんてあるのか？」

「まあ、空を見てみるよ」

稲垣は空を見た。

「空で語れないものはない。ギターで語れないものはない」

稲垣はその通りだと思って頷いた。

青年は軽自動車のドアを開けて、フォークギターを出した。

「ギターで語ろうぜ。俺と一緒に」

「俺、ギター弾けねえし」

「ギターで語りたい思いがあつたら上手いも下手も関係ない」

青年は笑顔で語った。

「別に暇だからいいけど」

『やったー!!』と叫びながら青年はクラクションを何回か鳴らした。

こいつ、暑苦しいなと思いながら稲垣はギターを見た。

稲垣は固まった。

「ああ、そうだ君。ギター代は払ってくれよ」

青年は待ちかまえるかのように手の裏を稲垣に見せた。

「いくら？」

「50万ぐらいかな」

「兄さんの名前なんてゆうの？」

「俺の名前は福元健吾さ」

今ごろ名前聞いたよと思いながら、福元は笑顔で名乗った。

「福元健吾、お前、サギ師だろ？」

「え……」

福元は何で見抜けたの？と思って何も言い返せなかった。

なぜか、雲一つない青空だった。

第九話：サギ師だろ？（後書き）

とりあえずギターを始めることになった稲垣だが、久々のピリオドの妖精の登場でバンドにするように命じられた。

残ったメンバーをどうすればいいのか？

必死に考えた挙げ句、あいつらに頼む事になった。

第十話：妖精来襲

なんでサギ師って事が分かったんだろう。

で、でもさ、ギターはあげるんだし、ギター買うのにも金がかかる訳だし、高校生がサボるって事は将来実家暮らしになりそうだから、高校生の家、金持ちだよな。サギ師、福元健吾はそう思っていた。

「50万するフォークギターだったら、ビンテージだけど、このギターにビンテージの条件はまったく無い。おまけにこの傷は自分でつけてるような感じ。まあおよそ七万円だな。」

うわぁん。

一気に43万円も値引きされちゃったよあう。

福元はそう思いながら心の中ではものすごい落胆していた。

「うん、七万。七万円な。福元の相棒の入会金」

稲垣はポケットの中から七万を出して福元に渡した。

七万を普通にポケットから出してる！？なら50万なんて探せば家にあるだろ！？と心の中で福元が稲垣に問いかけている。

だが、福元はこのギターを三万で買ったのを言えないで、稲垣からもらった七万円をまじまじと見ていた。

「どうするん？サスケ系で行くん？」

「サスケ系！？」

「まあギターを持った二人が歌うフォークシンガーみたいなのをサスケ系。これオレ語」

「はあ……」

絶対流行らない言葉だなと思いながら福元はこれからの事を考えていた。

サスケ系。

サスケ系もいいなあ。

福元は稲垣と共にしんみりとした曲を客に届けているのを想像して（正確には妄想）、福元はサスケ系で行く事に決めた。

「うし、サスケ系で行こう」

「オレ語もう使ってるよ…。うん。いいよ」

「よし、がんばるか」

福元が拳を高く掲げて軽自動車に乗ろうとした時、何か声がした。
「駄目だよ。どうせフェスティバルに行ったらドラムとベースとか
入るから意味無いよ」

福元が『えっ？えっ？』と言いながら周りを見ている。

稲垣は覚悟したのか固まっている。

あいつが来襲してきた。稲垣は冷や汗を垂らしながら妖精を迎えた。

光の玉がくると円を囲んで中からピリオドの妖精が出てきた。

「どうも」ピリオドの妖精です」

「てめー！！またオレにラリアットしに来たのか！？」

稲垣が妖精を指でさしながら怒鳴る。

「違うわよ！！今日はミュージックフォームについてアドバイスし
に来たの」

「ミュージックフォーム？」

「そう。それ自分語」

妖精が胸を張りながら言った。

「てめー！！オレ語パクリやがったな」

「はあ！？あんたのオレ語なんてパクる気にもなんないね！！」

「なんかすげームカつく」

福元は妖精と口ゲンカをしている稲垣を不思議そうに見てた。

稲垣は視線を感じてハッとして振り向いた。

「福元さん、見える？」

稲垣が妖精を指で差すと、福元はコクリと頷いた。

稲垣は『ヤベエ』と感づいて言い訳を考えた。

「あのさ」

「はい！？」

福元が言つと、稲垣はビクビクしながらも速く対応した。

「妖精さん、話があるんだ。乗ってくれないか」

「はいーい」

福元が妖精を呼ぶと、妖精は警戒もせずに車に乗った。

稲垣は、福元の行動から気味悪がってないと察して、よかったと思っていた。

「久しぶりだな。まさか稲垣君の所に来るなんてな」

福元は笑いながら妖精に語った。

「聞いたよ。解散したんだってね」

「うんまあ」

福元はタバコを一本出して吸い出した。

「今は何してるの？」

「今はコンサートのバックバンドで食ってるよ」

「そう」

福元は煙を鼻から出した。よっぱどのヘビースモーカーだろう。

「あの子、なかなかの能力を持っているよ」

妖精は胸を張って話す。

「まあな、作詞の能力もあるし、コードを教えればすぐ覚えるし…作詞と作曲両方出来るよ」

「やっぱり福元は選ぶ人が違うね」

「へっ」

福元は勝ち誇った顔をして妖精を見た。

「あ、出てきた」

稲垣は妖精と福元が出てきたのを見て、歩いて二人の所へ向かった。

「何話したんすか？」

稲垣が聞くと、福元は苦笑いをしながら『まあいろいろ』と答えた。

稲垣は変なのと思った。

「それより、やっぱりバンド形式にする事に決めたよ」

妖精が福元に代わって結果を発表した。

だが実際そんな話をしてなかったから妖精が勝手に決めた事になる。

「はあ」

「とりあえずあと三人は確実に必要ね」

「はあ」

妖精が勝手に決めた事だが、稲垣は相づちを打って従おうとしている。

福元はよくやるなと思った。

「分かった。それじゃあ」

「はあ」

最後も稲垣は相づちを打って妖精を見送った。

「…誰にする？」

稲垣はちょい涙目で福元を見た。

「三人か…、はあくそ！！俺の友達はみんなドラムやベース出来ねえからな」

福元が思い当たる友人はどれもダメらしい。

すると、稲垣はある三人がいる事に気づいた。

「俺、可能性がある奴知ってる」

「マジで、じゃあ呼んできてくれ」

「わかった」

稲垣は学校の鞆を持って走り出した。

第十話：妖精来襲（後書き）

思い当たる三人を連れ出す事に成功した。

それぞれの楽器を見事にこなす。

こうして、バンドが結成された。あとは名前だけ！！

第十一話：絶好調なスタート？

稲垣は昼休みの学校に入ってきた。

「おう、おせーじゃん稲垣」

稲垣に気づいた大沢が声をかける。

「ところでさ、大沢くん」

稲垣がクモのようにちよこまかと近寄ってくる。

「君、ピアノ出来るよね？」

「うん、まあ。正確にはキーボードだけだな」

大沢はパンを口に入れた。

「話が早い」

稲垣は大沢の手を強く握って廊下を走り出した。

大沢はえっ？と思いつながら稲垣に引つ張られていた。

辿り着いた場所は屋良と大塚のクラスだった。

稲垣はニヤリと笑う。そんな稲垣を大沢は気味悪がっていた。

「ちょっと待ってて」

そう言い残して稲垣は二人のクラスに入ってしまった。

「どうも皆さん！！（稲垣）」

「あっ！！稲垣！！（ゴジラ）」

「稲垣どこ行ってたんだよ！！（屋良）」

「まあまあ、とりあえずちょっと来て（稲垣）」

「駄目だ！！ちょっと職員！（ゴジラ）」

「ドカツ（鈍い音）」

「ぐはっ…（ゴジラ）」

「ドサッ（倒れる音）」

「うわぁん、先生！！（クラスの誰か）」

「てめー、よくも先生を（クラスの誰か）」

「クロロホルムらしき液体！！（稲垣）」

「なんだよこれ！！なんか赤くて沸点を越えてるのか沸騰してるよ

（クラスの誰か）「

「おやすみなさーい！！」（稲垣）「

「うわっ……ZZzzz……」（クラスの誰か）「

「ZZzzz……」（クラスみんな）「

「うわあ……俺ら以外みんな寝てるよ、一人は倒れてるけど（大塚）「

「ドラえもんしか出来ないと思ったぜ。この状況（屋良）「

「まあな。行こうぜ。大沢が待ってる（稲垣）「

「おう（二人）「

三人が教室から出てきた。

「お待たせ大沢」

「ねえ！！さっき何やってたの！！何か警察来てもおかしくない事やってたよね」

大沢が必死な顔で三人に聞く。

「さ、さあ。俺法律分かんないし」

稲垣が言い訳をしてどこかへと向かった。

「それにしてもあの液体なんだ」

屋良がそんな疑問を抱きながらも、三人は稲垣の後についていった。

辿り着いた場所は職員室。

またもや稲垣はニヤリと笑う。

「みんなちよつと待ってるよ」

稲垣は三人を職員室の前で待たせ、職員室の中に入っていった。

「失礼します（稲垣）「

「ああっ！！稲垣君！！」（太田の先公）「

「どうも（稲垣）「

「んまあ！！稲垣君！？（先生）「

「何してたんだ！？学校サボって（先生）「

「それより太田先生（稲垣）「

「ああ（太田の先公）「

「俺と大沢と屋良と大塚は早退します（稲垣）「

「えっ？（太田の先公）」

「駄目だ！！駄目だ！！（生活指導）」

「なんでですか！？（稲垣）」

「絶対サボるためだろ！！（生活指導）」

「違いますよ！！（稲垣）」

「ならなんだ？（生活指導）」

「マジックマツシユルムらしきキノコ（稲垣）」

「何だこりゃ（先生）」

「何かしいたけっぽいぞ（先生）」

「うわあカピカピしてるキモイ（先生）」

「先生の口にダंकシュート！！（稲垣）」

「のわっ！！（太田の先公）」

「わっ！！（生活指導）」

「わあきれいなお花畑（先生）」

「のわああ！！幽霊だ！！（太田の先公）」

「わ、私はケン力は弱いんだ！！暴力的な行為はやめて（生活指導）」

「ぎゃー（先生たち）」

「わあー！！（先生たち）」

「失礼しました（稲垣）」

「稲垣が職員室から出てきた。」

「お前の鞆の中がすげー気になるよ」

「屋良が鞆に指をさしながら言った。」

「稲垣は気味悪い笑みを浮かべた。」

「行こうぜ。おまえらを待つてる人がいる」

「稲垣が右の親指で校門を指さす。」

「三人が校門の方を見ると、軽自動車が一台、校門の近くに止まっている。」

「誰だあいつと三人は思ったが、稲垣が紹介する人だから普通の人」

だろうと思つて帰る準備をした。

数分後、三人は校門に集まった。

「紹介するよ。俺にギターを七万も取らせてやらせた福元健吾。詐欺師」

「詐欺師つて言うなよ」

稲垣につつこみを入れて、福元はお辞儀をした。

「ここで話すのはヤバいらしいからちよつと来てくれる」

福元はそう言つて車のドアを開けて四人を入れた。

着いた場所は『長橋ライブハウス and 楽器店』だ。

そこに入ると、待ちかまえてたかのようにめがねをかけた店長が出入り口の前に立っていた。

「いらっしやいませ」

店長は深々とお辞儀をして五人をライブハウスへと案内した。

ライブハウスには楽器が全て揃っていて、マイクやアンプもちやんと設備されていた。

「おおすげー！！」

稲垣達がはしゃいでギターやベースを弾く振りをしている。

「なあ稲垣。それよりなんで俺たちをこんな所に連れてきたんだ？」

大沢はとりあえずはしゃいでいたが、ふと気になつて訪ねてみた。

「まあ、今からやつてもらうわけ」

稲垣に代わつて福元が答えた。

「…はあ！？」

三人が訳分らないと訴えるように叫んだ。

「とりあえずやつてみて」

福元が両手を合わせて頼んだ。

「年上の…頼みじゃなあ」

三人は年上に対する尊敬だけは出来てるのか、多少戸惑いを見せている。

「ま、まあいいけど」

「ほんと！？ありがとう」

「いやいや」

三人はハーとため息をついた。

「じゃあまずはドラムを決めたいと思う。立候補者はいる？」

「なんか選挙みたい」

大塚が例えるが誰も笑ってくれなくて、それに苛立ちながら手を挙げた。

「おっ！！やるかい」

ドラムが早く決まって樂が出来るのを喜びながら福元はもう一回聞く。

「はいやります」

「君、名前は」

「はあ、大塚といいます」

「ポカリスエット！」

「はい？」

「いや、別に」

大塚製薬と掛けてやがると大沢は思った。

「じゃあやります」

大塚はドラムの位置につくと、スーッと息を吸って叩いた。

音のバランス、テンポ、リズム、難易度が高くて、完成度が高いドラムの演奏をした。

「すげー大塚」

「やるー、ポカリスエット」

四人は大塚のドラムの上手さに驚きを隠せずに声が出てしまった。最後は両方のシンバルを強く叩いた。

四人は大きく拍手をした。

「君すごいねー」

「はあ、まあ」

大塚は何度も軽く頭を下げながら戻った。

『ドラム決定』と福元は呟いた。

「さあ次はベースだ。誰かいるかい」

「じゃあ、俺で」

屋良が手を挙げてベースを持ち始めた。

「やる気があるね、じゃあどうぞ」

屋良は自分で合図をして弾き始めた。

ズレないリズム、ぶれない音色、コードの押さえ方がバツチリだった。

「なんだい、君もすごいね」

「どうも…」

屋良はベースを置いて戻った。

「じゃあ君」

福元は大沢を指差した。

「はい」

「キーボード、出来る」

「まあ」

「じゃあやってみて」

綺麗な弾き方、単調と長調の使い分け、上の段の音色と下の段の音色の違いをよく使い分けていて、大沢もカンペキだった。

「なんだい、なんだい。すごいね。みんな出来るじゃん」

三人は軽く頭を下げた。

「一回さ、ブルハの曲を流すからやってみて」

ちなみにブルハとはブルーハーツの事です。

流れてきたのはブルーハーツの『TRAIN・TRAIN』だ。

みんながズレずにコードやリズムをカンペキにこなしていて、それぞれの力が合わさって揃っていた。

あまりの完成度の高さに稲垣と福元は唖然としたまま拍手をした。

「す、すげーな、おまえら」

「どうしたんだい。けっこう長くやらないとこんなに出来ないよ。バンド組んでたの？」

三人は一回頷いた。

「はい、もう転校したけど友達と」

大沢が答えた。

えっ……？そんな事知らないよと稲垣は思っている。

この事から分かるように、稲垣には何も教えずに黒崎たちはバンドを組んでいたのだ。

「なんか、すげーシヨック」

稲垣はあまりのシヨックなためうなだれてしまった。

「ふうー、なんか一気に絶好調になったな」

福元の言葉に、稲垣はピンと来た。

「そうだ！名前だ！名前考えようぜ！」

「その前に君のギターを上達させなきゃね。出来ないの、君だけだよ」

「えっ……？」

稲垣は幸先のいいスタートは出来なかったようだ。

第十一話：絶好調なスタート？（後書き）

三人の意外な過去にショックを隠しきれない稲垣に、さらなる試練がくる。

それは、福元のスパルタ的ギター教室だった。

「指から血が出て、上手くやらなきゃ意味が無いから」
俺、バンド抜けていいですか？

第十二話：福元的ギター教室

「後は君だけなんだよ、稲垣君」

この状況をどう説明すればいいのか稲垣は分からなかった。

みんなどうせ下手だと思っていたが、知らなかった過去と、思いもなかった上手さに、稲垣はどうする事も出来なかった。

朝になった。

今日は学校が休みだが、どうせなら学校に行きたいと稲垣は思っている。

なぜならば、今日は福元健吾のギター教室があるからだ。

9時半に長橋楽器店に集合。

今は八時。

あと一時間半には地獄が待っている。

なんか自分の寿命を知った僕の生きる道の中村秀雄みたいだ。

今は八時四十五分。

もうコンピュータのウィルスでもいいから体の中に入ってくれ

と稲垣は思った。

時計は稲垣を見事に裏切って9時へと針を動かす。

「はあ、もう行かなきゃなのか」

稲垣は頭を抱えてしゃがみ込む。

稲垣の頭の中で、福元の言葉がこだましている。

後は君だけなんだよ…後は君だけなんだよ…後は君だけなんだよ

…。

時計は九時二十分をさしていた。

「遅いな！！たくっ！！」

福元は苛立ちながら稲垣を待っていた。

「あのー、まだ開店してないんだけど」

シャッターが閉まった楽器店の前で、店長が福元に話しかける。

「店長、落ち着いてください」

「お前が落ち着けよ」

話が噛み合わないまま九時半になった。

九時四十五分。タクシーが来て中には稲垣が座っていた。

「ここですね」

タクシーの運転手はちょうど福元の前で止まった。

「ちょっと待ってください」

稲垣はそういつてタクシーを降りた。

「おせーよ、初心者！！」

福元がキレたが、稲垣は何も反応せずにタクシーを見た。

「あ、あんたさ、四万持ってる？」

「今、三万しかないけど、どうしたの？」

「これ、タクシーじゃなくてハイヤーなの」

稲垣が涙目でハイヤーを指さす。

「この…電車でこい！！」

福元はおもいつきり怒鳴った。

「すみません店長」

福元と稲垣は深々とお辞儀をした。

「今日は生まれて初めての事ばっかだったよ」

店長はそういつてライブハウスの鍵を開けに行った。

確かにそうだ。開店前に楽器店の前に人がいたり、ハイヤーで来た高校生や、楽器店にハイヤー代を払ってもらうなど初めての事ばっかだろう。

「さあ、あの三人に負けないために頑張ろう！！」

福元からギターを差し出され、稲垣はしょうがなく受け取った。

「まずはコードでドレミをやろう」

「てかまずコードを教えるよ」

「うん、いいからやれ」

だが、やれって言っても初心者なため、福元はコードを教える事に決めた。

「まずドはC。こことここここに指を置く。やってごらん」

稲垣が弾いたら、ツーンって音が鳴る。

「なんだよ、この音は！！もう一回」

ペーン。

「なんだこりゃ…どんな弦の押さえ方をしてもこんな音出ねーぞ！！もう一回！！」

こうして、稲垣はいまだに音階も出来なく、福元はライブハウスの外でも聞こえるような声で怒鳴っていた。

そして三時間後、稲垣は見事ジャーンと音が出せるようになった。

「出来たぞ福元！！俺ってもしかして天才？」

「てか三時間じゃ普通に簡単な曲は弾けるってーの」

「なんですと」

稲垣は驚愕の真実に驚いた。

「さあさあ、本題のコードに入りますよ！！」

「もういいよ。帰っていい？」

稲垣はあくびしながら伸びた。福元の堪忍袋の緒が切れそうだ。

「あの三人が出来るってーのにためーだけ出来ねえってどうゆう事だ！！ああ」

「俺だって三人みたいに過去に経験してたら出来たってーの！黒崎に言え！」

稲垣は怒鳴ってドラムセットを蹴った。

「黒崎って誰だよ！？」

福元がごもつともな疑問でキレた。

「いいからやれ！！Cコードだ！！Cコード！！タバコ吸わせるぞ一言余計だよ…」と思いながら稲垣はCコードを押さえ弾いた。ペーン。

「お前もつバンドやめろ」

第十二話：福元的ギター教室（後書き）

次から稲垣視線に入ります。
ご了承ください。

俺が何をしたんだ？

ただ草むらに寝ころんだらあいつが現れていきなりギターやろつて言っただろ。

「昔は昔、今は今」

もついいよ、殺せよ。

どんどん福元的ギター教室がスパルタ教育になってゆく。
もう犯罪になるよ。これ。

第十三話：裏切り？福元と大沢（前書き）

とゆうわけで稲垣視線とさせて頂きました。
皆さんよろしくお願いします。

第十三話：裏切り？福元と大沢

ギター初心者高校生、稲垣誠くんの日記。

「九月30日。天気見てない。」

今日、僕は変なお兄さんにギターを習った。全然できなかった。もうやめたいな。ふふふ」

俺は昨日、福元っていう青年にギターを習った。

あいつの教え方、国語の先生が数学を教えるようなもの。とにかく、分かりにくく、厳しい。

最終的にはバンドやめろと言われちゃいました。お前が言ったんだろぅが！！

俺はそんな生き地獄から逃げるために大沢に電話をかけた。

ブルルと発信音を聞きながら大沢を待つ。

「頼む…出してくれ」

俺は心の中で何回も祈っている。

5、6回ベルが鳴る。未だに大沢は出ない。

出てくれと強く思いながら俺は足をバタバタさせる。

「もしもし、大沢です」

キタ――（・・）――！！！！！！！！

心の中で何回も何回もギター！！って叫んでいる。

「もしもし大沢？よかったよ、出してくれて…」

俺はホッと胸をなで下ろした。

「どうしたんだ？」

「うん、俺さ、なんか家にいるのも嫌でさ…遊ぼうぜ。四人でさ」

俺は必死に嘘をついて大沢達を誘った。自分からバンドに誘ったのに練習を逃げたと思われるのは嫌だからだ。

「いいぜ。新しいゲーセンが出来たからそこ行こうぜ」

「分かった」

「じゃあさ、長橋楽器店に集合な」

え…。今なんていった？長橋楽器店に集合？

「おい！大沢！ちよつと！」

電話は切れていた。

俺はケータイを落として崩れた。

俺、最大のピンチ系！？バイバイ、俺。

そんな事を思っていたら電話が鳴った。

ケータイのディスプレイを見ると、『大沢』と表示されている。

大沢だ！

俺はケータイをさつと拾って出た。

「もしもし」

『もしもしじゃねーよ。長橋楽器店に集合なのになんで来ないんだ』

『よ』

「わりい」

『もう来ないからタクシーをよこしたよ』

「マジで！？サンキュー」

『お前の家に着いたらクラクションを鳴らすからそれを聞いたら出るよ』

「OK牧場」

『じゃ』

俺はこんなにラッキーな人間だったのか？とりあえずラッキー。

数分後、二回クラクションが鳴った。俺はこの上ない速さで玄関を出る。

「待たせてすみ…」

ねえ、大沢はなんて言ったかわかる？タクシーガ、クルって言ったよね。あのさ、俺の目にはさ、車らしき物は福元の愛車しか見えないんだよね。

もしか、ハメラレタ！？

俺は道路の中心で友達を叫んだ。俺に対する友情はこんなしょぼいものなんだねと確信した。

「サボって遊ぼうなんていい身分だね。稲垣くん」

福元が愛車から降りて俺に近づいてくる。

「く、来るなー!!」

幽霊みたいに追い払おうとしても、それは人間。いつの間にか俺の目の前に来た。

神様どうか僕の不幸を直して欲しい。(GOING STEADY

「愛しておくれ改造編」

)

「行こうか、長橋へ」

それより、君、借金どうしたの?と言いたかったが、俺は涙を飲んで車に座った。

車は俺を乗せた直後発進した。

車が揺れる音と俺の心臓の鼓動がハモっていていい感じ。

「君は本当にラッキーだね」

「えっ」

心臓の鼓動と車が揺れる音のハモリを聞いていたら福元が喋ってきた。それも意外な内容だったから俺も反応した。

「早く来たら長橋の近くに来れたゲーセンで遊ばしてあげたけど、今来たらゲーセンに行けないからギターに集中できるね」

福元がニンマリした笑顔がバックミラーに映る。

てかつ、本当に出来たのかよ!!ゲーセン!!

大沢達のバカヤロー。ギターのバカヤロー。友情のバカヤロー。でもなぜ大沢は裏切ったんだ?

第十三話：裏切り？福元と大沢（後書き）

なぜ裏切ったのだ？大沢？

その言葉を残して俺は地獄へと連行された。

ふつつつと思いつく大沢との思い出。

なぜ裏切った？

答えてくれー！！大沢ー！！

とゆうわけで大沢の裏切りの真相が次回明らかになる。

第十四話：裏切りの真相

ども、俺大沢です。

今日の午前9時。屋良の電話で目を覚ましました。あいつ、元ジヤニーズだからって調子のりすぎなんだよ。

『おはよう大沢』

「るせー、俺の数少ない睡眠タイムを邪魔するんじゃないねえ」

『まあまあそれよりさ、遊ばねえ』

「なんで？」

『いやさ、長橋楽器店の近くに新しいゲーセンが出来てさ、そこで四人で遊ぼうかなって…』

「いいねー…稲垣はヤバくねえ」

『どうして？』

「あいつなんか福元のギター教室受けてるんだと」

『じゃあやめた方がいいな』

「だな」

そして、俺と屋良と大塚は新しいゲーセンへと行ったのです。

ゲーセンはこの街史上初の三階建てくそでけえゲーセンで、奥にパチンコもあるゲーセン。俺たちが着いた頃にはすでにいるせーゲームの音で賑わっていた。

「すげえ」

俺たちはゲーセンの進歩に感動し、お互いの全財産を持ちあつてパチンコへと向かった。

「すげー！！バンバン当たる」

大塚が三連続でスリーセブンを出して、レインボーな光に包まれたパチンコ台はすごい注目されている。

最終的にはパチンコのプロっぽいおじさんが『どいてみ』とか言つて大塚を追い出し、パチンコ台を占領してしまった。

その時の大塚の顔がすげー面白かった。

すると、俺のケータイに着信音が。ディスプレイを見ると、『稲垣』と表示されている。

「稲垣から電話だ」

俺が言うつと、屋良と大塚は出てやれよとか言ってたので、俺はゲーセンの外に出てケータイに出た。

「もしもし、大沢です」

「もしもし、大沢？よかったよ、出てくれて…」

「どうしたんだ？」

「うん、俺さ、なんか家にいるのも嫌でさ…遊ぼうぜ。四人でさ」

「いいぜ。新しいゲーセンが出来たからそこ行こうぜ」

「分かった」

「じゃあさ、長橋楽器店に集合な」

俺がそれを言い終わるとピーっと音が鳴って電源が消えた。充電が消えたのである。

なんか微かに『おい！』とか聞こえたけど。まあいいや。

とりあえず俺はゲーセンの中に入った。

「稲垣なんだって？」

「今からこっちに来るって」

二人は『マジで』と驚いた。

「稲垣方向オンチだからタクシーでよくね？」

屋良がタクシーを俺に薦めた。

「タクシー代ぐらい払える金はある」

大塚は頷いて言った。

「そうだな…あつ！もう稲垣に長橋楽器店集合って言ってしまった！！」

直後、二人からブーイングが発生した。

「バカじゃねえの。さっさと電話してこいよ！！」

俺はそう大塚に怒鳴られながらバカはおまえだよと思ってゲーセンに出た。

電話を発信すると、すぐに稲垣は電話に出た。

「はやっ！！」と声に出したい程早かった。

『もしもし』

と、俺は必死で嘘を考える。

「もしもしじゃねーよ。長橋楽器店に集合なのになんで来ないんだよ」

俺にしては立派なキレ方だと自分で感激してしまった。

『わりい』

「もう来ないからタクシーをよこしたよ」

『マジで！？サンキュー』

「おまえの家に着いたらクラクション鳴らすからそれ聞いたら出るよ」

『OK牧場』

「じゃ」

俺はケータイの電源を切った。

俺はふうーと息を吐いてゲーセンの中に入った。

ちなみにタクシーにはもう連絡したので、編集上カットになりました。

俺達が赤いサンドバッグがゆらゆら揺れているパンチングゲームで遊んでいると、見慣れた青年がゲーセンの中に入った。

そう、福元さんだ。俺は大塚達に福元さんが来た事を知らせると、二人は『福元さーん！！』と呼んだ。

こうゆう奴がいるから未成年のマナーはよく無いんだと俺は思った。

福元さんは俺達の所に走ってきた。

「やあ、みんな」

「どうも福元さん。どうしたんですか？ゲーセンなんかに来て…」「うん、ちよつと稲垣くんを待ってたらさ、見慣れない建物があったから見に来たんだ」

福元さんは疲れた顔をしていたので、よっぽどつかれていたんだ

なと思った。そんな福元さんを思って俺はアドバイス。

「稲垣ならここにタクシーで来ますよ」

「ほんとかい？」

福元さんは輝いた顔で俺を見た。

「はい。あと家に着いたらクラクションをするからそれを聞いたら出てこいって言いましたよ」

『おいおいそこまでの情報いらねーよ』と屋良にツッコまれた時、俺はとんでもない事を忘れてしまったのだ。

稲垣を探している福元さん。稲垣の『家にいるのも嫌で…』という電話。楽器が上手い俺らと福元さん。福元的ギター教室。厳しいからねと言った福元さんの顔。『稲垣は福元さんのスパルタ教育から逃げ出してリフレッシュに俺達と遊びたかったのだ。』

「ちよつと福元さん」

俺は呼んだが福元さんはいなかった。

もう稲垣を引き取りに言った。

ふっ、でもさ、タクシーが何十分も前に行ったしな…。

すると、電話がかかってきた。

「はい」

『すいません。只今軽自動車が無理な追い越しと信号無視で起こった事故で渋滞になってしまったため遅れるそうです』

タクシー屋からの電話だった。はは、福元さんのおかげで渋滞だって。笑えちゃうよね。はははは。

俺はくずれた。ゲーセンの中心で崩れた。

俺は誓った。俺のせいじゃないからね。稲垣と。

その後、稲垣がどうなったかは知らない。

第十四話：裏切りの真相（後書き）

ギター教室の最中に切れた弦、23000円。

ギター教室の最中に飲んだジュース代、1900円。

ギター教室のために使ったライブハウス代、40000円。

すべてはギター上達のために、priceres。

ついにギター教室、スパルタの域を越えてしまいましたよ。俺も
う死んじゃうよ。

第十五話：厳しくなるギター教室

今日、大沢から電話があつて裏切りの真相を教えてくださいました。俺は『へっへっ』と笑つてました。なんか変な状況になりながらも大沢の話を最後まで聞きました。

昨日、福元に連行された時、俺は泣き叫んでいました。明日、絶対大沢を訴えてやるってね。

「訴えるのは構わないけどギターを上手くしなきゃねえ」

そんな福元にちよつとカチーン。

そんなこんなでライブハウスに到着。

「さあ、前回の復習をしようか…ふふふ」

「はい…（俺泣いてます）」

必死に弦を押さえてるのにぶれるギターの音色。怒鳴りまくつて福元を背に緊張してまたぶれる。

しまいには、もうギターをするな！と叫びました。

本当はしたくない。ギターを投げて蹴つて『さようなら』と言つて去りたいが、なんかあいつの言う事に従うのはなんか嫌だから、『すいません』と謝つてしまう。これもある心理的行為なのかなー？
どんだん弦を押さえて弾いて、しまいには指から血が出た。

俺は助けを求める目で福元を見る。

「指に血が出たからって死なないよ」

な、なんやてー！！こいつ、死ぬまで俺にギターを触らせる気か！？俺はそんな人生ごめんだぜ。

指からはカミソリで指を切ったみたいにどんだん血が出てくる。俺はその度に指をしゃぶつて福元から『汚いな』と罵られる。

もう、これ完璧に傷害罪だよな？

そうだよ。傷害罪だよ。

そんなふうにギターを弾きながら自問自答を繰り返していた。時刻は午後七時になった。今までで口に入れた物は、家では昼に

自分で作ったおにぎり二個と、ライブハウスではペットボトルの飲料水一本だ。あと二時間で父親が帰ってくるし、もう夕飯の準備をしているだろう。

俺の腹が鳴った。腹がへった。

「あの一、なんか食べ物を…」

俺は最後の賭けとして、鬼に化した福元に助けを求めた。

「食べ物食ってギターが上手くなったらしいよ」

と言って、バックからおにぎりを出して食べ始めた。

俺はどんどん悔しさが増して行き、本気で上手くなってやると決意した。

「やってやる！」

俺は心の中で何回も叫んで強く弦を押さえた。

時刻は八時半になった。指からはとめどなく血が出ていて、ギターの弦にも血が付着して、俺の足下には血の水たまりが出てきた。なんだか大量出血のためか頭がくらくらしている。

福元は時計を見て頷いた。

「じゃあ今日はこれで終了」

よかった、終わった…。俺は心の中で何回もやり遂げたぞ！と叫んだ。そして倒れた。

意識がどんどん薄れていく。俺、ギターで死ぬんだなと思って、目をゆっくり、ゆっくりと閉じた。

誠！誠！

誰かが俺を呼んでいる？福元か？

暗い暗い空間の中で俺は誰かが俺を呼んでいる声を聞きつけた。

俺は声のするほうに歩くと、かすかだが白い光が見えた。俺がどんどん歩くと、眩しいくらい輝いている光が俺を包んだ。

ここはどこだ？俺はゆっくり目を開けると、眩しい蛍光灯の光を浴びながら、泣いているお袋と萌と、心配の眼差しで見ている親父

が、俺の顔を見ていた。

「誠、起きたの？」

お袋が俺の手を強く握って泣きながら俺に聞いた。

「ここは」

「病院だよ、兄ちゃん」

萌が涙を拭いながら答えた。

俺は病院に運ばれるのは初めてだからぐるりと病室を見渡した。すると奥の方で左の頬を赤くした福元が立っていた。

「福元……」

俺が呟くと、お袋が俺が悪い事をした時に見る目で福元を見た。

「あんた、まだいたの」

萌が突き放した感じで聞く。

「出てってくれ！！誠はもうギターを止めたんだ！もうあんたの顔は見たくない！出てってくれ！！あんたがいると治る物も治りやしない！！」

親父が厳しい言葉で福元を追い出そうとする。

その時、俺は聞き逃してはいけない言葉を聞いた。ギターは止めたって聞こえた。

福元は拳を強く握りしめながら病室を去った。

あの赤くなった頬は親父が殴ったのだろう。

「誠、もうあの人の言うことは従わないようにね。わかった？」

お袋が俺の手をまだ握りしめながら俺に言い聞かせる。

俺は小さく頷いたがよくわからなかった。

第十五話：厳しくなるギター教室（後書き）

こうして俺はギターを止める事になった。

やりたい事をやるのが一番いい成長のしかただ。と、音楽チャー
ト一位を記録したバンドのボーカルの語る。

夕焼けは空は規則性もなく雨になったり空を雲で覆ったりする。

俺、これでいいのかな？

俺は血で滲んだ包帯を見ながら考えた。

第十六話：一番苦しんでいる人

俺が苦しんでいたギター地獄に、こんな簡単に抜けられるとは思わなかった。

教室に着くと、大沢が笑顔で俺の所にやってきた。

「聞いたぜ。ギター、親に止めさせられたんだってな」

俺に笑顔で振る舞っているが、今朝の裏切りの真相を教えた電話の時の方が数倍元気があった。しかも何か言いたいと顔に書いてあった。

「通学途中に福元さんと会って詳しく話聞いたんだ。でもさ、ギターで倒れた奴なんてそんなにいないぜ。はははは」

一生懸命俺を笑わせようとする大沢が気の毒に思えた。

本当は俺たち悪い事しか能が無い不良が、ケンカよりも本気になったのが、福元が誘ったギターだった。俺はギターを触るのも初めてだが、弾いていると楽しかった。

俺は俺を病院送りにした福元より、こんな量で倒れた俺を恨んでいた。

包帯がまだ血で滲んでいるからもつと自分に腹が立つ。

不良の唯一好きな教科（なのか？）、体育はあんな手じゃ出来ないから休んだ。体育は今フットサルをやっていて、俺が抜けたチームは体育の教育実習生（サッカーど下手）が入っていた。

シュートのチャンスだったが、思いっきり空振りしてその間に相手チームに取られていた。

チームメイトは『ドンマイ、ドンマイ』と言っているが、内心では、あんにやろー、教育実習生でおまけにイケメンだからって調子に乗りやがって思っているだろう。

俺は、みんながフットサルに夢中になっている途中に、包帯を解いてみた。

指にちよつと当たるだけでズキズキしてしまう。その度に俺はこ

んなに強く押さえていたのかと思った。

やっと解けた。傷を見ると自分があわれになってしまった。

指全部がカミソリで切られた感じで指の第一関節のちよつと上あたりに血で書いた線が引かれてるようだ。しかも周りには卵の黄身のような色の膿みがある。

しばらく傷を見ていると、だんだん傷口から血がたらたら垂れてきた。俺は慌てて包帯を巻こうとするが、上手くいかず、けっこう血が出た状態で先生に気付いてもらえ、救出された。

「まったく自分の健康状態をよく見てからこういう事をしろ！」

保健室で手当をしながら体育の先生に怒鳴られた。わざわざ保健室で怒鳴るなよ思っていた。

だいたい俺は自分の傷の状態だつてわかっていた。

じゃあなぜ見たかというと、俺は自分の傷の痕跡を確認したかったのだ。自分が一生懸命行動し、傷つけた記録をこの場で確認したかったのだ。

まあ毎日日記を付けるような感じだ。アサガオの観察日記でもいいだろう。

帰りに大沢達と新しく出来たゲーセンに寄る事にした。

行く途中に長橋楽器店を横切る事にちよつと抵抗したが、新しいゲーセンに行くから俺はすんなり受け入れた。

どんどん四人で歩いて、ついに長橋楽器店を横切る時が来た。

近づく度に思い出してしまふ。血だらけになった指。大量出血による病院搬送。鬼と化した福元。

傷口がいきなりズキズキしてきた。俺は『いてー！』と傷口を押さえると、ギターの音色が聞こえてきた。

「誰かギターを弾いてるぜ」

俺が言つと、みんなギターの音色を集中して聞いてみた。

すると、ギターの音色に合わせて屋良がベース音を口で奏で始めた。

俺達が屋良が奏でているベース音と一緒に聞いてみると、大沢と大塚もそれぞれの楽器の音を口で奏で始めた。

俺が合わせて聞くと、バンドをしているように聞こえてきた。

「すげー、本当のバンドのようだ」

俺が拍手をすると、いきなりみんなが袖をまくったりしてきた。

「なっ、なんだよ！！これ？」

俺が驚くのは当たり前だ。

屋良は肩にテーピングが巻いてあって、大塚は手首にテーピングがグルグル巻いてあって、大沢は首に何かが切れた跡があった。

「いやあ、福元さんの訓練はきつかったよ。俺なんか1日七時間ぐらいベースを肩に背負いっぱなしだよ」

屋良がもうこりこりだって顔で言った。

「俺も1日の三分の一の時間はスネアをずっと叩いてたぜ」

大塚がドラムを叩いてるジェスチャーを入れながら言った。

「俺なんか下手だってピアノ線持って追いかけられた挙げ句こんな様だよ」

俺はピアノ線を両手に持って大沢を追っかけている福元を想像すると笑えた。

「お前だけじゃねえんだよ。苦しんでるのはよ」

大沢は長橋楽器店の方向を指さすと、カーテンの影で福元が弦を変えている途中で指を切ったのか痛そうにもがき苦しんでいる。

俺、こんなんでもいいのか？俺より傷ついてる奴が近くににいるのに俺はこんなんでもくたばっていいのか？

俺は血で滲んだ包帯を見た。

その後、俺はゆっくり息を吸って『うりゃああ！！』と叫び、道

路に拳を叩きつけた。

「行くぞ!!」

「おう!!」

俺達は長橋楽器店に向かって走り出した。

第十六話：一番苦しんでいる人（後書き）

肩にテーピングした屋良より、腕にテーピングした大塚よりピア
ノ線で首を軽く切った大沢より、ギターによる大量出血で倒れた俺
より苦しんでいる奴がいる。
そう…福元健吾だ。

第十七話：ソング・オブ・スカイ

俺達がライブハウスの二重扉を開けると、弦で切れてしまった指を絆創膏で巻き付けている福元がいた。

「福元…」

俺が呟くと、それに気付いて福元がこっちを向き、すぐ顔を伏せた。

多分福元にとっては今一番会いたくない奴は俺たちであろう。

「帰れよ、俺とお前らはもう縁が切れたはずだろ!!」

福元はギターをケースに閉まって帰ろうとした。

「おい、待ってくれよ!! また俺たちとバンドしようぜ」

俺は心の奥の奥にある気持ちを掘り返して言った。

「お前：なんで警察行かないんだよ? てめーらもだ」

「えっ?」

俺たちは何が何だか分からなかった。急にバンドから警察の話になったからだ。

「怪我してるんだろ!! てめーら!! これは完璧な傷害罪だろ!! そつしたら俺は捕まって地獄の練習から解放されるだろ!!? 何で警察にその事を言わないんだよ!!」

福元は怒鳴りながら聞いた。

変なサル芝居はやめろよ。と俺達は思った。

「だから訴えないんだろ」

そう言って俺はライブハウスにあったギターを持って弾き始める。

「やめろよ!! 怪我がひどくなるだろ!!」

俺は福元の反対を押し切って弾き始めた。俺が弾いたのは、福元が弾いていた曲。

福元はすげー驚いていた。

みんなも頷いてそれぞれのポジションに着き、演奏を始めた。

俺が聞こえてる限りでは合っていた。俺がちょっとだけけど他の弦を弾いてしまっただけだ。

「すごい、タイミングがバッチリだ……」

微かにそう聞こえた。

演奏が終わると福元が盛大な拍手をした。

「いやぁ…すごいよ…。もう俺に教えてもらわなくても、大丈夫さ」

「何言ってるんですか」

と、4人で福元にツッコんだ。

「一緒に空を語りましょう」

俺はギターを福元に返しながら言う。

すると、福元は微笑みながらギターを握った。

「空で語れない物は無い。ギターで語れない物は無い。お前らには空でも何でもギターやベースやドラムで語れるはずだよ。俺の教室の卒業式はもう終わりだ！」

「えっ？」

卒業式なんていつやってたの？俺はそう思っていたら何故か福元はギターを弾き始めた。

「今からー おまえらはー 俺たちのー バンドメンバーさあ」

なんか熱唱し始めて、終わったら息をふうつと吐いた。

「バンドの名前、決めようか」

福元はニヤリと笑いながら絆創膏を剥がしていた。 なんか、血が垂れているのが分かる。

「あのさ、案があるんだけど…」

何言ってるんですか。しか言わなかった大塚がちょびつと手を上げて立つ。

何を言っただこいつは？と思いいながらもいつしか大塚のこれから言う案に耳を傾けてしまう自分がいる。

「空の歌、sky of song。なんてどうですか？」

スカイ・オブ・ソング。俺たちはニヤリと笑った。

「すげーよ！！スカイ・オブ・ソング！！」

「なんかカツコイいな！」

「よし、sky of songに決定だ！！」

俺は立ち上がって叫ぶと、三人も立ち上がって『おう！！』と叫んだ。

「いや、ちよつと待て」

福元の真剣な反論（かな？）にビビってちよつとシラケる。

「いいじゃん」

福元も笑いながら俺たちに寄ってきて訳分からん言葉を叫んだ。俺たちもとりあえず叫んどいた。

そして、俺たちのグループ名はsky of songに決まった。

なんか、血が垂れているのが分かる。

「あのさ、案があるんだけど…」

何言ってるんですか。しか言わなかった大塚がちよびつと手を上げて立つ。

何を言っただこいつは？と思いつながらもいつしか大塚のこれから言う案に耳を傾けてしまう自分がいる。

「空の歌、sky of song。なんてどうですか？」

スカイ・オブ・ソング。俺たちはニヤリと笑った。

「すげーよ！！スカイ・オブ・ソング！！」

「なんかカツコイいな！」

「よし、sky of songに決定だ！！」

俺は立ち上がって叫ぶと、三人も立ち上がって『おう！！』と叫んだ。

「いや、ちよつと待て」

福元の真剣な反論（かな？）にビビってちよつとシラケる。

「いいじゃん」

福元も笑いながら俺たちに寄ってきて訳分からん言葉を叫んだ。

俺たちもとりあえず叫んどいた。

そして、俺たちのグループ名はs k y o f s o n gに決まった。

第十七話：ソング・オブ・スカイ（後書き）

注：s k y o f s o n gと文中にありましたが、実際はs o n g o f s k yでした。誠に申し訳ございませんでした。

ソング・オブ・スカイがグループ名に決まった俺たちは早速新しい曲を作る事にした。

もちろん、俺たちが演奏したあの曲。それに歌詞をはめ込むだけ！！
うおー！！なんだかマジでバンドっぽくなって来た！！

そんな俺たちのふざけたライブハウス・ライフを見て下さい。

第十八話：スルメ狂騒曲

季節はちよつと肌寒い風が体に直撃する秋から冬への前兆。そんな時にファーストソングの制作が始まった。

「アメンボ青いなあいうえお…」

「ちげえよ!!」

大塚の目の前にペチンと長い定規が叩きつけられる。

「アメンボ赤いなあいうえおだろ!!」

勉強はまあまあ出来る屋良が長い定規を鞭代わりに、大塚にあいうえおソング（キモい）を覚えさせようとしている。小学校でやらなかったのか？と俺はギターを弾きながら思った。

「いいからおまえらもやれよ!!」

大沢が二人怒鳴りつける。そんな大沢もキーボードを弾いてない。何故かと言うと、キーボードの鍵盤の間に何故だかスルメが入っていて弾けないのだ。俺たちはこのスルメは福元の酒のつまみだと思っている。

「ぜってー、俺じゃねえ」

と、涙ぐみながら福元は弁解している。

俺は溜め息をついた。ぜってーやる気ないよな、このバンド。

やっとの事で大沢、屋良、大塚が曲作りに専念し始めた。大塚と屋良は、アメンボ赤いなあいうえおと言えたからよししようという事になった。一方大沢はピンセットと手を組んで何とかスルメを救い出せたのだ。

だが、福元は未だに『俺じゃねえ』と濡れ衣をさせられた小学生のようにふてくされてる。

誰か言ってやれよ。スルメも歩けるんですよって。

「あの時風間君にお弁当のウインナーをあげたのに、風間君はなにもくれなかった」

と、小学校時代の悲しい思い出をブツブツと呟いていた。

『うぜー』と小さい声で俺は今すごくムカついてるぜ！！と出張するような言葉を屋良が言った。

大沢がジャンと大きな音を立てて鍵盤を平手で叩きつける。
大塚はへこむぐらい強くスネアを叩いている。

俺は：もうギターも触ってません。

なんかすごいシラケて、何もする気になれなかったんです。

「スルメも生きてていいよな」

と、呟いてみるが未だに福元はブツブツと何かを呟いている。

「はあ：！もういいよ！大沢、あのスルメ、俺のだ」

屋良がやり切れない声でみんなに白状する。

福元がその言葉を聞いた途端バツと屋良の方を向いて、屋良の方に近づき、パイルドライバーを屋良にしかけた。

「てめーよお！！俺がどれだけ苦しんでたのか分かるかよおお！

！」

「いたい！いたい！いたい！ギブ！ギブ！」

「よろしい」

よろしいじゃねえよ！！てか何がよろしいんだよ！！

俺もパイルドライバーをくらってやると思ってた立ち上がりうとしたが、

「あ」

と、福元が何かに気付いて喋り始めた。

「そついえば屋良と同じく俺もスルメ食ってたな：ははは、ドンマ
イドンマイ。スルメも歩けるって」

福元が屋良の肩を叩きながら話した。屋良は堪忍袋の尾が切れて
暴れ始めたところを大沢に押さえられてる所だ。

「てめーをかばってやったのよー！！すげームカつく」

「落ち着けて屋良！」

「さあ、みんな、サボってないで本気でバンドを始めよう。ははは。
(爽やか)」

なあ、このバンドやる気あるのか？

第十八話：スルメ狂騒曲（後書き）

筆で書かれた果たし状。決戦を申し込まれたのは屋良と大塚だった。二人はカツアゲされそうになった所を殴って逃げきったのだ。「大塚はそんなに悪くねえ」と、カツコつけて屋良が行った。だが

第十九話：『果たし状』

俺、元ジャーニーズJr.の屋良です。

さてさて、いつも俺たちが練習している長橋ライブハウスにとんでもねえ物が届きましたよ。

『果たし状』だって！今時そんなの書かねえよ。

内容を見てみると…。

突然の手紙、申し訳ございません。

（敬語！！）お二人に手紙を出した理由は、先日、私達がお二人にお金を拝借させてもらおうと、お二人に所持金額をお訪ねし、貸して頂こうと思った所、お二人は容赦なく暴力を振るいました。

私達が通っている高校は暴力に関しては一番という記録を残しておりまして、お二人がその記録を汚したという事になりますと、とても許されべき事ではありません。なので、お二人に決闘を申し込むためにこの手紙を送りました。明日の午後三時壊されてしまいました廃工場で待つております。お待ちしています。敬具（拝啓が無いのに？）
高校、大塚進、屋良慎様へ。
高校、古谷より。だつてー。

「どうするん？屋良と大塚」

稲垣が真剣な眼差しで俺と大塚を見ながら聞く。

「てかさー、カツアゲされそうになったのを殴って逃れただけなんだからあいつらが怒る意味が分からねえ」

大塚がふつきれた感じで主張する。でも同感だ。

「無視ればいいんだよ。俺なんか何回もこんなの来たけど無視したぜ」

福元が自分の実体験も加えてアドバイスをするが、実体験は本当なのか分らない。

まあとりあえず無視する事にした。てか最初からそんな気はなかった。

だが、あの高校はそんなに甘くはなかった。

翌日、また『果たし状』が届いた。もちろん差出人は古谷である。中身を見ると、こう書いてあった。

てめー！！なんで来ないんだよ！！今度の今度は許さねえ。また同じ時間に待つ。今度来なかったら君達がいとも集まる場所が消えるから覚悟してね。それじゃあ。と、血らしき物で書いてあった。

「やべえよ。これは」

大沢が果たし状をじっくり見ながら言う。

「頼む。このライブハウスだけは消えては困る」

福元が慌てて俺たちにケンカを買う事を頼む。

「しょうがない。行くか」

大塚がやれやれって感じで俺に言う。だが、俺の心の中は違った。

「いや、俺だけで行く」

「何！？」

俺の衝撃発言に全員が驚いた。まあそんなに俺はケンカに参加しなかったから無理もないと思う。

「なんでだよ！？屋良！？俺達に売ったケンカだろ？なんでお前だけなんだよ！？」

大塚が納得いかないのか俺に反論して俺の所に歩み寄ってくる。

「よく見る。大塚」

俺は果たし状を大塚に見せた。

「一枚目の果たし状の一番下に古谷よりってあるだろう。高校

とは書いてあるが古谷だけしかこのケンカに参加しないだろう。しかも一回俺たちが倒した奴だから一人で余裕だろ？まあピンチになったら助太刀を頼むけどな。分かった？」

「お、おう」

大塚は納得をしてくれた。それにみんなも納得をしてくれて、俺にがんばれよとエールを送ってくれる。

俺がさっき言った事はカッコつけるために言った演技では無い。心の中で思った事だ。

「待つてろよ、古谷」

俺はそう呟いてエアークロッキングを始めた。

翌日、俺は学校をふけて、午後三時に間に合うように家を出発した。

「屋良」

声がある方を見ると、大塚が自転車に乗ってやってきた。

「来たな、大塚」

大塚はキーとブレーキをかけ、俺の前に自転車を止めた。

「ちゃんと助太刀するからよ」

俺はニツと笑顔を浮かべて、大塚と共に廃工場へと向かった。

午後三時二分ごろ俺たちは廃工場に着いた。

「大塚はここにいろ」

俺は大塚を入り口の死角に隠れさせ、助太刀を頼む時は右の中指を上げるからその時は宜しくと頼んどいた。

こうして、俺は廃工場の中に入っていった。大塚を残して…。

工場の中には、古谷がポツンと一人で立っていた。俺はそこに向かってゆっくりゆっくり歩いた。

「久しぶりだな。屋良」

古谷がニヤリと笑顔を浮かべて俺に話しかける。

「お前と会ったのはあの時だけだ」

と、俺は拳を構えて決闘の準備をした。

古谷はニヤリと笑って指をパチンとはじく。すると、四方八方から古谷と同じ制服を着た奴（鉄パイプ持参）が現れた。

そして、一気に俺は囲まれた。

くそ、予想外の展開だな。まあ、でもやるだけやってみるかと思っただけだ。

「かかってこい！」

俺が叫ぶと、古谷の仲間が鉄パイプを振りかぶりながら俺の所へ。俺はよけられそうな鉄パイプをよけ、そいつを蹴りや殴ったりし

て倒す。挙げ句の果てには落ちてあつた鉄パイプを二本持つて古谷の仲間を殴り倒した。

だが、古谷が仲間の中に隠れて俺の足下に鉄パイプを置き、俺がそれを踏んでこけるのを待った。

案の定、俺はこけた。その瞬間古谷の仲間たちが俺を囲んで鉄パイプで殴ったり蹴ったりした。

俺はこれじゃあ勝てそうにも無いから大塚に助けを求める合図を出そうとした。

「何やってるのかなあ？」

古谷が笑いながら俺の右手を踏んだ。

「ぐわあああ」

俺は痛さのあまり叫んだら、古谷の仲間の一人が首に鉄パイプを当てたため、俺は気を失った。

「まずは一人目完了」

古谷が気を失った俺をおもいつき蹴って隅の方へと飛んだ。

「えっ、もう一人いるのかよ」

古谷の仲間が聞く。

「ああ、そこに隠れてる奴、出て来いよ」

古谷の視線は、大塚が隠れている場所だった。

第十九話：『果たし状』（後書き）

屋良が負けてしまった奴に見つかってしまった大塚。

俺はいつも屋良にくっついていただけ、こんな俺でも一人で出来る事があるのか？

そんな時、『あなたにも一人で出来る事はあるはずよ』という声がしてきた。

あの声は、一体誰なんだ？

今回は大塚目線で行かせていただきます。

第二十話：金魚のフン

「ああ、そこに隠れてる奴、出て来いよ」

俺は足をガタガタ震わせていた。そして、行こうかどうかを迷っていた。

影があるシャドーパンチが得意技のケンカ界でも噂の屋良が、俺の目の前であっけなく倒されてしまった。

その時、俺は感じた。やっぱり質より量だよなって。

「早く出て来いよ。出て来ないならこっちから行くぞ」

古谷が鉄パイプをカンカンと鳴らしながら俺に呼びかける。

やべえよ。本気でやべえよと思いながら死角で隠れていた。

よく考えてみれば、俺っていつも人の後をついて行く事しか出来なかったなあ。どんな身分になろうとも、人に嫌われなければいいって思ってたな。

俺は空を見上げた。そういえば、一人で空を見たのも久し振りだな。

だいいち屋良も、なんで俺を一人にしたんだ。もしかして、足手まといになるからなのか？やっぱ、俺は人がいなきゃ何も出来ない金魚のフンなんだ。

「さっさと出て来いよ!!」

古谷は鉄パイプをガンガンと鳴らした。結構キレている。

今逃げれば逃げ切れるかな。俺はそう思ってゆっくり立ち上がった。

「待って!!」

どこからともなく俺を呼び止める声があった。俺は不思議に思ってた。辺りを見回すと、目を疑うような光景が映った。

よ…妖精？妖精が俺の周りをくるくる飛んでいる…。こんなファンタジー小説みたいな光景、生まれて初めてだ。

「初めまして、私はピリオドの妖精。よろしくね」

ネーミングセンス悪いなあって思った。

「あなたの今の状況を見ると、命に関わる問題の可能性高いね」

「なあ、妖精なんだろ！？魔法を使って俺を強くしてくれよ」

俺はもう何をしていいのか分からなかったたので、ついに妖精に助けを求めた。

「私、魔法使えないの」

えっ……？お前妖精じゃないのかよー！！

「魔法なんかかけなくても、あなたは強いよ」

「どこが！！俺は金魚のフンなんだよ……」

俺が落ち込むと、妖精が杖らしき物を出してきた。そして、その杖からビームが放たれ、ビームは俺に直撃した。

魔法、使えないんじゃないかってたっけ…と俺は思った。

俺は小学生の頃、ケンカが強いと有名だった。俺の友達の傘が盗られた時も、俺はその犯人を突き止めて、そいつを血だらけにして傘置き場に置いた思い出がある。他の不良小学生や中高生にも恐れられ、いつの間にか愛称が付けられた。確か…。すると、俺は頭の奥の方で流れ星みたいな光がたくさん出てきた。

「そうか！！」

俺は叫んだ。

俺でもこんな俺でも一人で出来るケンカがあった。金魚のフンだって、いつかは切れるんだ。

俺は覚悟を決めて、廃工場の中に入った。

「やっと来たか…」

古谷はよっぽど待ってたのかニンマリと気味悪い笑顔を浮かべた。

「屋良の恩返しが来るまで俺が暇つぶしさせてあげるよ」

俺が自信満々に言くと、古谷はマジ顔になって仲間に『やれ』と命令した。

仲間は鉄パイプを振りながらこっちへ走ってくる。

「死ね」

仲間がそう言いながら俺の腹に鉄パイプを刺そうとしたが、俺は

足で受け止めた。全然痛くない。

俺はその足をそのまま振って仲間の一人を蹴り倒した。

「…やれ」

古谷が言葉をちよつと失いながらも仲間に命令した。

仲間は叫びながら俺に鉄パイプを振ったが、俺はそれをよけてかかと落としをし、後ろから狙おうとした奴を後ろ蹴りでひるませた。そして、かかと落としした奴を蹴り飛ばした。結構飛んで鉄にぶつかり気を失った。

「お前、まさか…」

古谷の顔が青ざめてゆく。こいつも知っていたのか。

「そう、俺は地獄のキックパーティーという愛称の大塚だ!!」

第二十話：金魚のフン（後書き）

今まで金魚のフンだった俺は一人でこんなにすごい数のヤツとケンカしてしまった。

「ふざけんじゃねーぞ…」

ついに始まった古谷とガチンコ対決。さーて、地獄のキックパーティーの始まりだ…。

第二十一話：地獄のキックパーティー

「地獄の…キック…パーティー…」

古谷の顔が青ざめていく。怯えているのだろう。

「…やっぱりお前も知っていたか」

俺は歩幅を大きくして歩き、古谷に近づく。

「く、来るな…！！！！」

古谷は持っていた鉄パイプを振りながら俺を近づかせないようにする。

そりゃそうだよな。小学生の時に高校生三人とのケンカで全員半殺したからな。昔の思い出がふつふつと蘇る。

「…まあ、これは小学生の時だ。今のお前はそれよりも劣っていると思うぜ」

古谷がニコニコしながら近づく。

「ばーか」

俺がそう言うと、古谷はキレたのか鉄パイプを構えながら走ってきた。そして、俺の目の前に着き、ニンマリと笑いながら構えていた鉄パイプを下ろした。

「本当にばかだよな」

俺は下ろされた鉄パイプをよけて、古谷めがけて強烈なキックをする。

「ぐふあは！！」

俺の蹴りは見事古谷のみぞおちに命中。古谷はみぞおちを押さえながら倒れた。

「弱えなあ…」

俺は古谷を見下す。

「やつ、やつちゃえ！！」

古谷が負けた事に怯えながらも古谷の仲間たちが鉄パイプを持って襲って来た。

「すげえ、こんなにたくさんの奴、相手にしたことねえ。これこそ地獄のキックパーティーにはちょうどいい」

俺は余りの人数の多さにひるんだが、やりがいがあるからケンカをする事に決めた。

仲間たちは『うおおお!!』と叫びながら俺に向かって突っ走る。

「面白え。かかってこい!!」

俺は走ってくる古谷の仲間めがけて走っていった。

「廃工場って何処にあるんだよ…」

稲垣と大沢は今俺が奮闘している廃工場を探している。

「ねえ大沢、交番行こう。交番」

稲垣は大沢に寄りすぎる。

「高校生が廃工場に行く用事ってケンカしかないだろ。交番に行ったら警官も一緒についていくだろ」

そういえばそうだなと稲垣は思った。

「コンビニで地図買って工場の地図記号を探してそこに行くべ」

「あつたまいい!!大沢。よっ、知将!!高校教師」

「よせて…」

稲垣は大沢を微妙にほめ殺した。高校教師って誉めた事になるのか？

「とにかく行くぞ!!コンビニへ!!」

二人はコンビニへ向かって走り出した。

「大沢家直伝秘技!!ヒューマノイドタワー!!」

俺は技の名前を叫ぶ。別に大沢家直伝ではないが…。その後タワーのように倒立してばた足のように足をバタバタして相手を蹴り倒した。

「ぬはっ!!」

うめき声をあげて人々が次々と倒れる。

「全員倒すぜ!!デス・ストリート」

俺は古谷の仲間と仲間との間の隙間を探し、その隙間を繋ぎ合わせて道を作った。

その俺が作った道を歩きながら周りにいる人達を蹴り倒してゆく。もちろん、みぞおち狙い。

ははは、面白いように人が倒れてるよ。俺は自分の強さに誇りを持った。

「てか何で地図買いに行ったのにさけるチーズなんか食ってるんだよ」

大沢は地図を買いうついでにさけるチーズも買ってきた。（ダジャレじゃないよ）それを裂いて食べている。

「だって好きなんだもん」

大沢は裂いたチーズをまた裂いて食べた。

「初めて見たよ。道端で地図を見ながらチーズ食ってる人」

稲垣は生まれて初めてみた光景に感動していた。

「それよりあったぞ。工場の地図記号。しかもこの名前の工場、前潰れたって噂があるぜ」

大沢が指をさす所にはまさしく工場の地図記号と、潰れたと噂されている工場の名前が記されてあった。

「おっ！！本当だ。行くぞ！！大沢」

二人は工場に向かって走り出した。

「…やっと着いた」

大沢と稲垣が見た光景は、一つの雑音もなく迫力がある廃工場だった。

「…心霊スポットぽくね？」

稲垣の発言に大沢は頷くしかなかった。

「行くぞ」

二人は唾を飲んで工場に入った。

「屋良ー！！大沢ー！！」

二人は口をあんぐりあけて啞然としていた。無理も無いよな。だって俺以外みんな倒れてるんだもの。

「よっ！！大沢、稲垣」

「お…大塚…」

俺はその声が聞こえるまで二人の存在に気付いてなくて今まで見てたかと思つてビビった。

「屋良は？」

「やられちまつて倒れてる」

俺は指をさして屋良の状態を伝えた。

「うわあ、ひでえやられよう。てか大塚は大丈夫なのかよ」

大沢が心配する。

「大沢、稲垣。知ってるか？高校生を半殺しにした小学生がいた事」

二人は顔を見合わせて頷いた。

「確か、地獄のキックパーティーっていう異名を持つんだろ？」

俺はゆっくり頷いて自分を指さした。

「それ、俺の事」

俺がそう言つと、しばらくの間シラケた。

「はあ！？」

二人が同時に反応した。理解するのに時間が掛かったのだらう。

「えっ、それ大塚の事なの？」

稲垣が聞くので俺はまたコクリと頷いた。

「すっげーな。大塚」

稲垣と大沢は俺を尊敬した。

その時、倒れていた仲間の一人が、手をブルブル震えさせながら鉄パイプを強く握り、俺にめがけて振った。

「！！。大塚！！危ない！！」

俺が振り向くと、そこには人影があり、鉄パイプの攻撃から俺を守ってくれた。

「今まで、伸びてて悪かったな」

笑顔だが、笑顔の裏では真剣な気持ちの屋良が守ってくれたのだ。

「屋良!!」

「平気なのか!？」

「打ち所悪かったのか？」

俺たちが屋良を心配すると、屋良が疲れた表情になった。

「はあ、お前にだけいいところ取らせねーよ」

屋良はそういつて鉄パイプを持った仲間を殴り倒した。

大塚はふうと息をついて、屋良の所へ行き、手と手を叩きあった。

「まずさ、古谷って一体何？」

稲垣が今誰もが知リたがつている質問を俺たちにした。

「喧嘩が出来ない不良だよ。かもふらーじゅってやつ」

稲垣は『ふうん』と言いながら納得した。

俺は思う。あいつは今まで自分に逃げていた自分に活をいれるために俺たちに『果たし状』を送ったのだと思う。もう自分をカモフラージュしたくなかったんだなあとと思った。バカな俺でも分かるよ。それくらい。

まあ、今日はみんなに対する俺の見方が変わった日だと思う。

第二十一話：地獄のキックパーティー（後書き）

遂にバンドでいう大きな一歩ともいえるSONG OF SKYの
第一曲目が完成！！

歌詞も乗せちゃうぜ！！

そのタイトルは…『恋ものがたり』

ちなみにそれをつくった福元ちゃんは彼女無し。んじゃラブソング
なんて作るなよ。

次回からは稲垣視線になります。

第二十二話：ゲロパゴスの叫び

いつもの長橋ライブハウス。そこにはいかにも“バンド”を奏でている俺たちがいた。

「心の中で秘めた思いが時々爆発するほどドキキして」

いつもは俺たちの練習を眺めて頷くだけだった福元も胸を押さえながら歌っている。

「未来に向かった」君と僕の物語」

福元の歌に俺たちがハモって、最後に福元が

「終了うー！フーー！！」

と叫び、大塚が綺麗なシャララって音をハイハットで奏でる。

福元がフーと息を吐く。俺たちは息を飲む。

福元が俺たちの方を向いて、腕で丸を描く。

「ヨッシャーーーーーー！！」

俺たちは歓喜の叫び声を上げる。

「やったよ」。ついに俺たちオリジナルの曲が完成されたんだ」

大沢が嬉しさの余韻に浸っている。

そう、スカイ・オブ・ソング、初めてのオリジナル曲が完成したのだ。…別にコピーバンドじゃないけどね。

「でもこれすごくね？歌詞」

屋良が歌詞が書いてある紙を見て言う。

「君が好きだよと言うと僕は地球温暖化よりも暖かくなりそうだ。とか恋が叶った男子高校生みたいだよな」

「これ体験談かい？福元さん」

大塚が福元に聞くと、福元は首を横に振って

「告った事もない」

と言った。

「そつか…告った事ないかあ……はああ！？」

俺たちはめちゃくちゃ驚いた。なんか外見からは何回か告って成

就する感じだが予想外の発言に驚いた。

「何だよ何だよ！！告ってなくて悪いかよ！？」

福元が以外そうにツツコむ。

「なあ、せめて赤ん坊の時には『ママ大好き』とか言ってたよな？」

屋良が聞くと、福元はんーと…。って感じで考える。

「俺赤ちゃんの頃から反抗期！！」

と言って親指を立てた。

信じられん。てか反抗期早すぎる。

「あんた、いい歳なんだからそろそろ恋をしなきゃ…」

大塚は肩を叩きながら満面の笑顔で福元に言う。俺からも分かるようにその顔を見ると必ずイラつく。福元も今イラっている。

「ははは、大丈夫さ」

福元がまた右の親指を立てて反抗する。

「どうして？」

俺らが聞くと、福元は笑顔になった。ちょっと気持ち悪い。

「だって結婚適齢期って75歳でしょ？」

！？。何考えてるんだよ…。倍以上違うぞ。

俺がそう思っていると、福元がピョンピョン跳ね出した。

「！？…何やってるんだよ？」

大沢が聞く。

「俺が、何かを考えてる時は、ピョンピョン跳ねなきゃ、思い出さないの」

跳ねているため音が途切れ途切れになっている。

福元がピョンピョン跳ねている間、俺たちはそんな福元を見下している。何か福元を蹴りたい。

ピョンピョンピョンピョン…。ピョンピョンピョンピョン…。だんだん苛立ちを覚えてくる。

「だー！！長いんだよ！！！！」

「思い出したああああ！！」

「うつせええ！！」

「てめえもうるせえよ!!」

ライブハウスの内で怒号の叫び声が飛び交う。防音室じゃなければ騒音だな。これ…。

「思い出したんだよ!!」

福元の顔が輝いている。

「だから何が!？」

俺たちがイライラしながら答える。

「思い出したんだよ!! 告られた経験があるんだよ!!」

「はあい!？」

福元の経験からするとこうだ。

修学旅行の最終日、福元の学校一同は京都で自由行動をしている事になった。

福元は仲のいい友達2人と三人で行こうとしたとき、女子四人組に呼ばれた。

「私たちと一緒に行き!!」（女子）

三人は別に嫌でもなかったので承諾した。なんか、あいのりっぱになっと思った。

しばらく七人と京都見物をしていたら、女子の一人が『ここで解散して、また集まるう』と言ったので、福元は誰と行こうかなあっと思っていたら、肩をトントンと叩かれた。

振り返ると一人の女子が恥ずかしそうに立っていた。

「一緒に行こお（女子）」

福元は別にいいかと思っただけ、一緒に行った。

京都でしか置いてないゲーム機があるゲームセンターに行ったり、京都限定のお菓子を食べたりしていた。そして、2人で哲学の道を通っていたら、その女子がボソッとこう呟いた。

「なんか、デートみたいだね…」（女子）

「お、おう（福元）」

すると、その女子は福元の前に立って、真剣な眼差しで福元を見た。

「ど、どうしたの？（福元）」

「わ、私…ペリーの事が…好きでした！！（女子）」

ペリーとは福元の中学校時代のあだ名。あだ名の由来は、歴史のテストの時、アメリカの初代大統領は誰という問題に対して、福元はペリーと書いた事から来ているそう。ペリーは黒船だろ…。

「…ごめん。まだ女子と付き合うつてというのがどうゆう事かよく分からなくつて…（福元）」

「じゃあ、待つてる。付き合うつて本当の意味が分かるまで私は待つてる（女子）」

それ以来、なんのおとがめも無いそう。

「何やってるんだよ！！ペリー！！」

屋良がキレながら福元の胸ぐらを掴んだ。

「だって、俺、その後、転校しちやってたんだよ」

それを聞くと、屋良は舌打ちをして福元の胸ぐらを離した。

「転校する前になんか言えばよかったじゃん」

俺が言つと、福元は笑顔になった。

「忘れた」

福元のあまりのバカっぷりに俺も苛立ちを覚えてしまう。

「何忘れてるんだよペリー！！」

俺と屋良は福元の胸ぐらを掴んだ。

「リンチだからやめろよ」

大沢は冷静に俺たちに突っ込んだ。てかそんな大沢くんもこのまえ野良犬蹴つてたけどな（大沢くんは野良犬に左腕を噛まれてました。）。

「んでさ、その人の名前つて覚えてるん？」

大塚が聞くと、福元はまたピョんピョんと飛び始めた。大沢が息を吐きながら指の骨をボキボキ鳴らしている。怒ってるんだろ？な
ピョんピョんピョんピョんピョん…ピョんピョんピョんピョんピ

ヨン…。ああ、ギターで叩きたい。

俺がギターを掴んだ時、福元がこけたから本気でビビった。

「思い出した！！」

「名前をキューー！！」

「太田恵美！！あだ名はおおめぐ！！」

「ぬぁぁぁー！！」

大塚が何かを思い出したのか叫んだ。

「何だよ！！ゲロパゴス」

なぜか屋良は大塚の事をゲロパゴスと呼んでいる。なんかいいよ
うな、悪いような、よく分からない感じ。

「そいつ、俺の姉ちゃんの先輩」

俺らはしばらくの間、沈黙している。そして、大塚の姉ちゃんが
早稲田の中学校に行っていた事に気づいた。

「じゃあ福元って早稲田中学が母校なのかよ！？」

「おう」

普通に返事するのが尚更ムカつく。ほんととほざけー頭いいじゃん。

第二十二話：ゲロパゴスの叫び（後書き）

ゲロパゴスこと大塚の姉ちゃんが福元の彼女になるかもしれない奴の事を知っているかもしれない。ならば行こうじゃないか！！ピリオドの向こうまででも！！でも、福元が早稲田なんてな…。

第二十三話：大塚邸で福元は見た

福元ってほんとにはすげー頭がいいんだね…。ははは、すごい腹が立つてしょうがないや。

ライブハウスを飛び出して大塚邸へと向かう俺一行。てか大塚って兄弟に本気で似てないよな。

大沢がとかげのしっぽを踏んだ事を誰も知らず、千切れてのたうち回ってるとかげのしっぽを見て、新種のミミズとかアングルモアの使者とかなんか騒いでいた。大沢が隠れて泣いてたし…。

そんなこんなで着いた大塚邸。ちびまる子ちゃんの花輪くん邸には劣るがなかなかでかい。

「でっけー」

福元が大塚邸を見上げながら叫ぶ。

大塚と書いてある表札の下に『大沢義塾』という表札がある。その近くに個別指導はお任せください。と書いてあるポスターが貼つてある。選挙の時に貼つてあるポスターみたいなデザインだ。

大塚がインターホンを押すと、ピンポンと家中に鳴り響く。なぜかエコーもかかっている。

「はい、私、大塚様の遣いの者ですけど」

普通に家政婦って見えよ。

「ああ、俺だけだ」

大塚が俺たちには見せないような低いテンションで家政婦に応じる。それにちよつと気になる俺たち。

「坊ちゃんですか、分かりました。今お開けいたします。」

「あとさ、友達が来てるけどいい？」

「喜んで。それじゃあお開け致します」

するとブーンと音が鳴りながら門が開く。なんか、すげー。

でも、古いのかなんかギギギって門が鳴く。そこがまたいいのが大塚邸。

「どうぞ」

大塚がそう言ったので、俺たちは門をくぐった。

噴水が休む間もなく水を噴き続けている。おまけにライオンと裸の男と考える男の彫刻が、大塚邸を飾る。

「考える男なんてライブハウス行った時は無かったぜ」

大塚が出かけてる間に考える男を購入してる（予約してたかもしれない）なんて、やはり大塚邸は大金持ちなんだね！！ふふふ。

「すげーな」

俺たちが大塚邸のインテリアをじっくりと眺めている。

「てか姉ちゃんの部屋に行くんだろ」

大塚が俺たちを見下しながら言う。大塚邸の豪華すぎるインテリアのおかげでこの豪邸に来た重大な目的を忘れてしまった。

「じゃあ姉ちゃんの部屋に行くぞ！！」

福元が叫んで長ーい廊下を走った。この廊下で運動会ができるな。

「おーい、ここの廊下、部屋が30部屋あるぞ」

「冷静に言つなよ！！！！」

なんと見事な大塚の冷静ぶりに俺たちも苛立ちを覚えてしまう。

その頃、福元は悩んでいた。どの部屋に行けばいいんだろうと。

長ーい廊下にずらーと並ぶ扉。第一、この廊下に姉ちゃんの部屋があるのかすら分らない。

福元は第一の扉のノブに手をかけた。ノブすら豪華だ。なんかライオンが口を開けている。ライオンが好きだな。この豪邸。

扉を開けてみると、そこには、数え切れない本が棚に整理されている。一番でかい本棚は10メートルだ。

「メルヘンの図書館かよ！！」

さまあーずの三村ぶりに突っ込んだ。

次のドアを開けるとなぜか部屋の中に白のベンツが駐車されていた。

「ベンツを部屋に置くなよ」

こちらも華麗に突っ込む。

他にも銀行の金庫みたいな金庫があったり、普通より三倍広いダ
ーツバーがあった。

「なんだよ、この家」

福元は涙目でこう呟きながら長い廊下を走っていた。
そして…。

「ついに着いたぞ…。てかここか」

福元は自分の身長の二倍はある大きな扉を見上げた。

その扉にはピンク色の札に『の・ぞ・み』と書いてあって、その
札が釘で打ちつけてある。普通画鋏だろ。

ばかデカい天井にでかいスピーカーがあった。音楽鑑賞かな。
部屋の前で。

福元はそう思いながらドアをコンコンとノックをした。

「合い言葉をどうぞ!!」

急にどこからか声がしてきたので福元はビクツとした。

「合い言葉をどうぞ!!」

どこだ。どこにいるんだ?

「合い言葉をどうぞ!! 合い言葉をどうぞ!!」

福元はハツとしてスピーカーを見た。犯人はこいつだ。

「合い言葉をどうぞ!!」

スピーカーから喋るロボットのような声が聞こえてくる。すげー
な真のお金持ちって…。

「合い言葉を言えっていつてるのが分からんのかボケ!!」

なんか言葉使いが荒くなってきたから怖くなってきたので、とり
あえず何でもいいから合い言葉を言わなきゃと思った福元は、思い
ついた言葉を言った。

「開けゴマ」

「チャリーンチャリーン、チャチャ!」

さっきと同じ声でスピーカーから何か下手なボイパが聞こえてく
る。資金の節約かな?

「ざんね〜ん。キャハ。惜しいねえ。キャハ。もうこの部屋には入れないよう。キャハ」

メツチャクチャイラつく事をどんどん言ってくるからさすがに福元君も怒ってきた。すると。

「スーパー仁くん、没収!!」

と、スピーカーから聞こえてきた。その後、デカイ扉の隣の壁が忍者屋敷のような回転扉のようになって、中から『ひとし』と書いた全身タイツを着てる人が出てきた。

「こんにちは、スーパー仁くんです」

全身タイツの人はそう言った。すると、さっきの回転扉から『没収マン』と書いてある全身黒タイツの人がスーパー仁くんを羽交い締めをしたままだここに連れ去った。その間、スーパー仁くんは『助けて…。助けて…。』と言っていた。

「はい没収う…キャハ」

スピーカーの方は喜んでるのかテンションが高くなっている。

なんなんだ。この家。

福元がとんでもない機能に呆れながらも、また外れたらスーパー仁くんが現れるんだ。と思いながら立っていると、大塚の声がした。

「福元さん!!」

「おお、救いの女神さま」

福元はそう言って大塚の足を掴んだ。

「いや、俺男なんだけど…」

大塚は困り果てながらも、大塚の姉の部屋の合い言葉を言った。

「あの時の君との思い出が、僕の一番の思い出だったならば、今の君の一番の思い出が僕と過ごした思い出ならいいなと僕はそう思いながらまだ飲んだ事がないブラックコーヒーを飲み干した。開けゴマ」

「正解!!」

大きな扉がギギギと音を立てて開いた。

惜しい!! 確かに惜しい!! てか分かるかよ。こんなの。最後し

か分かってねえじゃん。

大塚の記憶力に感謝しながらも俺たちは大塚の姉、大塚希美の部屋へと入った。

「いらつしゃーい、みんな！！進む、よく覚えてたねえ」

まるで選隊ヒーローの最後の敵の『よくここまで来たな！！』みたいな誉めを大塚に言った。

こ、この女。架空請求サイトを掛け持ちで運営してやがる！！これ、訴えれば勝てるよね。橋本弁護士！！

「まあいろいろあったけど本題に入ります」

福元が綺麗にまとめて本題に突入した。なかなかやるね、兄さん。

「太田恵美って人知ってますかね」

「はい、知ってますよ」

的中しました。福元は心の中でホッとした。そりゃそうだ。メルアドを知ったその日に架空請求サイトに登録する女だからね。

「おおめぐ先輩でしょ。すごく仲良しですよ私。プリも撮りますよ」
屋良の心の中でみたいという欲望が騒いでたが、そのうち、おとなしくなっていくた。

「今のその人の住所知ってるかな？」

「はい、ちよつと待つてください」

すると、ケータイを操作し始めた。てかケータイにもダイヤが貼ってあるよ。すげえな。

「ほら、太田恵美」

大塚の姉は太田恵美のメモリーを俺たちに見せた。なんと、住所や誕生日まできっちり記録してある。誕生日に何かもらえるのか。てかメルアドも書いてあるからあの人も登録させられたのかな。架空請求サイトに。

「住所は板橋区のマンション。その近くにあるライブハウスでライブした事ある！！」

「そうか！！じゃあこの近くにあるマンションを当たれば、太田恵美が見つかるって訳か」

すると、福元がとんでもない作戦を思いついた。だが言わなかった。それはね、後のお楽しみって奴ですよ。

「とりあえず、行きますか。板橋区」

大塚がボタンをピツと押すと、大塚の姉の部屋の窓から大塚家の自家用ヘリが顔を出している。

「乗りなよ。みんな」

大塚が白い歯を輝かせながら親指を立てた。真のお金持ちってすごいな。

とりあえず高いところが苦手な俺は、アイマスクを着用して自家用ヘリに乗った。でもね、板橋区って隣の区なんだよね。だからわざわざヘリ出さなくてもいいわけ。電車でいいのにね。これを日本語で資源の無駄遣いというのだろう。地球に悪い家族だ。

第二十三話：大塚邸で福元は見た（後書き）

ついに福元が太田恵美、通称おおめぐに会いに行きます。この小説はギター小説だけどちよつと恋愛があります。まあそれも青春ですよねえ。

第二十四話：ペリーらしいバンド

隣の区までわざわざ自家用ヘリで来た俺たちは、ヘリに別れを告げ板橋区にあるライブハウスへと向かった。

俺たちがやってきたのはライブハウス『ゴイステさんいらっしやい』。この店長、ゴイステが心から好きなのだと思う。

話にそれます。

読者に分かるかどうか知らないが、ゴイステとは略称で、実際はGOING ゴイングステディ STEADYと言う。

1999年にファーストアルバム、ファーストシングルを発売してから徐々に人気度が高くなっていき、2003年には、シングル『青春時代』が初登場04位を記録。

『青春時代』発売後、解散するが、解散以降でも人気度が変わっていない。現在はボーカルの峯田、ベースの安孫子、ドラムの村井、そして、浅井に変わってギターがチンに変わり銀杏BOYZが結成。2005年の2タイトルのアルバムが初登場04位と05位を記録。ここまで詳しいのも俺がゴイステの大ファンであるからだろ。『銀河鉄道の夜』は鳥肌もんだつたな。なんで解散したんだろ。

とりあえず俺たちはライブハウス『ゴイステさんいらっしやい』に入った。

「いらっしやい!!」

店長が軽快にあいさつをする。すごい。なんだこのライブハウス。ゴイステしかないじゃんか。ゴイステのポスターやサインは当たり前。今は入手不可能なデモテープや浅井のサインまである。すげーな。

「もしや、福元くんかい。懐かしいなあ。大きくなったなあ…」

店長がまるで親戚のおじさんのように福元と会話する。会話の中には『ゴイステ』という言葉と、『レインバーク』って言葉が聞こえてくる。ゴイステは分かるけどレインバークって何だ？

「よし、マンションが分かったから行こうか」

どうやら店長にマンションの場所も聞いたらしい。とりあえずライプハウスを後にして俺たちはそのマンションへと向かった。出ていく時に店長が『がんばれよ』と言ってた。

「でっけー」

俺たちがそう豪語する。

当たり前だ。まるで総合病院のようなでかさのマンション。見るからに家賃が高そうだ。

マンションの入り口はもちろん自動ドア。田舎のコンビニだって手動なのに…。

そこには指紋センサー付きのポストが部屋別にあって、ピカピカに輝いている。その近くには0～9の数字ボタンがある機械がある。これは、わざわざ部屋の前まで行かなくても部屋番号を押せばここで話す事が出来たり留守を確認出来るという画期的な機械だ。

「えっと…部屋番号は…」

ピッピッとボタンを押す。その指を見ると傷だらけだった。この傷は、一体何なんだろう。

『ただいま、留守中です』

留守を伝える機械。留守なんで俺たちはライブがあつたら見ようなんて話になってマンションを後にした。

マンションを出た時、歩く美女センサー、屋良の目が点になった。何故ならば目の前にはスーパーで買い物してきたのかスーパーの袋を持った美女が歩いてこっちへ向かっているのだ。

「ヤバイよ。美女キラー屋良がやる気を見せてるよ」

大沢が言うように屋良が自分のメルアドをブツブツ言っている。早速メルアドを手に入れようとしてるのか！こいつ。

すると、美女が俺らの方を見てきた。俺らは察した。俺らの誰かに一目惚れをしている。全員がいや、たぶん俺だろうと思っていた時、その美女が口を開いた。

「福元君、ペリーだよな」

福元のあだ名、ペリーを知っている。それじゃ、もしかしたらこいつが…。

「おおめぐ？」

福元が聞くと、おおめぐらしき人が笑顔になった。

「そつだよ。久し振りだね」

え、え、えー！ー！！

超美人じゃん。やるなペリー。

昼の公園のベンチで福元とおおめぐさんは中学時代の思い出話で盛り上がっている。

そのころの俺らはどうと、公園のベンチの茂みの中で二人の思い出話をちゃっかり聞いています。俺の隣には泣いている振りをしながら俺に何か疑問をぶつけています。ウザいです。その疑問とは…

「稲垣い。なぜ、なぜおおめぐさんは福元の事をー！ー！……」

知らんわ。それならおおめぐさんに聞けよ。そんなお茶目な屋良君と付き合う気がある人いないのかな。

「んでよ、そいつが外人の警官の前でハローとか言ってるんよ」

「キャハハ。それ知ってるよ。その後、ヘイ、カモンとか言われて泣きながら謝ったんでしょ？」

どうやらあるクラスメイトが修学旅行の班別行動で、班の一人が外人の警官を見つけてハローと言ったそうだ。

「楽しかったな。修学旅行」

福元が空を見上げながら言った。

「うん、あれが一番の思い出だったよね」

二人がしんみりムードになっている時、俺らはすげー慌てていた。何故ならば、修学旅行でおおめぐさんが福元に告白してその返事を言わずじまいだって事を忘れていたのだ。

さあどうする。スカイ・オブ・ソングー！ボーカルの生まれて初めての男女交際、成功となるか！？

…ここで話が終わると思った人、はいベタ！！

おおめぐさんはこの時気付いたのです。自分が中学時代で一番勇気を出した事件を。

「ペリー、覚えてる？班別行動で二人になった時の事」

ついに来た。さあ、福元はどう答えるのか！！

…ピョンピョン跳ねました。ペリー。ピョンピョンね福元が何かを思い出す時に跳ねます。何やってるんだよ。俺らも引いたんだからおおめぐさんも引くだろ…。作戦失敗。

「懐かしいい！！ペリー中学時代もやってたよねえ。テストの時に跳ねたのはマジ笑えたし」

意外な展開となった。俺らが引く行動で思い出を引き出しました。やろうかな。ピョンピョン。

「思い出したあ！！！！」

「うるせえよ！！っていつもつつこんでたなあ」

おおめぐさんすげー明るいい人なんだな…。すげー福元と似合うじやん。

「あの返事ね、明日ライブするから、うん、その時に言うよ。うん」
ええええええ！！ライブ！？聞いてねえよ！？もしかしたら、ライブするためにライブハウスに寄ったのか。わざわざ。

「バンド組んでるのペリー？」

「ああ、スカイ・オブ・ソングってバンドでね」

「空の歌、か。ペリーらしいバンドだね」

おおめぐさんは空を見上げた。

ならば、福元の恋愛のため、俺らの知名度アップのため、ペリーらしいバンドを見せてやろうじゃないか！！空の歌を歌おうじゃないか！！てかまだ一曲しか出来てないし、てかラブソングだし。

第二十四話：ペリーらしいバンド（後書き）

次回、ソング・オブ・スカイ初めてのライブです。その目的は恋愛成就。福元の恋愛のためならどんな曲も弾くぜ。んで初ライブの客は…。一人かよ！！

第二十五話：一人だけのライブ？

初ライブの日、俺らはなぜか大塚邸に泊まった。それにしても大塚邸はすごいな。泊まりに来た時大塚の部屋の天井からウィーンって屋根付きベットが出てきたからね。

それにしてもライブをやるってどんな気分なんだろう。

俺が前ライブを見た時は凄かった。

ボーカルも、ギターも、ベースも、ドラムも暴れに暴れまくってた。ライブをやったのは冬の夜中だったけどみんな半袖。なのにみんな唇をブルブル震えてないでみんな汗をかいていた。おまけに暴れたのはバンドのメンバーだけじゃない。観客も暴れてた。ていうかみんなバンドのロックに共存^{ユニゾン}していた。俺もユニゾンしたかったがそんな余裕もなかった。

そんなライブを参加したからにはこっちも暴れなきゃ意味ないし、客も埋まるくらい来なきゃ意味がねえ。

『ゴイステさんいらっしやい』の店長はチラシは配ってやるよと言っていたから客は来るだろうな。

そんなこんなで俺らは生まれて初めての屋根付きベットで眠りについた。

朝になった。

「ん……。なんてライブの日の朝はこんなにすがすがしいだろう」
屋良が大塚の部屋で叫ぶ。そんなの知るか。

「お前ライブの経験あるんかよ」

大沢がすかさず突っ込む。

そんななか福元はというと、屋根が邪魔だといって屋根を壊したから福元のベットの周りはずいぶん事になっている。

「のふあわあ！！俺んちの屋根付きベットを……高いんだぞ！！」

大塚が泣きそうになりながら叫ぶ。なんてみじめなんだろう。

「うつせえよ！！こんな物買う金あるならドラムを買うかプレハブ

建てるよこの野郎!!」

「ドラムはもうあるよ!! プレハブはないけどねえ!!」

子供以下の喧嘩を見下しているともうライブ開始まであと二時間となった。

「ガキ以下の喧嘩はもう辞めろ!! 三十分前にはリハーサルがやるんだぞ!!」

「レスポール!？」

レスポールとは俺らの間では『マジですか?!』って時に使う。何故なのかは未だ不明。

とにかくリハーサルに間に合わないのはバンドマンとしては凄く失礼な事なんでライブハウスへと急いだ。

「そつえば他のバンドは何が出るん？」

板橋区へと向かう電車の中で俺は福元に聞いた。

「よくわからないけど俺たちよりも有名なバンドが出るのは間違いないよ」

そりゃそうだよな。

やっとライブハウスについた。

その後、俺たちはライブハウスの店長からとんでもない事を言われてしまうのだった。

「えっ!! 他のバンドはやらない!？」

「今日はやたらにライブハウスの練習の予約が多くてね。ライブをしてもそんなに時間が取れないからね。ごめんね」

ライブハウスの店長は福元の肩を2・3回ポンポンと叩いてどこかへと消えた。

そんな客来ねえに決まってるだろ!!

「まあしょうがねえとりあえず『恋物語』の歌詞を変えるか」

福元は俺たちの前で独り言を言ってライブハウスにあるテーブルに向かって何かを書き始めた。俺らはそんな福元をじっと見つめる。「お前らもやるんだよ」

キヤハ。独り言じゃないのね。

そして生まれて初めてのの（ライブも初めてだけど）ライブハウス
独占ライブを始めた。

客は…おおめぐさん一人です。なんか椅子持参して座ってます。

「一人だけかよ…」

なんか悲しくなる俺ら。おおめぐさんはもう手拍子してます早い
すよ。

すると福元はすぐ息を吸った。これは俺ら流曲の始め方。さあ。

ライブのはじまりだ。

曲は勿論ラブソング『恋物語』。

最初は静かだった音楽がいきなり激しくなったがラブソングだとい
う事も踏まえてちよつとギターは静かだ。

最初は手拍子してたおおめぐさんは急に手拍子を辞めておとなし
くなった。たぶん福元との思い出を振り返ってるんだろう。

「どう思う？このバンド」

おおめぐさんの他に影に隠れて聞いていたガールズバンドのメン
バーの一人がソング・オブ・スカイを見てメンバーに聞く。

「はつきり言って微妙じゃない？客一人だし」

メンバーの一人が福元たちをコケにして言う。

「でも…泣いてるよ。あの人」

ライブを真剣に見てるメンバーの一人がおおめぐさんをみてそう
言った。

「うそ…」

見ての通りおおめぐさんはボロボロ涙を流していた。

福元はそんなおおめぐさんをチラチラ見ながら歌っている。泣い
てる事に気付いているんだろう。

最後は大塚が静かにハミングをして終わらせた。

おおめぐさんは盛大な拍手をしたが、ガールズバンドは拍手をし
ない。気付かれたくないんだろう。

「ありがとうございます。どうもソング・オブ・スカイのボーカル

の福元です。いや恥ずかしい事にね、まだこの曲しか出来てないんですよ。すいませんね。まったく」

福元は頭をかきながら頭を下げる。

「ねえ…。教えて」

ふと小さな声でおおめぐさんが言った。

「えっ？」

「告白の返事、教えて」

まだ好きだったのかい。

福元はしばらく無口だったがその内笑顔になった。

「Why Not？」

これは英語で『もちろんだよ』って意味です。

その意味を知ったのかおおめぐさんはやったあと叫んで椅子を蹴った。激しいんですね。

俺たちも拍手で祝う。すると、奥の方から小さな拍手が…。俺たちがよく見ると、ガールズバンドの一人が拍手をしていた。

「あっ、一人じゃなかった」

俺は呟いた。

第二十五話：一人だけのライブ？（後書き）

今回発表した『恋物語』の歌詞を載せます。

『恋物語』

作詞：福元健吾

作曲：福元健吾

寂しく過ごしてた日曜日の午後に
僕は部屋の中君の事思ってた
広いと思ってた僕の愛用のベッド
君が入ればちょうどいいサイズさ
消えそうなくらい幸せだった
地球温暖化ぐらい顔が燃えちゃった

僕の想いと君の想いが重なれば
とてもとても幸せでした
知らない時の君の生活が気になった
僕の手がちよっと冷たくて

（サビ）

ポケットの中の初恋の思い出
赤くなつた白い息がモヤモヤと
恋人たちがだんだんと
雪が溶けそうなくらい熱くなつた
君の笑顔が消えちゃった
僕の笑顔がずっと見れなかった
サライの空に桜の花が
僕の右手に君の左手がHummer

桜が枯れた　そして凍った
僕の右手に冬の氷風がHummer

（サビ繰り返し）

未来に向かった君と僕の物語
君と僕の物語Hummer

次回新編突入！！

第二十六話：再会

数日前に俺たちが初ライブをしたライブハウス『ゴイステさんいらっしゃい』。

そこにいつも練習に来てるガールズバンドがいた。

その名もORANGE PUNCH。四人組のガールズバンドだ。その中のボーカル、池永凜は最近やる気を見せているのは訳があった。

絶対あの人たちに会いたい。会って話したい。そうするには頑張って有名にならなきゃ。

池永は本気で唄ってた。ガールズバンドの仲間達はそんな池永を見下していた。

「ねえ凜、ちよつと話があるんだけど…」

演奏が終わった所でガールズバンドのギターが凜に話かけた。

「いいよ、何？」

池永は少しでもみんなに役立つように振る舞う。

「そろそろさ」

「うん」

「解散しない？」

「えっ」

池永はメンバーの意外な言葉に驚いた。

「なんで！？みんな頑張ってたじゃん」

池永は反抗した。

「やっぱりガールズバンドなんて無理なんだよ」

ドラムがやりきれない感じで池永に訴える。

「そんな…」

池永はあまりに自分勝手な自分に腹が立ってそのまましゃがんだ。みんなはこんなに我慢してたんだって事に気が付かなかったからだ。「いいよ…。したければして」

「…分かった。…今までありがとう。じゃあね」

三人はライブハウスからゆっくり出ていった。

残された池永はしゃがんだまま涙を流して床に顔を伏せた。

池永のケータイには『バンド大会参加を受け付けました』というメールが送られてきた。

「どうしよう、私、メンバーに捨てられちゃった。こんな時あなたはどするんだろうね。ソング・オブ・スカイさん」

ライブハウスで池永の泣き声が響き続けた。

一方、『長橋ライブハウス』にはいつものように俺たち、ソング・一方、『長橋ライブハウス』にはいつものように俺たち、ソング・オブ・スカイの練習をしていた。

「屋良はなんで端っこで体育座りしてるんだ？」

大沢がさっきまで屋良と一緒にゲーセンにいた俺に聞く。

「俺たちがギタドラしてたらそこに女子高生が群がって大塚だけ逆ナンされたんだ」

「そんなんでへこむなよ」

まったくその通りだ。

「ただいまあ！！」

大塚がニヤニヤしながら帰ってきた。

「いやあ、ふふふ、今日だけで三十人もアド帳が増えたぜい」

バンドのメンバーから白い目の集中攻撃を受ける大塚。そして涙ぐむ。

「いいじゃんかああ…。俺だって欲しいのいっぱいアドレス欲しいの！！」

へえ…。

とゆうわけで涙ぐんでいる大塚を福元がめんどくさそうになだめて俺たちはお世話になったからライブハウス『ゴイステさんいらっしやい』の店長に顔を出しに行った。

「それにしても先日のライブハウスにいた女の子たちみんな可愛かったなあ。今度会ったらアドGETだぜ！！」

屋良がはははと笑いながら言った。

そんな見事に会えねえよ。世界は見事に広いんだぜ。

福元がカラカラって音が鳴る扉を開ける。

「こんにちはあ」

福元が言ったとたん。屋良の目がキラリと光った。

俺がその視線を追ってみると涙ぐみながら店長に話をしてるガールズバンドのボーカルを見事に発見。世界、てか板橋区は狭いんだね。

女になると黄金の脚へと進化する男、屋良が一瞬でボーカルに近づく。

「なんで泣いてるの？俺でよかったら何でも聞くよ。だからメルアド教えて」

屋良がケータイを取り出す。泣いてるのにケータイはないでしよう。

「…もしかしたらベースの屋良さん？」

「え、ええ」

すると笑顔で池永が立ち上がった。

「ボーカルの福元さんに、ドラムの大塚さん、ギターの稲垣さんに、キーボードの大沢さん」

次々と指を指して俺らの名前と役割を見事に当てる。この女、もしかして……。

「ソング・オブ・スカイ！私、超ファンなんです」

超嬉しそうな表情で俺たちを見る。なんかこいつカワイイぞ。

「キターーー（・・）ーーーー！！！！」

屋良が大声で叫び、ポケットからさつとメモを出してレジの台に置く。

「ここにメルアドアード名前を」

「いいよ」

池永はスィスイとメモに書き込む。

「名前は池永凜。カワイイ名前え」

屋良がデレデレしながら誉めた。

「ありがと」

池永はめちやくちや可愛い笑顔で屋良を見つめる。その笑顔に屋良はノックダウンした。

「あちゃー。屋良兄さん池永にメロメロだつてぜござるよ」

大沢が訳分らない口癖でみんなに伝える。お前何人だよ。

「そうだったぜんですね。なんか頭っばい所で湯気がでちゃったらいいてっちゃってね」

大沢の訳分らない口癖に負けないように訳分らない口癖で大塚が応える。幼稚園から国語を勉強しなおせ。

「そつえばさあ、なんで池永くんは俺たちに会いたかつたんだい」
福元が腕を組みながら池永に問う。

「そんなあああん、俺らのふあんだからに決まってるだろうがあ！
！！！！」

屋良が目を充血させながら福元を怒鳴る。うざいと判断した俺たちは、地獄のキックパーティーこと大塚にケツキックをさせた。屋良は『ぬはあっ！！』と呻きながら倒れた。

屋良を道路のベッドで寝させて、俺たちはライブハウスへと入った。

「そうなのかあ。んでバンド大会に出られないからどうしようという事ね」

福元が言つと、池永はコクリと頷いた。

「別にキャンセル料とかも掛からないから事情があつて出られなくなつたつて言えばよくね？」

俺がそう言つたら池永の目からジワジワと涙が溢れてきたから俺は焦つて『冗談だよ』と何回も言った。生まれて初めてだ。俺が女を泣かすなんて。

「女を泣かすなんて駄目だよ。稲垣くん」

屋良が何故か傷だらけになってライブハウスに戻ってきた。

「なんで傷だらけなんだよ」

「いや気付いたらさ……」

絶対ランチに会ったしかないだろ。

「私は私なりのバンドの鼓動を他の人たちに気付いて欲しくてバンド大会に参加したのにこうなるなんて……」

そういつてまた池永が泣く。女ってほんとに涙もろいなっ!!!(死ね) ついでに福元がもらい泣きする。目指せ一青窈。みんなほんとに涙もろいなっ!!!(死ね)

「バンドの鼓動ね……」

福元が腕組みをして何かを考える。

「ひらめ!!」

福元が突然そう叫んだからビビっている。ひらめが何だよ。

「ひらめいたんだよ。耳を貸しな」

と言つて俺たちを集める。

なんか大半がごによごによしか言つてなかったから何を話していたか全然分からなかったが、みんなのリアクションでだいたいの流れを掴んだ。つて他のみんなは話が分かったのかよ。

「とゆうわけだ。池永凜。お前のバンドの鼓動を、俺たちに貸してくれ」

池永は嬉しそうに頷いた。

バンド大会まであと12日。

第二十六話：再会（後書き）

福元の考えた作戦とは…。

そのヒントを紹介しましょうじゃないか。

- ・ガールズバンド限定の大会
- ・バンドの鼓動を貸す？

のみだ。みんなで考えてくれ。俺ら、人間を捨てます。

第二十七話：鼓動を感じる時

12日が早くも過ぎ、いよいよガールズバンド限定のバンド大会が始まった。

バンド大会の前に解散したORANGE PUNCHはどうなるのか…。

バンド大会会場。たくさんのバンド大好きな人が集まっている。なんかオタクっぽい人や追跡者みたいな人もいるがほつとこう。

雲がバンド嫌いなのか空から去っていき、太陽が眩しくバンド大会会場を照らす。

その舞台裏入り口に俺らと池永がいる。

屋良と大塚と俺だけが紙袋を持って立っている。その三人だけがシラケた面をしている。

「なあ、本当にこんな事していいのか？ガールズバンド限定なんだぞ」

俺が福元に訴える。何故ならば、俺らは人間を捨ててしまうからだ。誰だって人間は捨てたくないはずだろう。

「かまわん。さっさと公園のトイレに行ってこい」

「…はい」

三人はトボトボと公園へと向かう。

「可哀想だな。あいつら」

大沢が見下すように同情する。その目は俊足のチーターから逃げきったシマウマみたいだ。

「そうかな」

「えっ？」

「見る。屋良なんかすごい興奮してるからヤバい顔になってるぞ」
確かに今の屋良の顔は吐き気がする程気持ち悪い顔だ。

「なんで屋良はあんなに嬉しそうな顔なんだ？てかそれを超えて気持ち悪い顔になってるし…」

大塚が不快な顔をして俺に聞く。なんか大塚の顔が青くなっている。

「簡単な事さ」

「なんだ？」

「好きな物になれるからだよ」

そう。屋良の好きなものは女。つまり俺たちは女装をするのだ。池永のバンドのメンバーに不足なギター、ベース、ドラムを俺らのメンバーで補う。つまりサポートって訳だ。それで男子禁制のバンド大会だから俺らは女装するって訳。これって犯罪だし、僕らはピュアな高校生だよ。

公園のトイレに着いた俺たちは迷わず男子トイレを利用する。だが男子トイレから女が出て来るって俺らは掃除のおばちゃんかって事で俺らは慎重に女子トイレに入った。

「すげー。みんな個室だ」

大塚が嬉しそうにはしゃぐ。そりやそうだろ。

「なんか、うん、俺らって総理大臣になったみたい」

なんでだよ。総理大臣はみんな女子トイレに入ってると思うのか？それだったら俺はその真実を書き留めて本を出すぞ。タイトルはもちろん『インガールズ』。

とにかく色々な事があって俺たちは女装グッズを出した。丈が足りないブツカットのジーンパンとかドモホルンリンクルとか色々出した。ドモホルンリンクルは必要なのか？

「てかさドモホルンリンクルの効果が出る前にバンド大会終わるよな」

大塚がすんなり言う。まったくだ。大塚君、成長したね。アド帳が一気に30人増えたからかな。

異様にサラサラなカツラを被り、口紅をうつすら付けて、効果はないけどドモホルンリンクルを付けて、ダボダボジーンパンからブツカットに履き替えた。

「ふう、完璧だな」

俺は空を見上げた。空、見たか？俺たち三人は、人間を捨てただぜ。もうちょっと祝ってもいいんじゃないか。

俺はこの時、この世にいる全ての男に土下座をしなくなった。なんか男としてめちゃくちや恥ずかしかったりする。

俺たちはバンド大会会場に向かった。土下座するのは後でもいいだろう。

福元と池永が笑顔でこう言った。

「似合ってるよ」

これが人間を捨てた英雄に捧げる一言なのかこの言葉の意味はもう人間を捨ててよしって事じゃないか。

「訴えてやる……」

大塚が涙ながらに呟いたので俺と屋良は焦って大塚を担いで控え室へと移動した。訴えてもどうにでもならんだろうと俺は思った。

このバンド大会は現在発売されている他のアーティストの楽曲しか発表出来ないだから俺らみたいなオリジナルの歌は反則で失格になるって訳。それを考えて俺たちが発表するのはWhiteberryの『桜並木道』。池永が大好きだという。別に『夏祭り』でもいいと俺が言ったら泣き出したので焦った。そんな練習の成果を今日発表する。

「さあいよいよ始まりましたよ！！ガールズバンド限定バンド大会。女だつてギター弾いてもいいじゃねえか！！男女共同参画社会基本法杯開催致します」

なんて法律的なタイトルなんだ。ある意味感動していますよ。今。ほら、法律的なタイトルだからみんな盛り上げてくれないから司会者も拗ねてます。

「今回参加したガールズバンドの人数は合わせて26組。たくさんのご参加、ありがとうございます！！」

みんながワーワーと盛り上げる。

「始まったな」

福元が舞台裏で言ったら、池永はゆつくり頷いた。

「お前ら、絶対コーラスなんか入れるんじゃないぞ。即失格になるからな」

「わかってるよ」

俺はギターのチェーニングをしながら福元に適当に応える。

「凜ちゅわ〜ん。俺たちは何番？」

屋良がデレデレしながら池永に質問をする。なんかあいつを思い出す。某少年誌のあのキックが強いコック。わかるかな。

「えつとねえ…、08番だよお」

池永が可愛く笑顔で応えるから屋良がまたダメージを負う。

「可愛い…可愛いすぎるぜ」

「そう？ありがとねえ」

また笑顔で対応するから屋良がダメージを負う。

「本番前に死ぬなよ。屋良」

大沢が注意すると、屋良が親指を立てながら倒れた。池永可愛すぎるんだよ。

「08番、ORANGE PUNCHでWhiteberryの『桜並木道』」

司会者が紹介した直後俺たちは会場に出てきてアンプに繋ぐ。

「見ろよ。ボーカルがちょー可愛いぜえ」

アキバが一斉に池永に萌える。でもこれでは審査にならないんだ。アンプへと繋いだギターは、自信満々なその音色をいつ鳴らそうかと待ちかまえながら度々ノイズを鳴らす。

大塚がシンバルを四回叩く。

音楽の鼓動、頂くぜ。

力いっぱいドラムを叩き、心臓に響くようにベースがうなり、ボーカルがこれかといわんばかりにマイクに思いをぶつけている。

そんな中、俺は気付きました。腕毛が生えているという事を…。

女子が普通腕毛なんて生やすのか？しかもガールズバンド限定大会の時に剃らないなんておかしいじゃないか。

「あの子、腕毛生やしてるぜ」
やべつ、ついにばれたか。

「そんな所も萌えるよな」

萌えるのか！？腕毛フェチでよかったぜ。

なかなかやるねーって顔で審査員が腕組みしながら見ている。

俺は審査員をチラ見しながらギターを弾く。

演奏がそろそろ終了に近づく。ガールズバンドっていいな。暴れないから疲れないや。このままガールズになっちゃおうかな。どう思うロックンゴッド。

演奏が終了した。

絶え間なくそして大きい拍手が鳴り響く。池永は会場 みんなに可愛い笑顔を見せた。屋良が倒れそうになったのに焦ったがなんとか発表は成功に終わった。

「ねえ俺らこのまま？」

俺がカツラに手を掛けながら池永に聞く。

「代表者だけいればいいからみんなは公園のトイレ行っていいよ」
俺らは足早に公園のトイレに向かった。

「ふう、助かったぜえ。ずっと女になってるなんてな、俺は生まれも育ちも男なんだよ」

変装用のキヤミをたたみながら屋良が言う。

なんか日本語が違いますね。てか女装前はすげー喜んでたじゃないか。ヨダレまで垂らしてさ。

とりあえず普通の服装に戻って俺たちは公園のトイレから出た。

女子トイレ…から…。

その後の悲劇を、俺たちはまったく予想してなかった。清掃のおばさん（ボランティアと見せかけて仕事）とバッチリ目が合っちゃったなんて…。

「キヤー！！」

おばさんは若作りな声で叫ぶ。

これって外来語でいうピンチですよ…。

第二十七話：鼓動を感じる時（後書き）

そんなに笑ってどうしたの？
そんなに泣いてどうしたの？
そんなに怒ってどうしたの？
そんなに疲れてどうしたの？
これが青春なんだよ。

第二十八話：トロフィー

おばさんの若作りな叫び声のおかげで、公園のトイレの周りに人だかりが出来た。

「どうしたんです？こんなに叫んで？」

筋肉質な若い男性がおばさんに聞く。

「この子たちが女子トイレから出てきて…私を…」

おばさんはハンカチを目の下に当てながら泣いている。

いや、おばさんに何もしてないですけど…。もし何かされたなら俺らの他に女子トイレに入ってた人が、浮遊霊のいたずらだと思えますよ。てかおばさんうそ泣きだし。

俺は思う。このおばさんはただ単に被害者になりたかったただけだ。いつもはハイテンションの二人も、ずっと下を向いて黙っている。ふつ、これが人生の修羅場なのだろう。パトラッシュと共に教会でもいって大胆な天使のそりに乗って夜空を駆けようぜ。パトラッシュ。

「なんだと!!」

筋肉質な兄さんは見事な二等辺三角形の形の目で俺達を見る。その目の奥からは少々の傷跡は残るけど覚悟してね(にっこり)って感じられる。俺らはそれに怯えてケータイのバイブのように震えてしまう。

一向に止めてくれないケータイの着信のようにならずと震える俺らは、もうこの噂がバンド大会会場に届くとは思わなかった。インターネットは恐ろしい。

「なんだと!!」

どっかで聞いたような言葉で審査員は驚く。それと共に池永のバンドの他のメンバーがいない事が解り、みるみるうちに噂がバレていく。

「すいません。もう反省しました」

筋肉質なお兄さんの目に完敗して俺達は反省のフリをしちゃう。

「反省したならそれでいい警察には黙るから家に帰れ」

「はい」

俺らは静かに頭を下げ、公園から去る。作戦成功しました。ボス。

「なんですか？」

命の危機から逃れて帰ってきた俺に待っていたのは、俺らの楽器を持った審査員だった。池永は今にも泣きそうな顔をしている。

「これは君達のだよな」

「はい」

「ここ、ガールズバンド限定の大会だって知ってるよね？」

「はい」

「じゃあなんで男の君達が楽器を持ってるのかな」
しっ…、しっまた。

「女子トイレ侵入事件と、ギターの腕毛で全てが解けたのさ」
やっぱり腕毛はバレてたのか。我、一生の不覚なり。

「じゃあ失格って事で」

審査員は書類にボールペンで何かを記入する。くそ。腕毛を生やした俺を殴りたい。

「ちよつと待てよ!!」

勇気ある言葉を叫んだのは特に関係ない大沢くん。こんなに登場したかったんだよね。

「あいつらは池永のために頑張ったんだぞ！人間を捨ててまで池永のために…」

「もういいよ！」

大沢の出番を途絶えたのは池永だった。池永は泣いていてその涙はまっすぐに流れて平行だ。

「もういいんです…。私とみんなの集大成…鼓動がみんなにわかってもらっただけでも嬉しいです」

池永はボロボロ涙を流している。１リットルは必要かな？売って

ないんかな。1リットルのペットボトルに入っている涙。

「すいませんが、失格です」

若い審査員が年下に敬語を使って失格を納得させる。福元より優しいぞ。

「はい…」

池永は返事と共に行くこと小さく言ったから帰りの準備が始まった。
「あと…」

年増のおじさん審査員が帰りの準備をしてる俺らを止めた。

「君たちの演奏は素晴らしかった。いや、君たちの鼓動は最高だった。君たちが女装してたと言ってショックだったよ。今度普通のバンド大会があるから是非参加してくださいね」

おじさんは笑顔で誉めてくれた。

泣くぞ…泣くぞ…池永…泣くぞ…きた…泣いた！！ほんとに涙もろいつすね。池永タン（キモい）。

「やったあ。みんなほんとにありがと（涙）」

嬉しかった。池永も、俺らもほんとに嬉しかった。この嬉しい思いが明日にも届けたら、幸せが生まれるのだろう。

俺はそう思いながらおじさんの励ましという見えないトロフィーを手にバンド大会会場を後にした。

翌日。

「ねえ師匠」

「やめろよお」

なぜかちよつと出番が欲しかったただけの大沢くん池永は惹かれ、師匠という呼び名で朝からくつついている。

「師匠お、師匠のバンドに入りたい」

「えっ、役割とかないし」

「ダメ…なの…」

出た！！可愛い子限定、女の目で池永は大沢をみつめる。ちよつとダメージを受けたようだ。

「す、スタッフならいいよ」

「やったあ、師匠大好き」

そう言って池永は大沢の腕を組む。

あっ、屋良さんはシヨックで寝込んでます。

第二十八話：トロフィー（後書き）

そのトロフィーを手に、もう一回思い出しちゃったなら、その思い出は一生頭という家に住むのだ。
次回新編に入ります。

第二十九話：青春オフコース不景気を駆け抜けて

日曜日なのに人っ子一人いないまるで薬局にあるぞうさんの乗り物みたいな公園のブランコで、一人のサラリーマンがゆっくりブランコを漕いでいる。錆びているのか動いたびにキーキー鳴り響いている。

私はなぜこんな所にいるんだ…？何故休日出勤ってウソついてこんなところにいるんだ。休日出勤なんて言わないで家にいればよかった。

サラリーマンは今でも思い出す。誰もいない会議室の中で部長に告げられたあの言葉。その直後、多くの金を渡され二度と会社に来れなくなった。

そう、彼はクビになったのだ。いわゆる仮二ト。彼は未だに仕事が無い。

サラリーマンは思う。自分がよければそれでいいのか？人は他人の人生まで作れないっていうのか。俺の道をゴミだらけにしたんだ。あの稲垣という社長は…。

「辞めさせたんですか。その人を」

俺のおかんがおとんのスーツをタンスに入れている。サザエさんでよくあるシーンだ。

「ああ。そろそろ私の会社も不景気だね…。あの人はクビにさせたくなかったな…」

ならクビにするなよ。でも不景気かあ。俺んちの会社もとうとうこんな時期が来たのか。俺はそんな事を階段で思いながら、二人の話を立ち聞きする。これちよー日課。

「不景気ねえ…俺んち塾の講師だからアブねえかも」

ライブハウスの中で俺がそんな話をしたら大塚が不景気に怯えた。
「おめえの父ちゃん塾長だろ」

屋良がツツコむ。

「むしろ塾潰しておめえ専属の塾の講師になれよ」

俺がふざけながら言う。

「てめえら俺の頭より家の家計だろ」

「じゃあ大塚がおとんの塾に行けばいいんだよ」

そんな俺たちの会話の中にちよつと聞こえる。微妙な何かを弾く音。それは無視して会話に移ろう。

「変わんねえよ」

「ははははは」

「いいから練習しろ！！くそ共が」

福元ちゃんが一人で寂しくチエーニング。その背中では福元の全ての人生を未来予想図にしたみたいだ。

きつと、クビになった人の背中も、福元みたいに寂しいのだろう。

「最近お父さんの背中、寂しそうじゃない？」

髪は金髪、家の中なのに程良くおしゃれをして見るからに女子高生って感じの娘が母親に父親の事について話す。

「うん、それは私にも感じる」

母親も父親の寂しそうな背中を感じ取っていたそうだ。これって
デイスティニー？

「お父さん、仕事で何かあったのかな？」

「さあ…、給料は変わらないのにね」

「でもさ、最近は給与明細なのに現金で渡してこない？」
そりゃクビになったからないだろう。

「さあ、そんな時代もあったんじゃないの」

どんな時代だよ。（笑）

「最近さ、けっこう長い間働いてた人でも平気でクビにするんだよ

ね。まさかお父さんも…」

「そんな訳ないでしょ」

母親はテレビをピツと付けた。

子供は、時により人生のパートナーよりも親をよく見るのだ。

家に帰ってみると、見慣れない靴があった。俺は親父がまた新しい靴でも買ったのかと思ったが、所々に土の痕跡があるから、客が来てるのだと感じた。

俺は廊下を歩いて二階に上がろうとした時に運がいいのか悪いのかリビングのドアに隙間があつて、そこから何回も土下座をしているサラリーマンの姿が見えた。

いい大人がだせえなあなんて思いながら、俺は二階へとあがつた。

愉快で楽しい学園生活。誰も入らない特別音楽室の中で美女キラ―屋良が俺たちに恋の相談を持ってきた。もちろんターゲットは美女。ターゲットは碓麻里。金髪で私服が超おしゃれで可愛い。狙っている人も多いため、彼氏がいるという噂もある。

「彼氏がいるという噂だぜ。平気なのか？」

「大丈夫さ」

屋良は立ち上がった。

「麻里ちゃんには彼氏はいない。俺のためにとつといているはずさ」
彼氏っていうVIP席を。

池永との恋、おおめぐさんとの恋に破れたため、屋良は可愛ければいいという面食いのいいモデルと変身を遂げた。屋良は改造人間面食いダーになった。

「とゆうわけで告白しゅる」

屋良はそのままゆっくりと特別音楽室から去った。

俺はそんな訳分からんようになった屋良の背中を見て思った。俺は青春を無駄遣いしないぞ。1日一回は充電しよう。と決めた。

充電し終わったのかスッキリした顔の屋良が戻ってきた。そのス

ツキリした顔はそのまんま笑顔って感じだった。

「どうしたんだ。こんな顔して」

俺がそう言って屋良の笑顔の真似をする。二人がめちゃくちや笑っていたから似てたんだろう。

「はははは！！超似てる」

「いや俺の笑顔のものまねの上手い下手じゃねえよ」

そう言っていると屋良はまた笑顔になって両手を挙げた。それに俺はびつくりする。

「俺の青春オフコース！！」

なんだよ俺の青春もちろんって。屋良は両手を挙げたままぐるぐる回ったからウザかった。

「ありがとう、俺の青春、ありがとう」

標語ですか。字余りがあるし小学生みたいな標語だな。それなら赤信号、みんなで渡れば、怖くないの方がうまいよ。

「俺、彼女ができましたっあ」

えー！！！！

出来ましたか、ついに、おめでとうですね。

「なんか俺の告白をした後いきなり泣き始めてマジ嬉しいって言うていいよって言った直後、俺の唇を奪いました」

具体的な報告、ありがとう。結果、碓麻里は大胆アンド面食いが好きだと分かりました。碓ファイト。

第二十九話：青春オフコース不景気を駆け抜けて（後書き）

美女キラー屋良に彼女が出来ましたね、おめでとですね。さて、次の話ですが、屋良の恋人とリストラおじさんの共通点を見てください。これが最大のヒントとなりますね。

第三十話：大切なもの

屋良さんは池永さんとの恋を見事に忘れ、碇との恋に燃えています。池永が大沢にくつついていると、無視してベースを弾く。なんか屋良って浮気をしなそうだな。

早速デートの約束をした屋良はお洒落に身を包み、両親に軽くお辞儀をした後パトラッシュと叫び走ったそうです…。なんで…？

ここで、皆さんお待ちかねの屋良的デートスタイルをご紹介します。しょう。

その1、デートの集合場所は目立つ場所に限る。（渋谷でいうとハチ公とか）集まる時間は一時から二時がジャスト（結構早く集まると昼飯代まで余計にかかるし、遅く集まると夕食までのコミュニケーションが少ないため）

その2、最初はゲーセンだ！！最初からプリを撮らないで、UFOキャッチャーで相手に何でも出来るぜ的なアピールをしよう（取った人形はもちプレゼントするから比較的可愛いのを選ぶべし）。プリは撮った後の落書きは相手にさせるべし（絶対ハートをたくさんつける）。チュープリはまだ早い（引かれる）。

その3、夕食はおごれ。

ファミレスがちょうどいい（普通のレストランに行くと、運が悪かったらおごるところじゃなくなる）。

ドリンクバーは絶対頼むからコップ等を相手の分も取る（てかドリンクも入れろ）。

炭酸はそんなに飲むな（引かれる）。『いいよ自分の分ぐらい払うよ』的な事を彼女が言ってきたら下手に断らないで『マジで、サンキュ』って感じで行こう（これこそ優しいっていうのだ）。『おごるよ』って言われたら『大丈夫、自分の分はあるから』的な自然な理由で断ろう（サンキュっていうと貧乏に見えるから）。

その4、映画もいいかも。ポップコーンを買っとけ。できるなら

夕食の前にいった方がよい。

その5、デート中はリードをして、手を繋がせる（なんか相手も嬉しくなる）。

そんなデートスタイルを頭に入れ、屋良はデートに挑む。

そんな中、俺らはと言うと…。

「狭えんだよ」 そんな中、俺らはと言うと…。

「広すぎだろ。このバス」

大塚プレゼン、屋良を追跡ふふツアーINジャパンをこの50人乗りのバスで過ごす。

「中入るの4人だろ（運転手付き）これじゃあ超目立つよ」

大沢が後ろの5人が座れる場所で、一人寝転びながら言った。十分気に入ってんじゃん、あんた。俺、ここ行きたかった。

「てか屋良のデートプラン分かるの？」

俺が聞くと、屋良が笑顔でポケットから何か出す。

「屋良の部屋から貰いました。屋良著作の恋人はサンタクロースデイトツアーだって」

うん、もうクリスマスは過ぎたし、大塚も屋良の部屋から貰ったって盗んだんだろ。

犯罪じゃん。

「ふふふ（？）とりあえずプランを覗こうじゃないの」

とりあえずプランを覗きました。

PM：13：00。待ち合わせ、出発。

PM：13：30。ゲーセンを楽しむ。

PM：15：00。遊園地で楽しむ。

「てか遊園地にもゲーセンはあるだろ？」

ごもつとも。

PM：18：00。夕食を食べる。

PM：19：00。バイバイ。

「まあ、いいんじゃないの」

俺たちはそれなりにいいと思い、結構いい評価とした。

さあ、あとはお前だけだ。美女キラー屋良、青春を楽しめ。俺はその青春を見て楽しむから（笑）。

な、なんてこんな遅いんだ。もう一時過ぎてるぞ…。

屋良はあまりに遅いから焦っているらしい。屋良はポケットから何かを出そうとする。そう、寝ずに考えた恋人はサンタクロースツアーのプランだ。

って、忘れたー！ー！わかんねえよ。とにかく覚えてるのは、遊園地とゲーセンに行くだけだよな。

屋良は本気で焦っているらしい。俺は大塚さん、そちもワルのおと思った。

「ごめんね。屋良くん。待った？」
か、可愛い。

屋良は驚いた。何故ならば結構時間を掛けて服を選んだのか、着こなし抜群ですごいオシャレだった。

俺らがいるバスの中でも可愛いって盛り上がっていた。

「大丈夫だよ。それよりすげえオシャレじゃん」

「そおだよ。これでもうち頑張ったんだぜ」

「やるなー、どこに売ってるの？こんな服？」

「フツーに店だろお（笑）」

「そおだよな。ははは」

いい加減行けよ。てめえらよ。バスの中は超暇なんだよ。

「うん。じゃあそろそろ行こ」

「うん」

そう言って、二人は自然に手を繋ぎながら歩いていった。それを確認した俺らは急いで近くにあるゲーセンを目指す。

ゆつくり二人のペースについていくと、交通量の多いこの街では渋滞になりかねないから早くゲーセンに行く事になる。

ゲーセンに着いたとしても最強に暇だから俺らはゲーセンに入ろっかななんてプランを考えている。

「てかよー、普通に歩いて着いてきた方がよくね？」

そう言っただ沢は持つてきたバックの中からメントスを出して封を開けた。好きなのかな？

「歩くと非常にバレやすいし、おばはんに通報されたら困るのはこっちだ」

さすが、大塚くん分かってるう。俺は大塚の肩を叩いた。この事は第27話を見てください。

「ふうん」

興味なさげに応えた大沢はバックからメントスを出して封を開けた。二本目ですよ。親分。

「うわはやっ」

大塚が言うとおり、いつの間にかバスの窓のスクリーンにゲーセンが映っている。屋良の数倍も早く着いたのだろう。あまりにも暇だ。なのでゲーセンの中で屋良を見守る事にした。

ゲーセンの中に入ると、自動のどこでもドアが開くと、一瞬にして雑音の世界へと瞬間移動してしまう。うるさい。もうちょっと小さく出来ないのか？だから現在の若者は大音量で音楽を聞くんた。俺もそうだけど俺んちは広いからね（死ね）。

大塚がゲーセン内を走り、辿り着いた場所はドラムのゲームだった。

またアド帳増やす気かよ？

「ふふふ、ついにこの時が来たぜ」

大塚はポケットからドラムのバチを出した。MYバチっすか？

「またまた女子高生のアドレスゲットだぜ！！」

大塚がウキウキ気分で百円玉を入れる。やる曲はもちろん『天体観測』。

大塚がMYバチを構える。

演奏が始まった。早速鮮やかなドラムスティックを披露する。すると瞬く間に女子高生が群がってきて大塚の事を『カッコいい』とかなんか言っている。ああ…アドゲットだな…。

一回のミスもなくステージクリアをしたら、群がってる人達が拍手をした。

おつ、女子高生が一気にケータイを取り出したぞ。アド聞くのか。

女子高生が一気に動き始めた。

「アド教えてください」

そう聞かれたのは俺と大沢だったあ！！大塚撃沈！！

「見た時からカッコイいなあなんて思ってたんです」

女子高生はまだいいよとも言っていないのにアド帳を開く。せつかちだなあ…もう。

「別にいいけど」

「やったあ」

一瞬にして俺と大沢の周りに女子高生が群がる。大塚はもう無視して違う曲やってます。大塚撃沈！！

女子高生のケータイに自分のアドを打ち込んでいるのに無我夢中で俺らは忘れていた。今日は、屋良のデートの保護監察してるんだって事を。俺がそのことに気づいた訳は、俺らが楽しそうにゲーセンライフを満喫している所を見た屋良と裕が視線に入ったからだ。開いた口がふさがらないとはまさにその事だ。

大塚が『大切なもの』をドラムのゲームで挑んでいた時に、俺らは『大切なこと』に気づいたのだ。

人生とはいつもそうだ。

目の前にあるものから片付けてしまうから後ろに潜むものは片付けられないのだ。要するにどんなに暇だと思っても人間は常に忙しいのだ。暇だと思っている奴は、目の前に潜むものさえも奥に奥に押し込み、そのまま消えるのを待つ。だから、そんな奴の頭は収納スペースがいっぱいある部屋へと変化してゆくのだ。

「お前ら、何しているんだよ…？」

大塚が挑んでいた『大切なもの』はステージクリア出来なかった。俺ら4人が映っている鏡は、やがてヒビが入る。

第三十話：大切なもの（後書き）

「お前らはやつぱりそうだったんだな」屋良はそう言って、俺から去った。その人の人生はあの人が決める。そんな人生ゲームはこの世にはないんだよな。俺らもブランコに乗っているサラリーマンも思った。

第三十一話：鏡のミレ

「何やってるんだよ…？」

俺らは固まっていた。女子高生は急な出来事で焦ったのか俺らの顔を何回も見ていた。

「いや、ただゲーセン行っただけだよ」

大塚はそういつていたが顔は全然そんな事を少しも言いたくないような顔をしていた。大塚は自分が苦しいのだろう。

「ゲーセンなら近くにあるじゃん。ゲーム機もあるしさ」

「…」

俺も大沢も大塚も何も言えなかった。むしろ言いたくなかった。フタリノアトヲツイテイタなんて…。

「何をしていたんだって聞いているんだよ！！」

屋良は近くにあったゲーム機を強く叩いた。壊れたのかピーピーって鳴ってディスプレイには『係員を呼んでください』と表示してある。俺らも係員に修理して欲しい。本当の事も嘘の事も言えないロボットのような心を。

屋良が怒鳴っても何も言えなかった。ロボットの心を持った男3人は、何も言えない。

俺は耐えきれずに下を見た。緑色のゲーセンの床が、いろんな形の足跡によって、黒みを帯びていて、緑色を主張出来なくなっている。俺の心ももしかしたらゲーセンの床のように、足跡のようなロボットの心が、本当の心を包んでしまったのだ。

ゲーセンの床も係員がモップを操って綺麗にする。俺も、係員に掃除してほしい。

今の俺らは、ゲーセンよりも不幸なんだ。

「俺らの後を着いてたんだろ？」

俺はその言葉に感じて黒みを帯びた緑色から光が射す方向を向いた。

「正解かぁ。賞品あるのかな？」

屋良は笑いながら自分が壊したゲーム機を見つめた。ちょっと反省してるかも…。かわいいな。

「行こうぜ」

俺らが一言も言えないまま屋良と碯が去った。ゲーセン独特の雑音が、俺の耳を通り過ぎていた。

「何があつたんだろ…」

女子高生がボソツと呟いてどっか行つた。他の女子高生もゾロゾロとどっか行つた。

思い出す。屋良が色んな女子に告白して破れて、嘔泣きをしながら俺らにいつも何かをおごらしていたな…。笑い、励まし、俺らは屋良の青春をいつも見ていたな。

あいつは、新たな青春に向かって旅立ちたかつたんだなと俺は思う。あいつも、俺らの青春の旅立ちを願って応援してたんだな…。ならばここは屋良は卒業したんだと思え…。

「稲垣、大沢、追うぞ」

えっ…。

「追うんだよ。屋良に本当のことを言つて謝るぞ」

…まあいいか。

俺らはゲーセンを走って去った。

ゲーセンの前にある50人乗りのバスの前を綺麗にスルーして屋良のもとへと走っていく。走っていく…走っていく…走って…。

「見つかんねえよ…」

都会の街を走つたが、やっぱり見つからねえ。だってここは都会だもの。

「出番ですね…。パトラッシュ」

大沢が俺を見て言った。すると俺はパツとそれを思い出した。

「パトラッシュって、稲垣のあだ名？」

大塚が聞くと、大沢が頷いた。

「そう。俺鼻が利いてて寒がりだからパトラッシュ。俺の中学の頃

のあだ名」

寒くて死んじゃってしまっただけからね。パトラッシュ。

「寒がりなパトラッシュって……」

大塚がこの頃の中学生のネーミングセンスに引いていた。世の中には色んなセンスがあるんだよ……

「匂いを嗅ぐためなんか物をくれ！大沢殿」

「任せとけ。パトラッシュ」

そして、大沢殿は匂いを嗅ぐために必要な物を持ってきました。

……納豆？

名犬、パトラッシュの目の前にはおかめ納豆が一個置いてあります。

俺……何すればいいの？……ワン。

「行けー！！パトラッシュ！！」

「行けるかあ！！」

大塚とツツコミをハモったため、ちょっと気持ちよくなった。

たく、あいつら超うぜえ。てめえらに見られなくても俺はちゃんと出来るってーの。

屋良はそう思いながら公園の近くを歩いていた。

「慎」

「なに？」

話の話題はもうわかってるっての。

「稲垣たち、もう反省してると思うよ」

ほら、正解。

「たぶんさ、私たちの事を思ってやったんだと思うよ」

はあ、うぜえ。

ほんと人間の心理はわからねえ。ケンカをした後第三者と話をすると必ず相手には悪気はないって言うんだよな。たぶんだけど、そう言った奴は自分の力で仲直りさせたい。仲良しキューピッドになりたいんだよな。今日の前にもいるし……。頼むから俺だけのキュー

ピッドになつてくれ（キモい）。

「ねえねえ、ここで休もうぜ」

屋良は公園のベンチに指を指した。

「いいよ」

碯は了解してベンチへと向かう。すると、公園の奥で錆びた鉄と鉄がこすりあつてゐるような音がする…。キーキーと。

「ねえ、あっちで何か聞こえるよ」

碯は公園の奥を指で指した。そこには確かに高い音。

俺は恐る恐るケータイのカメラモードのフラッシュ機能を使った。霊、もう出てもいいぜ。

ケータイのフラッシュで照らし、俺は正体を見破った。高い機械音の犯人は、淋しくブランコを漕いでいるサラリーマン。これ是一件落着…。麻里…。

俺は振り返ると、碯が震えていた。他にいるの！？幽霊。

「麻里…」

「お父さん…」

えっ？

「これならどうだ！！パトラッシュー！！」
「ファブリーズ……」。

「屋良見つける気あんのかよ？」

名犬パトラッシュもさすがにキレて大沢にツツコミをした。

「てか俺これ持つてるじゃん」

大塚は笑顔で俺らに屋良著作の恋人はサンタクロースツアープランを見せた。

「早く出せよ」

俺と大沢は声を揃えてツツコミをした。

「でもこれで屋良が見つかるぞ」

俺はこう言つて屋良著作のプランの匂いを嗅いだ。うん、紙の臭い。

「こつちだあ！！」

俺は叫んで走り始めた。二人は普通に引いていた。キャハハ。俺が辿り着いた場所は公園。ここで臭いは途切れているんだ。こ
こしかない。

俺が確信すると声が聞こえた。

「誰かいるぞ」

「なんで、なんでお父さんがここにいるの？今日は仕事じゃないの
？」

これで分かったぞ。ブランコに乗っていたのはサラリーマンの幽
霊じゃなくて、碯のお父さんなんだな。世界って狭いな。

碯さんは娘に会ってからずっと黙っている。付き合ってるからな
のか？

「クビになった」

碯さんはボソツと呟いた。

…クビ？リスとトラの融合形態のあれ？

「クビ…」。なんで私たちに言わないの！？

麻里は涙ながらに碯さんに聞く。麻里はやっぱり涙が似合う女だ
なあ（おいおい）。

「生活に困るから、言いづらかったんだ」

「じゃあ今までの給料はどうしてたの？」

「金融会社に借りて…」

金融会社、ヤミ金？

麻里はその言葉を聞いて崩れた。てか泣き崩れた。

「なんでこんなことになるの…」

麻里は何回もそう言って泣き続けていた。

俺はただ立ち尽くすしか無かった。目の前に好きな人が泣いてい
るのに何も出来なかった。要するに俺は弱いんだ。

俺はやや曇りの夜空を見上げてそう思った。

「なんか碇が泣いてるぞ」

大沢がそう言って指を指している。

「えっマジ!？」

俺らがその方向を見ると、泣き崩れている碇をサラリーマンと屋良が見ている光景が目映った。

「何があつたんだ?てかあのサラリーマン誰だ?」

大塚が名探偵のように疑問を生み出す。

「さっきからクビがなんたらとか言ってるぞ」

「へえ…碇の父ちゃんクビにあつたんだ」

二人の会話を聞いた時、俺はハッと何かを思い出した。

『クビにしたんですか』

『いい人だったのにね、碇さん』

碇さん…?

「ねえ、屋良の彼女の名字って何だっけ?」

「いきなりどうしたん」

二人は俺を見てはははって笑った。

「碇だろ。覚えてるよそんくらい」

まっ、間違いない!!碇のおとんをクビにしたのは、まぎれもなく俺の父親、稲垣吾郎だ!!(S M A Pではありません)

俺の頭の中で何回もベートーベンの『運命』が奏でられていた。

俺んちは碇家の敵になり、その彼氏の屋良が敵になって…もう訳分からなくなっている。

そんな中でも一生懸命頭脳の細部まで使い頭の中を生理して、俺はある事を決めたのだ。

まあそうゆう訳でケンカ中の屋良よりも先に碇を幸せにすり事に決めました。(別に碇の事は好きではないが…)

第三十一話：鏡のヒビ（後書き）

乱文、長文申し訳ございませんでした。

屋良との仲直りのためある作戦を決行した俺ら。

果たして、その作戦とは何だろか？

第三十二話：やったもん勝ち

屋良とケンカした日の午後八時。午後八時といえば親父が帰ってくる平均的な時間。俺のケータイのディスプレイには20:05と表示されている。

もうそろそろ帰ってきてもいいはず。俺はそう思っただけで自分の部屋の窓から外を見てみると、親父愛用黒光りのベンツが駐車場に入っていた。

「やっとなんか来たよ」

俺は一人しかいないのに親父帰宅の情報を伝え部屋から出る。

「ただいま」

親父がいかにも疲れてますって声で帰宅を伝える。するとお袋が玄関まで走ってきた。また室内サザエさんごっこが始まる。

「ちよつとお父さん」

俺がサザエさんごっこに割り込みしたように親父を呼ぶと、一気にサザエさんごっこが終焉を迎え、お袋が親父のカバンを持ってスタコラと廊下を歩いていった。

「どうしたんだ」

「ちよつと話があつてさ」

「金なら貸さないぞ」

貸さなくてもあるっての（貯金）。

「えっ？ 裕さんをクビにしないで欲しい？」

親父は驚いて俺の話を食い入るように聞く。そりゃそうだよな。俺は一回も裕さんに会ってないのになんでいきなりそんな事を言うんだろうなって普通みんな思う。

「そう。クラスメートに裕さんの娘がいて、その娘が俺のお父さんがその会社の社長だって知っていて、なんかこれじゃあ生活出来ないって言われたもんだから言った訳」

「そうなのか？ 別に断ってもいいんじゃないか？」

親父が怪しそうに俺を見る。だって元不良だしね。

「お父さん、女の目がどれだけの凶器になるか知ってるの？もうタ
イタニック号も沈んじゃうぐらいすごい威力だぜ」

俺の例え攻撃に親父はひるんだ。

「イエス青春？」

親父が親指を立てて聞いた。

「イエス青春」

俺は親指を立てて応えた。

青春をいち早く体験した青春の先輩に青春の手助けをしてもらう
とは…なんて俺は思っていた。

「だけどクビは取り消せないんだよね」

え…。

「なんかの大きな会社と契約を結ばなきゃな」

これって世にいうプロジェクトってやつですか？

「そのプロジェクトが成功すれば、裕さんのクビが無くなるって訳
ね」

「無くなるっつーか保留だな」

保留かよっとツツコミたくなった。

でもそのプロジェクト。どうしても成功させてえ。俺はこういう
挫折から成功へと歩む物語が超好きなんだよね。

絶対成功させる方法…、誰かに成功させればいい訳だよね。

俺は鉛筆の命でもある黒鉛の頭蓋骨をコッソコッソと机に当てて
考える。

プロジェクトに成功すれば、裕さんのクビが無くなるんだよね。

裕さんはこの間何してろって話だよね。裕さん、プロジェクト、成
功、クビ…。

鉛筆の命が折れた瞬間、俺は思いついた。

人は思いついた事をすぐ行動に移すから成功するんだ。例えばマ
ンガ家が誰も思いつかないストーリーのマンガを書くから雑誌に連
載される。そのまんま保留したら誰かにそのストーリーを使われる

かもしれない。そう、要するにやられる前にやれって事だ。
つまり…。

「碯さんがプロジェクトをやればいいんだよ」

都内にある喫茶店で俺と碯さんは向かい合って一つのテーブルに座っている。周りから見れば微笑ましい親子のお茶シーンに見える。「プロジェクトをやる…？私、その会社をクビになったものですよ」

「だーから、プロジェクトはそんな会社と関係ねーんだろう？」

「はあ」

「碯さん、会社の名刺持つてる？」

「はあ、持ってますが」

「よし」

「株式会社ベリーコム取締役の碯です。宜しくお願いします」

要するに、やったもん勝ちだよ。会社の許可なくても名刺ありやいいんだよ。そうすりゃ…。

「ベリーコムの方ですね。お待ちしております。さあ、どうぞ」
古風な雰囲気醸し出す料亭。そこに座っているスーツを来たビジネススマンと碯さん。テーブルの上には和という豪華さが魅力的な和食の数々。そこに目立つように置いてあるビールとコップ。まさにプロジェクトなのか？

なぜそんな重要な契約の日時と場所が分かったのかというと、そんなんサザエさんごっこを聞けばいいだけ。俺の親父、すぐおかにベラベラ話すんだもんな。

まあ、要するに、やったもん勝ちなんだよ。

誰だって誰の話も聞かずに自分が望む人生を進む事は出来ないんだ。例えば言うところドラクエだって周りの人々と話さなければストーリーを進める事は出来ないんだ。まあ攻略本を買えば一番いいんだが、そんな分厚い本に頼らなくても俺は出来る。

「いやあ、君は趣味がよく合う」

取引先のおじさんがははと笑いながら碯さんのビールを注ぐ。

「どんな人でもドラクエは面白いですよ」

ドラクエかよ！？この二人のおっさん、趣味がドラクエかよ。ど
んだけ暇なんだよ。

「やっぱり二回目のラブソーンが強いですよ」

「ええ、もうラブソーンを倒したのですか？」

おっさん二人は次々と話を広める。

誰だよ、ラブソーン。こんなおっさんにラブソーンを倒せるなら
ケイン・コスギはどれだけ倒せるんだよ。ラブソーン…。

「じゃあ今度倒してくださいよ。ラブソーン」

取引先のおじさんはビールをグイッと飲んで碯さんに助けを求め
る。

ありやありや、初対面で約束しちゃったよ。どんだけ仲良くなっ
たんだよ、あの二人？

「いいですよ。それよりプロジェクトの事を…」

碯さんは30枚程度の書類を鞆から取り出した。

「もういいよ、承認だよ、承認。ラブソーンのためならこんなの楽
だよ」

え…。プロジェクトよりラブソーンかよ？

俺と碯さんはそう思った。

てな訳で社長もわからないままプロジェクトの承認はとれた。こ
れって、俺の勝ち？

俺・ラブソーン・碯さんVS取引先・社長（親父）。勝者、俺・
ラブソーン・碯さんチーム。商品、プロジェクトの承認。

ああ、ラブソーン。君のとてつもない戦力のおかげで勝つ事が出
来たよ。俺は心の中だけでもラブソーンに握手をした。てかラブソ
ーンって誰だよ。

「いやー、まさか成功したなんてね。プロジェクトってこんなに簡単なんだね」

親父に呼ばれた碇さんは、親父にこう言われたそう。俺もそう思わなかったけど。

「しかも、プロジェクトの打ち合わせで私も二人がいたカフェにいらしてね、二人の話は聞いていたよ。それならやつてもらおうじゃないのって思っ、行くはずだった社員に行つていたよ。いやー、君、クビ免除だよ」

親父：。漢字間違ってるよ。言つていたよだよ。（作者の間違い）

てなわけで、碇さんは親父が社長のシステムエンジニアの会社、ベリーコムにまた入る事になった。

「お父さんがねー、まこちんと慎に会いたいってえ、だからウチに来てくれない？」

意味も無くケータイのストラップをガチャガチャと鳴らしながら俺と屋良に告げ、教室から去った。

ちなみにまこちんとは俺のあだ名で、女子の間だけで使われている。なぜまこちんと呼ばれたかと言うと、俺の書いたパンダの絵があるマンガのまこちんってキャラに似てたからだ。あだ名って怖いなって想う。

いよいよ、俺と屋良が碇家に参上する日が来た。

屋良はドキドキしていた。俺は何故呼ばれたんだと思っっているんだろう。とりあえず俺はそう察し、屋良を呼んだ。

「どうしたん？」

「いいか、屋良。嘘でも緊張してる。分かったな」

「えっ…、はあ」

屋良はキョトンとした顔で俺を見た。何故緊張？俺の辞書に緊張なんて文字は無いんだぜ。と思っっているのだろう。

「嘘でもだ」

「分かってるって」

「嘘でもだ」

「なんで二回言ったん？（笑）」

テンポのいい漫才らしきものを繰り広げ、俺は裕家のインターホンをゆっくりと押した。

ピンポンと言う音が裕家の中を巡り反射して俺と屋良の耳に入った。

その直後、トテトと小さな足音がして、ゆっくりとドアが開く。休日の家の中でも化粧を欠かせない裕の顔が目に入る。まあ、俺らが来るからしてるんだろう。妹に萌がいるから分かるが、家の中にいる女子は怖い。萌を例にすると、まずはご飯は上品に食わない。うたた寝はするし、好きな歌は熱唱する。いわゆる、ヒーローショーを終えた後のヒーローと怪獣の会話みたいな奴だ。

「（ヒーローレッド）おまえ強く蹴りすぎ」

「（怪獣）わりいわりい。タバコ吸うけ？マイルドセブンなんだけど」

「（ヒーローレッド）ありがとな。でも俺マルボロなんだ」

「（ヒーローグリーン）俺マイルドセブンなんよ。くれい」

「（怪獣）はいよ」

「（敵戦闘員）次どこだっけ？」

「（ヒーローピンク）次…うわぁ、けっこう遠いぞ」

「（全員）マジかよ！！ダルいな」

てな感じ。なんか夢を壊すような感じ。しかも出かける前にメイクする顔が尚更怖いからビビる。ビビる大木。

「どうしたの？」

「いやいや、何でもない」

色々考えてたら急に聞かれたから俺は焦った。

「おはよお、慎」

「おはよ」

「じゃあ上がって」

碯が上がった後に続いて俺と屋良も上がった。

うん。なかなかお洒落で風水もけっこういい。不良で過ごした少年時代、女の子の家に入るなんて久し振りだから嘗め回すように家を見た。一方屋良はヤバいぐらいドキドキしてる振りをしていた。彼は演技が上手いですねえ。あまりに上手すぎて碯が引いてますねー。それに気付かない屋良もすごいですねー。

やる気が無い実況みたいに俺は思った事を頭の中でまとめた。リビングに通されると、そこには何故かスーツ姿の碯さんとテーブルいっぱいのご馳走と、テーブルに置ききれない程料理があるのにまだキッチンで何かを作っている碯さんの奥さんがいた。

これで分かった。お礼を言いたいんだな。

俺と屋良は軽く頭を下げた。

「やあ、よく来たね。まあどこか適当に座って」

「はい、失礼します」

高校受験の面接試験の時、座ってくださと言われてた時こう言えと何回も言われたっけな。

ほんとに適当に座った。長方形のテーブルの長い横の方で碯と屋良は隣になつて短い方に俺と碯さんが向かい合うように座って、碯さんの奥さんは長い方に屋良たちと向かい合って座った。

「稲垣君、この前は本当にありがとう。君のおかげでこの家族は食べたいけると同じだよ」

碯さんが頭を下げながら言った。

「いや、大丈夫ですよ。第一、この事を考えたのは屋良ですし」
「えっ？」

当の本人である屋良が小さく呟いた。

「人見知りが激しくて初めて見た人とは緊張して話せないからな、社長の息子でしかもそんな人見知りをしない俺に言ったんだよな。なあ屋良」

もちろんそんなの嘘だ。ただ屋良と碯が長続きするための嘘だ。

俺は社長の息子であり、人見知りをしないのは本当だけだね。

「そうだったの？」

碯に聞かれて屋良は周りを見渡した後、『そうだよ』と返した。

「マジ嬉しい。超ありがと」

マジと超の使い方を間違っているが、それが彼女の感謝の表現なのだから別にいいやと想った。

「屋良君、本当にありがとう。これからも麻里の事をよろしく頼むよ」

碯さんは両手を差し出して握手を求めた。

屋良もそれに答えて、両手を差しだし強く握った。これでいいんだ。これで。

結果、屋良と碯の付き合いは親公認となり、二人の愛はもっと深まったのだ。うーん、青春。

屋良と碯は休み時間に二人になって立ち入り禁止になっている屋上でいつも話しているとクラスで有名になった。

碯さんが会社に戻ってから、よくやってると親父もベタ誉めして、給料も成績もウナギ上りだそうだ。

その頃、日本を騒がせていたのは、この近所にある公園で起きた殺人事件であった。

第三十二話：やったもん勝ち（後書き）

次回、新編突入。ドラッグについて語る。

第三十三話：薬物と彼女事情

ドラッグ。この言葉を聞いた事が無い人は少ないと思う。

一度服用した者は、一時期集中力が高まり、勉強に集中出来たり、食欲が無くなりダイエットに成功するが、どんどん服用していくうちに依存症になり、知能障害や、手足が麻痺状態になる事や、死に至る事もある。つまり逃げたい人の必死アイテムって奴だ。他にも逃げる方法はあるのにわざわざ死に至るようなものを服用するなんて元から頭がおかしい奴なんだ。

そんなドラッグが、またニュース番組で特集されてるのは俺たちの近くの公園で起きた、少年殺人事件だ。

俺んちがテレビで映ったって喜んでたのも束の間、小さい頃から遊んでいたこの公園で起きたというショックの方が大きかった。

なんか被害者の遠い親戚のような気分で、今ニュース番組を見ている。

今見ていたニュース番組で分かった事は、少年の周りに粉末の覚せい剤がばらまいてあって、少年の制服のポケットから覚せい剤の粉末と注射器もあり、手首には注射を打った後があるため、薬物を服用した事に間違いないと言えるだろう。だが、薬物で死んだとは言えず、腹部には何者かが刃物で少年を刺した後があるため、刺殺であるだろう。少年の死体はベンチの上に置いてあったという。

これは本当に青春小説？と読者が思うのでここでこの話は止めよう。

「でも気になるよな。あの事件の犯人」

ありやま。話を戻されちゃったよ。

屋良とも仲直りをし、いつもの音楽準備室で話をしていた。やっぱり近所で起きた事件だもの。気になるよな。

「やっぱ。俺もあの事件の後あの公園を通ったらパトカーや報道

陣や野次馬とかいっぱい焦りたい。しかも取材されてとりあえず『ボス口トをやっても二億円は当たりません』って言うておいた」「関係ねーだろ」

屋良のボケと大沢のツツコミも復活した。でも屋良は裕がいるのに何故ここへ？

「屋良、なんで麻里ちゃんの所に行かねーの？」

俺は4人と話す時は麻里ちゃんと呼んでいる。そう呼ばないとなんか屋良がキレるからだ。キレる屋良は怖いぞ。

「たまにはおめーらとも話したいなって思っ」

なんていい奴だ。だから麻里ちゃんも惚れるんだな。

「ところで大沢は凜ちゃんとうなん？」

「結構離れてるから会えないんよ。しかも年上だぜ」

「何！？」

全員が驚いた。a i k oが30歳だと同じくらい驚いた。まだ高校生かと思つてたのに…。

「んで何歳なん？」

興奮した大塚が聞く。

「19歳」

「19！！！？」

尚更驚いた。来年成人式やん。暴れちゃうのかな？

「てか付き合つてねーし、池永が勝手に俺を師匠扱いしてくっ付こうとしてるだけ」

「じゃあ池永は大沢の事好きって事じゃん」

「おん」

「うぜー！！大沢がやってるから尚更うぜー！！」

「わりいか？」

「おん」

屋良と大沢の会話を聞いてある事に気付いた。

屋良には麻里ちゃんがいるし、大沢には凜ちゃんがいる。大塚に

は30人増えたメルアドの中から一人、愛ちゃんと何回か会っている。恋愛関係についていけないのって俺だけ！？

うわぁ。出遅れた。あの三人が輝いて見える。頼むから黒崎に女が出来て欲しくないな。

もう高校生でいられるのもあと一年半、エンジョイな高校生活を送れるのはやっぱり彼女だ！！よし彼女を作ろう！！

「ところでさぁ、新曲出来た？」

偉大なる決断をした俺に大沢は聞いてきた。

「新曲って…？」

全然知らねーんだけど。

「えっ…！？福元が作った曲を今週中に完成させるんだぜ」

思い出した！！1ヶ月前、ライブハウスの中で福元に楽譜を配られて…。

『1ヶ月後にまた練習を行う。それまでに完成しなきゃあ…キヒヒ』

悪魔の笑みで俺達に言った福元はやる気満々だった。

配って以来楽譜見てねー。てか捨てたかも。てかこの小説がバンド小説だって事も忘れてたよ。

「楽譜…捨てたかも」

「マジかよ！？」

「あらら…」

「バイバイ稲垣」

「ギターソロもいくつかあったぜ。大丈夫かよ」

あんのかよー！！

俺は絶望の崖に立たされ、今、崩れる瞬間にいる。俺ピンチ！！頼む！！楽譜貸して！！」

「俺の楽譜ベース用だし」

「俺もドラム用」

そんなぁ…。

俺は諦めずに大沢に近付く。

「大沢、ギターソロがあるの知ってるなら楽譜あるよな。貸してくれ」

すると、大沢は沈黙して、俺から目を逸らしこう言った。

「合体されてるのを福元に見せてもらっただけだから家にはない……がーん。」

絶望の崖が崩れ、俺は永遠に続く地獄谷へと落ちていく。福元という大王がいる地獄谷へと。

まずはゴミ箱から楽譜を探して一晩で完成させて、彼女を作るためのフリー女子高生リストを作って……ああ、忙しい……！

誰か俺に永遠という時間を下さい。有効に使う事を誓うから……。

そんな事を言ってもくれるはずがないからとりあえず早退して楽譜を探す旅にでた。

病気でも無いのに帰る時の帰路はなんて気持ちがいいんだろう。

これを自由研究にして発表したい。

その時、なんとなく向いた視線にとんでもない物が映る。

橋の下を支える部分に背中をつける女子学生。茶髪のロングヘアにすらつとした体、まさしく俺のタイプだ。俺はしばらくの間、女子学生を見ていた。

すると、女子学生がこっちを向いて笑顔を送った。その笑顔が可

愛いのなんの。俺もたまらず笑顔で返した。

「どうしたの？うちの顔になんか付いてる？」

「可愛い顔がついてる（笑）」

「何、ナンパ？あたいはナンパだけは受け付けないねえ（笑）」

「あたいつて何時代だよ（笑）」

「時代じゃねーだろ（笑）」

いい！！こうゆう感じ。会話を途絶えないようにする努力に俺は今感動している。

「名前何てゆうの？」

「普通名前を教えてもらう場合は自分の名を名乗ってから聞く。これ礼儀の基本だよ。テストに出るよ」

「あたいはテストも礼儀もないね（笑）でもうちの名前は鈴木亜里紗。あんたは？」

「俺、稲垣誠。１７歳」

「１７歳！？じゃあうちより年上じゃん」

「えっ？何歳？」

「華の１５歳ですけど何か？」

「いや、全然何もないけど」

「きっぱり言うなよー！！てか誠って言うんだ。じゃあまこちん決定 あたいに二言はないよ」

まこちん決定。何故女子は俺をまこちんとつけるのだろう。何かにつけてちんって付けるのが好きなのか？そういえばピカチュウをピカチンって呼んでたな。ゲームフリークに謝れ。

急に亜里紗はケータイを取り出して、俺に突き出した。

「メアドとケー番教えて」

「分かった」

俺はケータイを受け取るとやけにジャラジャラ付けてるストラップが電話番号などを打ってるうちにボタンの上などに落ちてすげー邪魔になる。それに苦戦しながらも俺は登録を終了した。

「サンキュ 早退したん？風邪？」

「まあそんな感じ」

「大丈夫？もう帰った方がいいんじゃない」

心配の眼差しで俺を見つめる亜里紗。…可愛い。こんな目で見られるのは大ダメージだ。

「ありがとう。じゃあ帰るわ」

「またにん」

伸びている爪を見せびらかすように手を振る亜里紗。俺もそれに答えるように手を振った。

初対面でこんなに親しくなるなんて…もしかこれってチャンスって奴？やべー、青春を胴上げて！。

俺はずっと亜里紗の顔を思い出しながら帰路を歩いた。

第三十三話：薬物と彼女事情（後書き）

いつも読みにくい小説を読んいただき、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2186a/>

空に歌えば

2010年10月19日13時27分発行